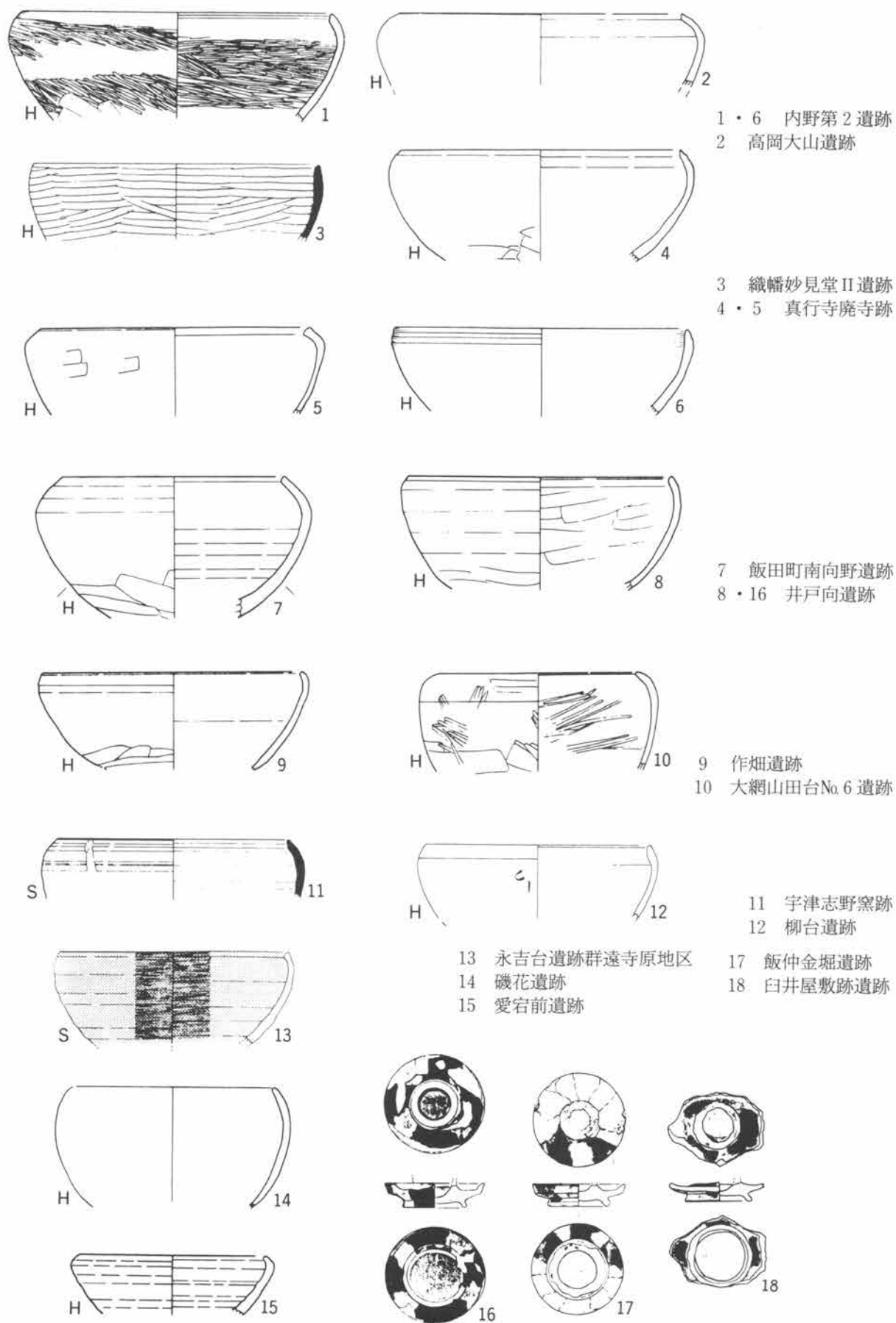




第114図 鉄鉢形土器 5・托

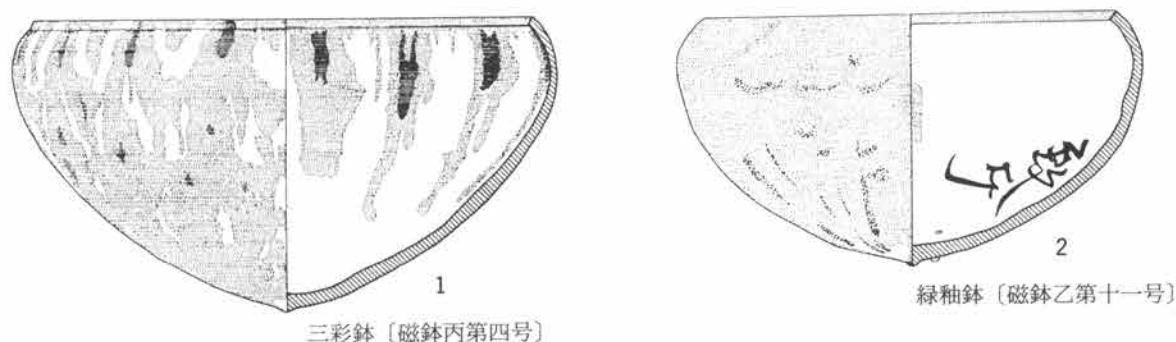
一般に、丸底のものから、8世紀前半に尖底に変化し、その後に再度丸底形態になるとされる。正倉院等の寺院に見られる金銅・銀製・漆塗り製を主体とする鉄鉢形の形態のものについては、奈良時代のものは一般に口径1に対して高さは0.658ないし0.677であり、平安時代のものは0.644であるという結果が公表⁹⁾されている。奈良時代のものに比べると平安時代のものは高さが低く、肩部の張りが強いという。

房総地域については前述のように8世紀第3四半期から9世紀後半まで見られるが、尖底と丸底のものについてはいずれも8世紀第3四半期から認められる。平底の形態は9世紀初頭前後からであり、年代的に出現が遅れるようである。なお、須恵器の鉄鉢については、宇津志野窯跡から出土が見られ、房総地域でも9世紀中葉までは生産されていたことが判明している。

また、68個体の鉄鉢形土器のうち、須恵器が15個体、土師器が51個体、不明が2個体であり、土師器が圧倒的に多いことが房総地域の鉄鉢の特徴と言える。これを上記の形態別に見ていくと、尖底形態は須恵器が9個体、土師器が9個体、不明が1個体であり、丸底形態は須恵器が3個体、土師器が13個体である。一方、平底形態は、14個体すべてが土師器で占められている。これについては本来の鉄鉢は尖底・丸底のものが一般的であり、平底の鉄鉢は異形であるので、須恵器には存在しないのであろうとも受け取れそうである。平底の鉄鉢が果たしてすべて鉄鉢としての用途をもたされていたかは不明であり、中には鉄鉢の分類から外れるものが存在する可能性も残される。しかしながら、土師器の平底形態のものすべてが怪しいわけではなく、角田台遺跡出土(第113図2)のものには胴部外面に「千仏」の墨書がなされており、明らかに仏教に関連するものであることが分かる。

白幡前遺跡出土のもの(第113図7)には胴部外面に「佛」の墨書がなされており、しかも同一の竪穴住居跡内から須恵器蓋に「佛」と墨書がなされたものや瓦塔片が出土している。中林遺跡の鉄鉢については(第113図3・4・5)、竪穴住居跡出土のものであるが、香炉蓋が共伴し、柳台遺跡(第113図9)でも同一の竪穴住居跡から浄瓶又は水瓶と考えられる遺物(第104図16)が出土している。織幡妙見堂II遺跡(第113図6)からは竪穴住居跡から丸底の土師器の鉄鉢(第111図12)が共伴しており、これらから類推する限り仏具として機能していたことは確実であろう。

また、第110図12の鹿穴遺跡出土の須恵器の鉄鉢は、底部中央外面が涙滴状の尖底となっている。このような形態は房総地域でも1例のみであり、注目される。涙滴状の底部形状は金属製の鉄鉢でも管見では認められなかった。しかしながら、正倉院の奈良三彩・二彩・緑釉陶器の鉄鉢の中に類似¹⁰⁾するものが認められる。奈良三彩(第115図1)の鉄鉢の底部形態については、器形自体は通常の尖底であるが、表面に彩色された釉薬が焼成により溶け、それが底部中央外面に溜まり、涙滴状に固まったものである。すなわち、



第115図 正倉院宝物磁鉢

自然の作用でできた産物と捉えられるものである。

鹿穴遺跡の遺物についても8世紀第3四半期の所産であり、奈良三彩とほぼ同時期のものと考えられ、この奈良三彩の出来上がりの形状を模倣した可能性も否定はできないであろう。従来から、鉄鉢形土器は金属器の鉄鉢の模倣であり、他の器物からの模倣の可能性は低いと考えられてきたが、三彩陶器等の写しも存在する可能性を考えた方が良いのかもしれない。

なお、鉄鉢とセットになる托(鉢支)については、大網山田台遺跡N0.3遺跡の銅製托が知られるほかに、3遺跡から奈良三彩の托が検出されている。奈良三彩の托(第114図16~18)は最大径が7cm前後のもので小形である。さらに托の類例としては、未発表資料ながら土師器のものが1点認められる。鉄鉢を供養具として使用する場合には、托(鉢支)を用いるのが通常であったとされるが、鉄鉢と比較してわずかな量である。これは、托の大半が木製であったからであろうか。

ちなみに、鉄鉢については正倉院には黒漆塗りの木製や乾漆製のものが残されており、古代においても木製の鉄鉢がある程度普及していた可能性は比定できない。しかしながら、『壺囊鈔』¹¹⁾によれば「鉢は鉄鉢なるべし、木鉢は外道の鉢なり」とあり、本来は木製の鉄鉢を使用してはならないことになっており、その点から考えれば木製鉢の普及については一考を要するであろう。

墨書・線刻・ヘラ書き文字

今回の仏教関連の墨書土器等で最も出土遺跡数が多い文字は「寺」であり、83遺跡を数える。ほかに「仏」「佛」「釈迦」「僧」「尼」「ササ(菩薩)」「法印」「三寶」「大般若」等があり、上総国分僧寺等の国分寺関連遺跡からは「講院」「院」「四院」「金光」「法」「卍」等の仏教関連の施設や「經典」等の題と考えられるものが出土している。

「寺」の文字のほかに出土が多いのは「佛」であり、「仏」又は「佛」が出土した遺跡は38遺跡を数える。「寺」と「佛」又は「仏」が同一遺跡で重複して出土した例は22遺跡であり、「仏」・「佛」の文字と「寺」の両者及びどちらかが出土した遺跡を合計すると97遺跡に達する。

この「寺」の墨書についてはどのように評価すべきであろうか。「寺」の墨書が出土したからといってすべてが寺院と直結するものでないことはもちろんである。例えば人名等¹²⁾にも見られることからそれは明らかであろう。しかしながら、「寺」の墨書が出土した遺跡で、仏教関連の器物・墨書土器や遺構が出土している遺跡は、51遺跡を数える。この数値から考える限り、ある程度何らかの形で寺院と結びついた遺物であることを物語るものであろう。また、「寺」の墨書土器しか仏教関連のものが見られない残りの32遺跡の中でも、寺の名前が読みとれる遺跡は7遺跡に達する上に、「寺」の墨書が複数出土している遺跡も多い。このように見てくると、時代や共伴を度外視した遺跡毎という大きな観点からみた場合という但し書きは付くものの、「寺」の墨書土器出土遺跡は何らかの形で付近に寺又は僧侶が存在したと評価すべきものと考えた方が無難であろう。

「寺」銘墨書土器等で寺の名称と考えられるものは、六拾部遺跡「白井寺」、長熊廃寺跡「高叡寺」、将門鹿島台遺跡「福々寺」、野毛平植出遺跡「手寺」、大袋台畑遺跡「赤界(男)寺」・「赤寺・埼寺」、白幡前遺跡「大寺」、久野高野遺跡「桑田寺」、萩ノ原遺跡「塔寺」、南麦台遺跡「殿寺」、真行寺廃寺跡「武射寺」・「大寺」、西寺原遺跡「西寺」、遠寺原遺跡「土寺」・「山寺」、名木廃寺跡「度寺」、海神台西遺跡「岑寺」、山口(Loc20)遺跡「忠寺」、広遺跡「坂津々寺」、北海道遺跡「勝光寺」、平木遺跡「弘寺」、下総国分尼

寺跡「尼寺」、下総国分僧寺「造寺」・「尼寺」・「東寺」、多田日向遺跡「三綱寺」・「多理草寺」・「多料草寺」・「観音寺」、南河原坂窯跡群「堺寺」、内野台遺跡「祥寺」、鐘つき堂遺跡「釈迦寺」・「□祥寺」、草刈遺跡「草刈於寺坏」、宮台遺跡「大福々寺」、郷部・加良部遺跡 (Loc15) 「忍保寺」・「大寺」・「新寺」、大井東山遺跡「新生寺」、上総国分僧寺「金寺」・「光寺」「法花寺」、上総国分尼寺跡「法花寺」、結城廃寺跡「大寺」・「法成寺□」、鳴神山遺跡「波田寺」・「播寺」、久野遺跡「赤穂寺」、一夜山遺跡群「赤穂寺」・「阿光寺」、宮本台遺跡群「秋寺」、岡田山遺跡「前寺□」、山田・宝馬古墳群「小金山寺」・「小金寺」、文六第6遺跡「砂田東寺」・「祥寺」、滝東台遺跡「三井寺」であり、39遺跡を数える。

寺の名称は、吉祥句、郡名・地名、佛・菩薩の名称や經典由来と考えられるもの、僧侶の職名、東西南北の方位・大小等の大きさ、塔等の寺院建物・造営に関するもの、その他不明に分類できる。

郡名・地名例

「白井寺」「高置寺」「桑田寺」「武射寺」「坂津寺?」「堺寺」「草刈於寺坏」「波田寺」・「播寺」「小金山寺」・「小金寺」「砂田東寺」・「三井寺」・「多理草寺」・「多料草寺」・「赤界(男)寺」・「赤(埒)寺」「赤穂寺」・「阿光寺」

吉祥句例

「祥寺」「□祥寺」「大福寺?」

佛・菩薩の名称や經典由来例

「釈迦寺」「観音寺」「金寺」「光寺」「法花寺」「法成寺」

塔等の寺院建物・造営に関する例

「塔寺」「造寺」

東西南北の方位・大小等の大きさ例

「大寺」「西寺」「東寺」

僧侶・僧侶の職名

「尼寺」「三綱寺」

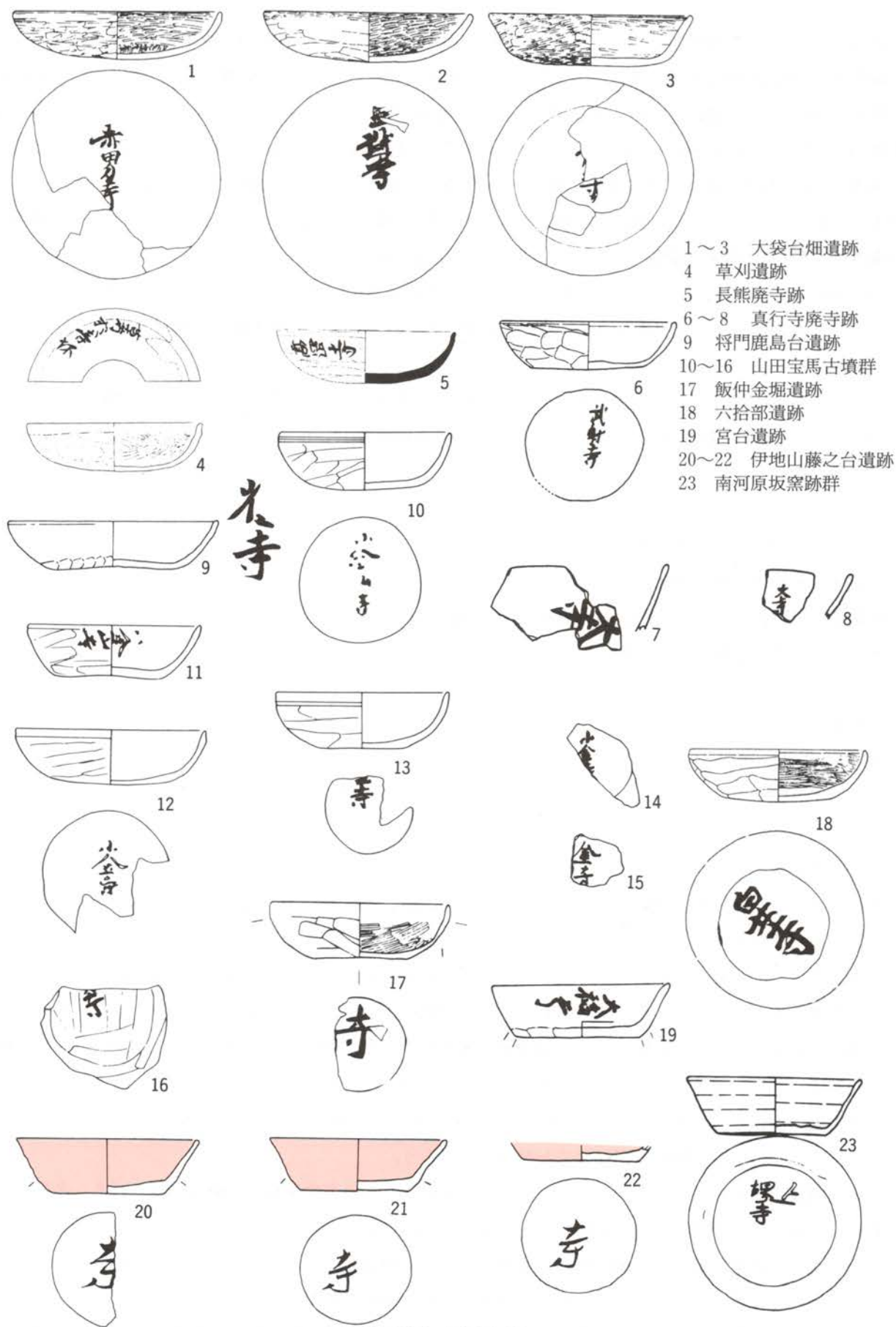
その他の不明例

「殿寺」・「土寺」・「山寺」「度寺?」「岑寺」「忠寺」「勝光寺?」「□弘寺」「忍保寺」「新寺」「新生寺」「秋寺」「前寺□」「手寺」

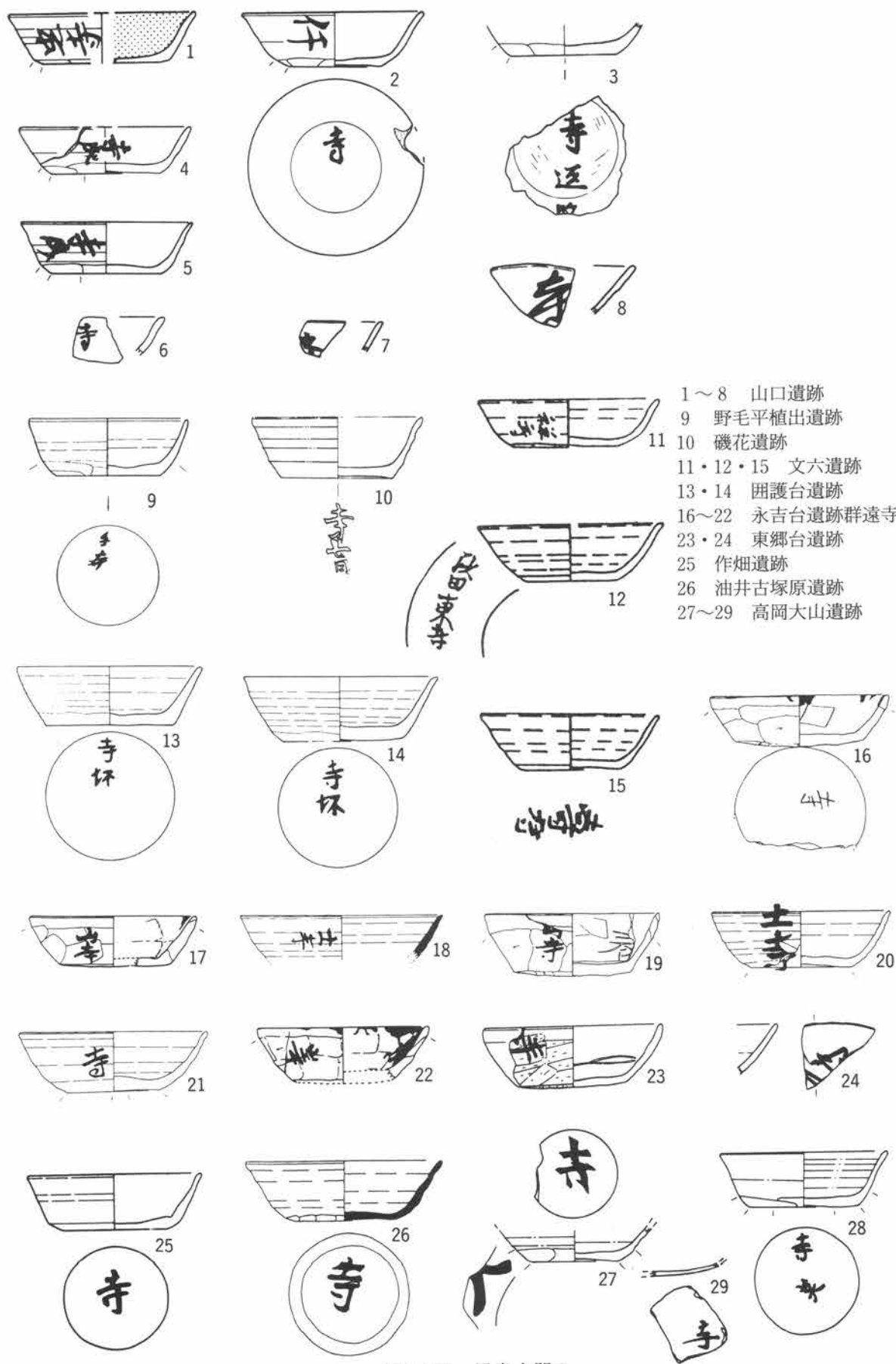
地名と考えられるものの出土が最も多く、そのうち郡名と考えられるものは真行寺廃寺跡出土の「武射寺」の墨書土器1点のみである。地名の場合、同音を別な文字で表したと考えられる遺物も見られ、一夜山遺跡の「赤穂寺」と「阿光寺」、多田日向遺跡「多理草寺」と「多料草寺」、鳴神山遺跡「波田寺」と「播寺」がある。また、地名の中には「砂田東寺」のように方位を入れるものも存在する。このことから、方位と寺の組み合わせのものは、その前に本来の寺の名前が付く可能性もあることが窺える。これは、「山寺」についても「小金山寺」例から同様なことが言えるだろう。

同一の遺跡であるのにもかかわらず、いくつかの異なった寺の名前を有する遺跡が見られる。多田日向遺跡は「三綱寺」・「多理草寺」・「多料草寺」・「観音寺」の寺名が見られる。これはどのように解釈すべきであろうか。多理草は地名、三綱は僧侶の役職名、そして観音と3つの異なった名称で呼称されており、これを同一の寺と考えるか、別々に分かれた堂毎の名称であるか判断がつかない。

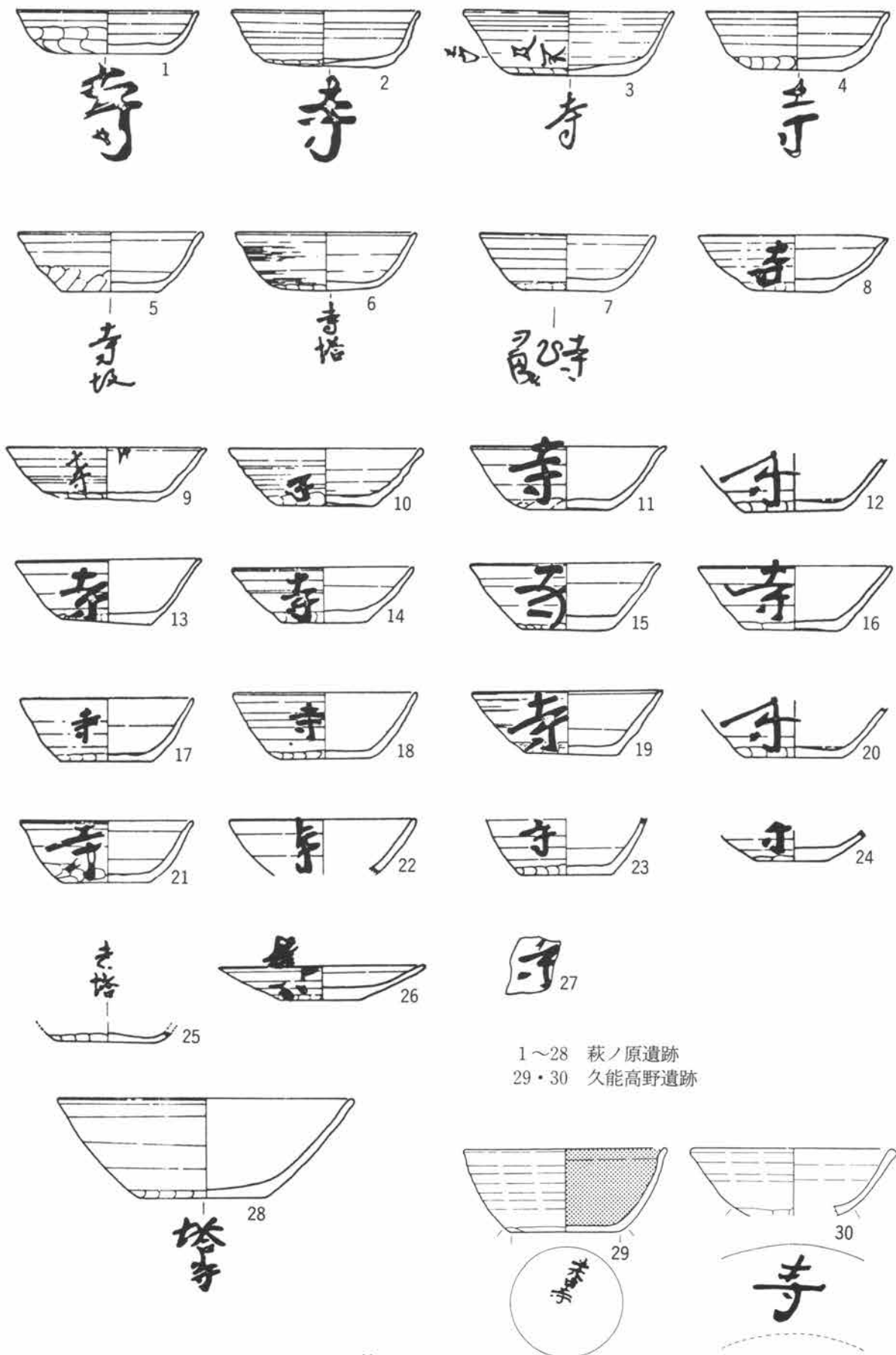
『日本霊異記』等では「山寺」と称された寺や「堂」の記載が見られるが、房総地域からも「山寺」の



第116図 墨書土器 1

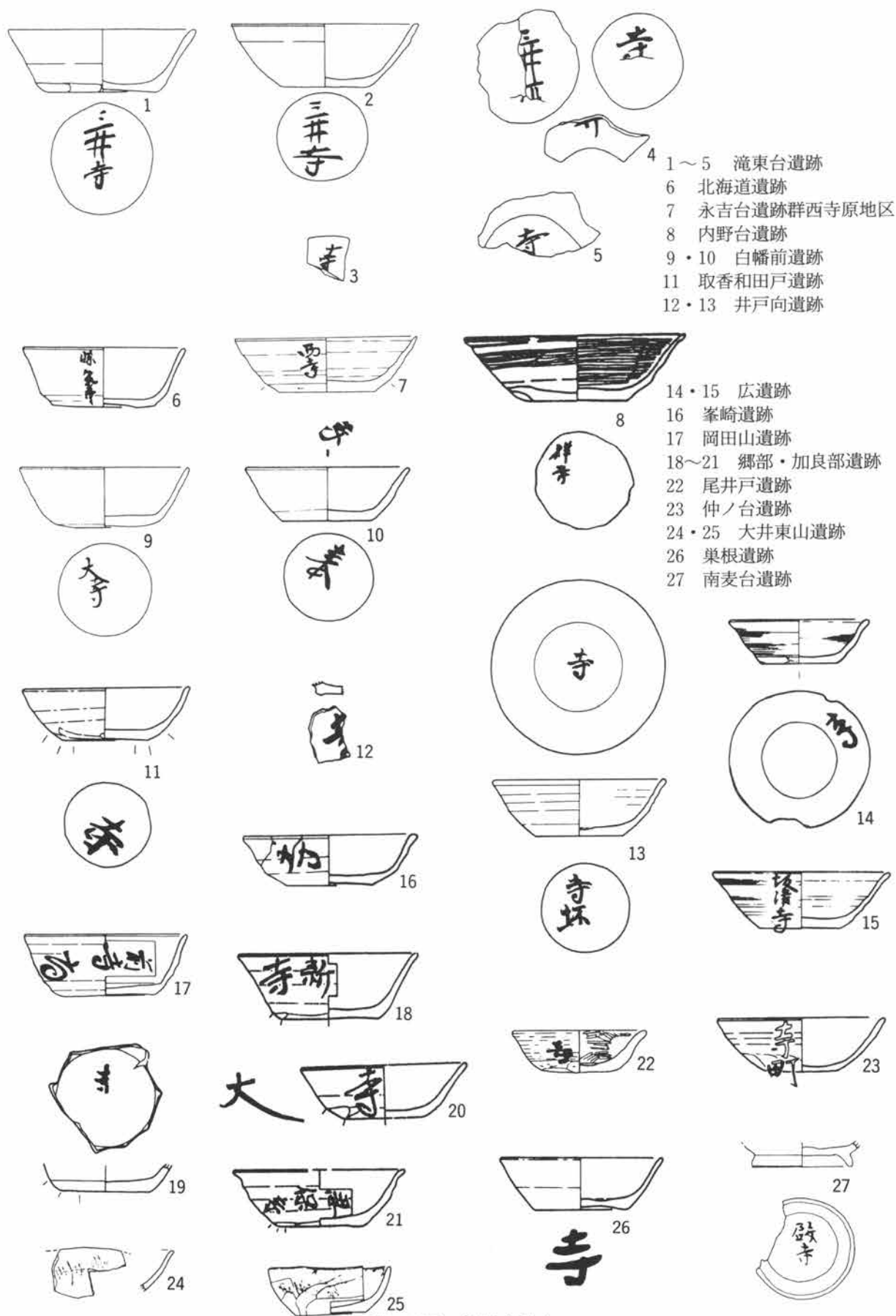


第117図 墨書土器 2

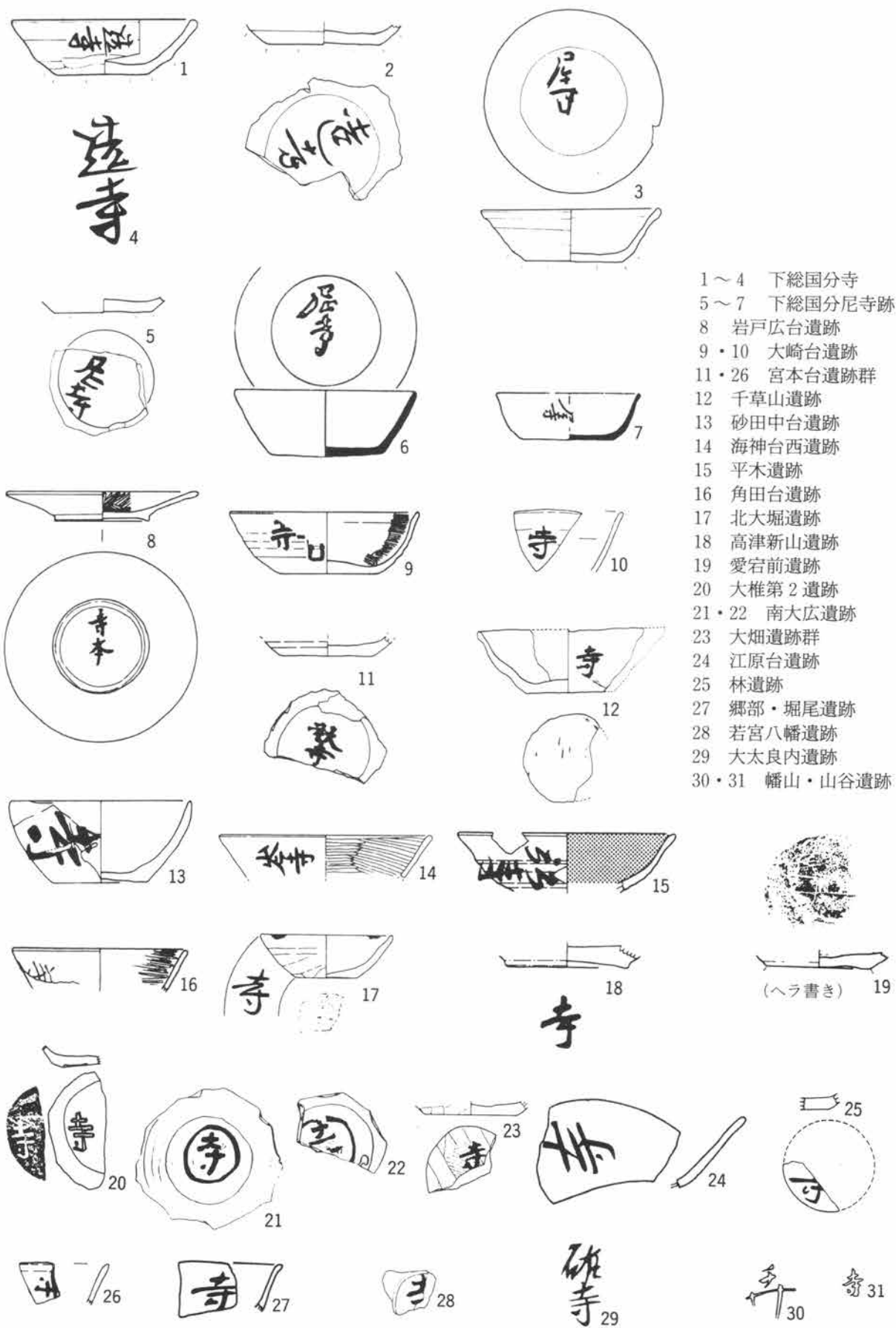


1~28 萩ノ原遺跡
29・30 久能高野遺跡

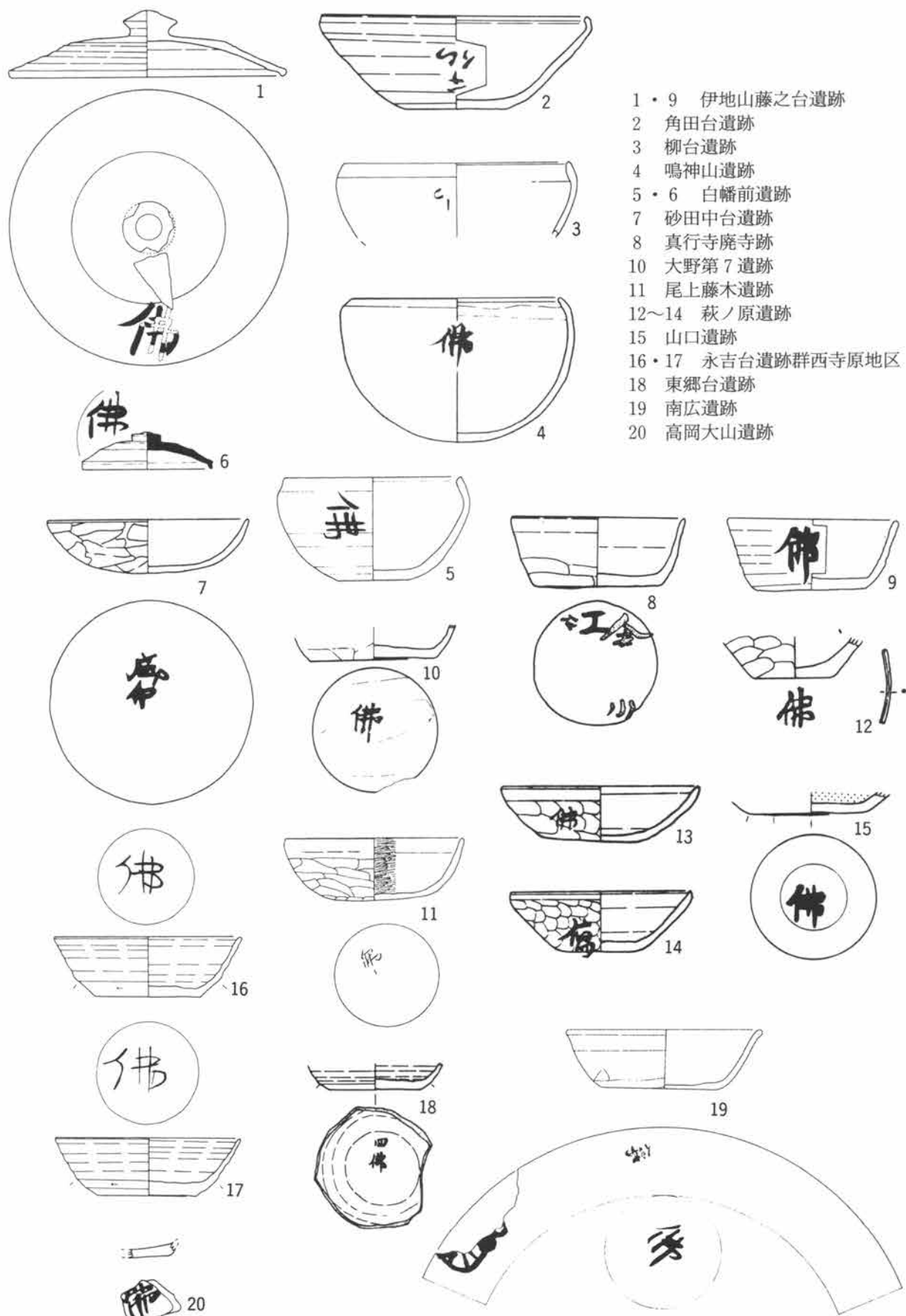
第118図 墨書土器 3



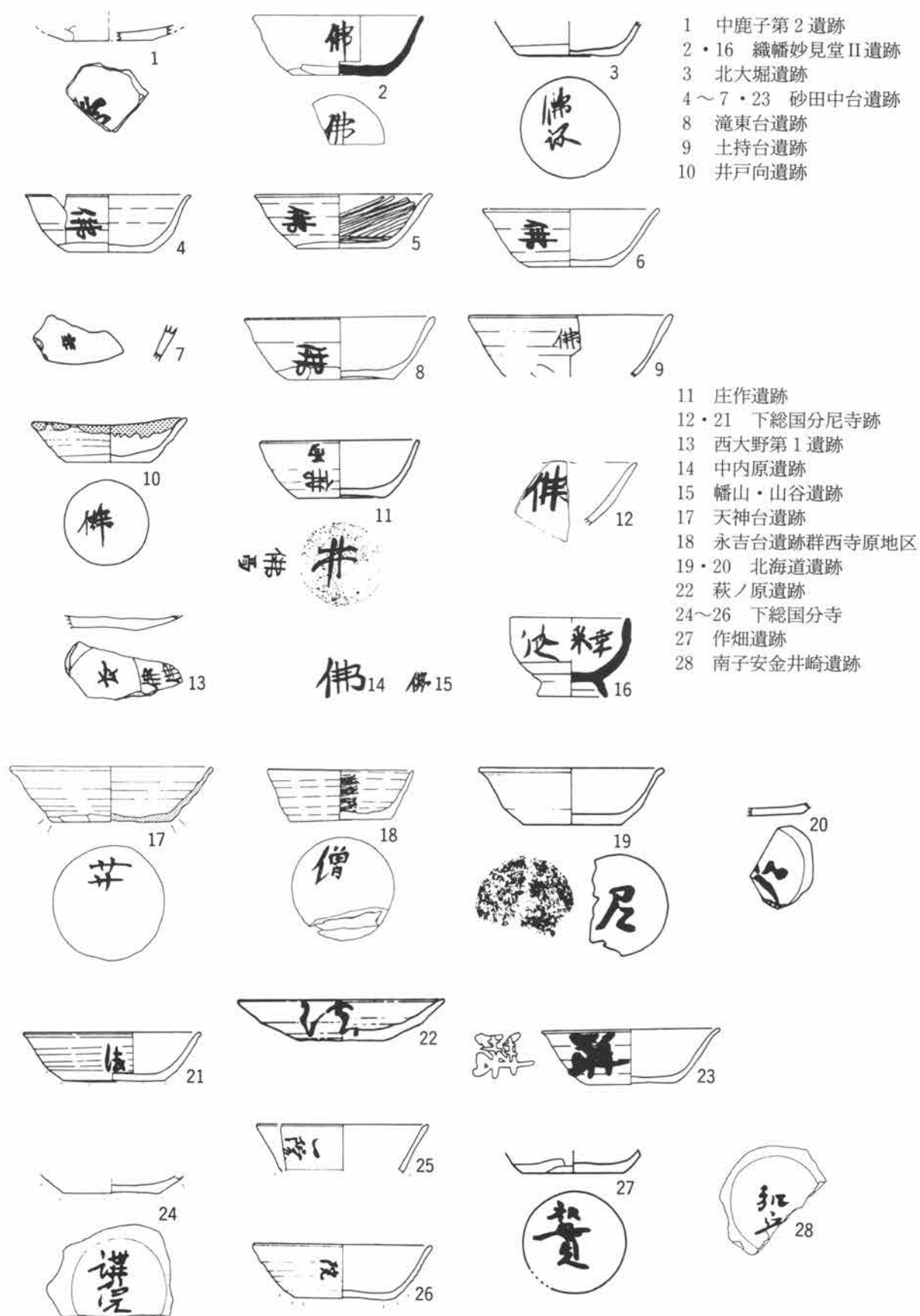
第119図 墨書土器 4



第120図 墨書土器 5



第121図 墨書土器 6



第122図 墨書土器 7

墨書土器が出土することは注目される。また、逆に「堂」の出土例は検出することができなかった。

この山寺については『日本霊異記』¹³⁾の例では僧侶の修行の場所として建立されたようであり、国家又は特定の貴族・豪族や村落との関係はほとんど見られない¹⁴⁾との指摘がある。堂については、村落との関係が深く、里名や村名を堂の名とするものが多く、在住の専門僧侶がいない可能性が強いという。

房総地域の「寺」の実態は後節でも触れているように大部分の遺構が小規模な建物であり、『日本霊異記』にいう堂程度のものである。しかしながら、本地域では、「堂」の文字資料は現在までのところ検出されず、「寺」の出土遺跡が83遺跡を数える。このような現象は「寺」と名付けることに執着させるなにかがあったことも連想させるが、『日本霊異記』に描かれた畿内地域の様相との対比だけでは語れないものがあるのであろうか。いずれにしても墨書土器がこれだけ出土している地域に「堂」の文字が見られないということにも驚かされるのである。

仏教関連の墨書土器で最も遡るものは、大袋台畑遺跡「赤界（男）寺」・「赤（埼）寺」と草刈遺跡「草刈於寺坏」である。両者とも8世紀前半代と考えられるが、周囲には仏教関連の遺構は存在せず、遺物のみの出土である。これらの墨書土器と遺構が共に出土するようになるのは8世紀第3四半期からであり、鉄鉢などが出土する時期とほぼ重なる。

なお、このような寺銘墨書土器等で文献に記載された寺と合致するものも存在し、注目される。結城廃寺跡から検出された丸瓦にヘラ書きで「法成寺口」と記載されたものがある。『将門記』¹⁵⁾に将門の部下が「結城郡法成寺」付近で、敵の攻撃を事前に察知したとの記事があるが、結城郡内で大規模な寺院は結城廃寺跡以外考えられず、ここから法成寺のヘラ書きの瓦が出土したことにより、本来の寺院の名称が明らかとなったのである。

瓦塔

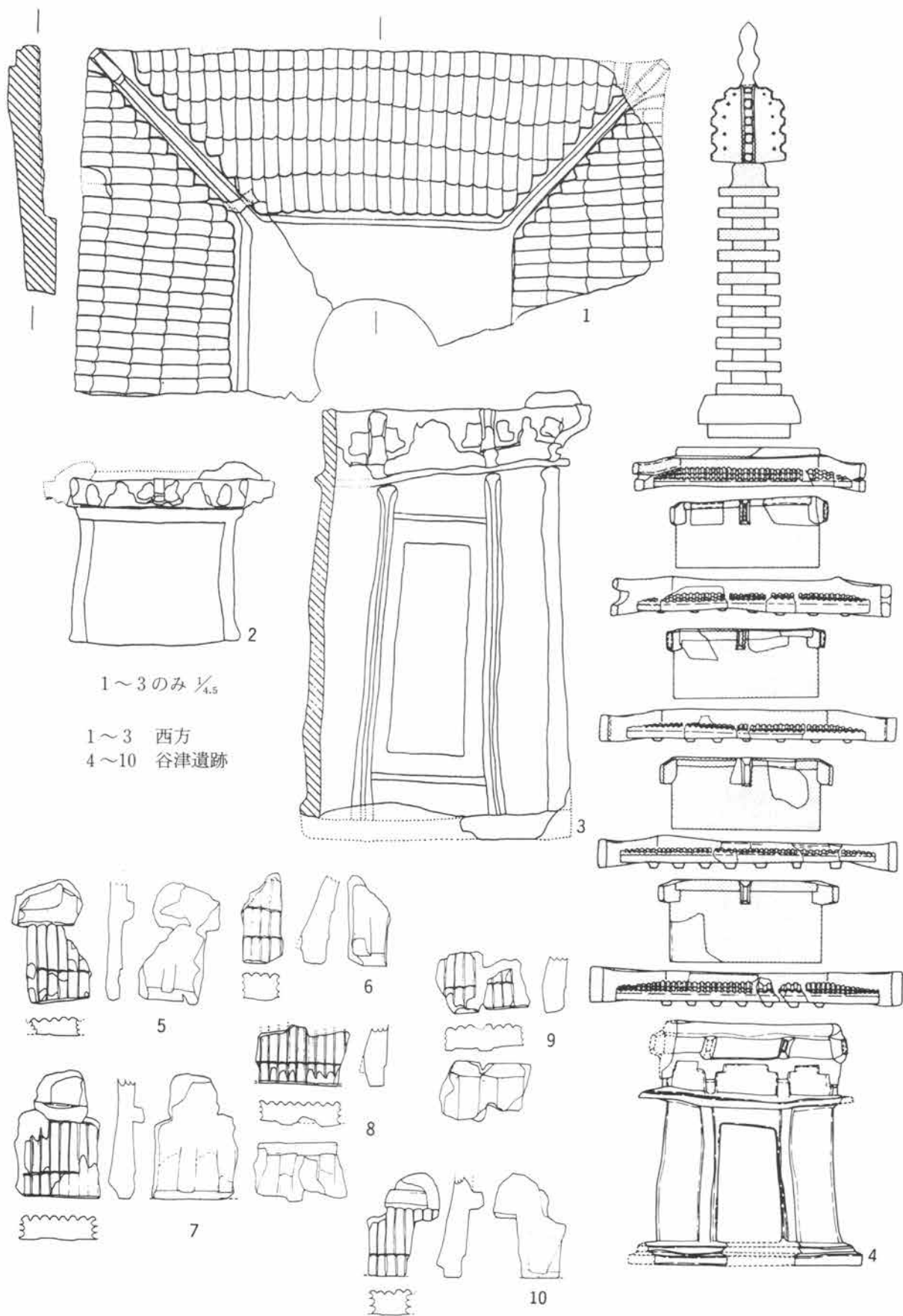
瓦塔の出土遺跡は40遺跡を数える。この数字は関東圏では、上野・北武蔵地域と比較すると少なく、他の諸地域と比較すると多い。ただし、北武蔵の例は須恵器生産の活発を物語り、52遺跡中10遺跡¹⁶⁾が須恵器窯跡からの出土である。房総では現在までのところ、窯業遺跡からの出土例は認められない。

本地域では、40遺跡中、25遺跡で仏教関連遺物・遺構が同一遺跡内から検出されている。瓦塔は、他の遺物と比較してその存在が目立つため、表採も多く見られる（4遺跡）ので、実際は大部分の遺跡で何らかの形で遺物が伴う可能性が考えられる。

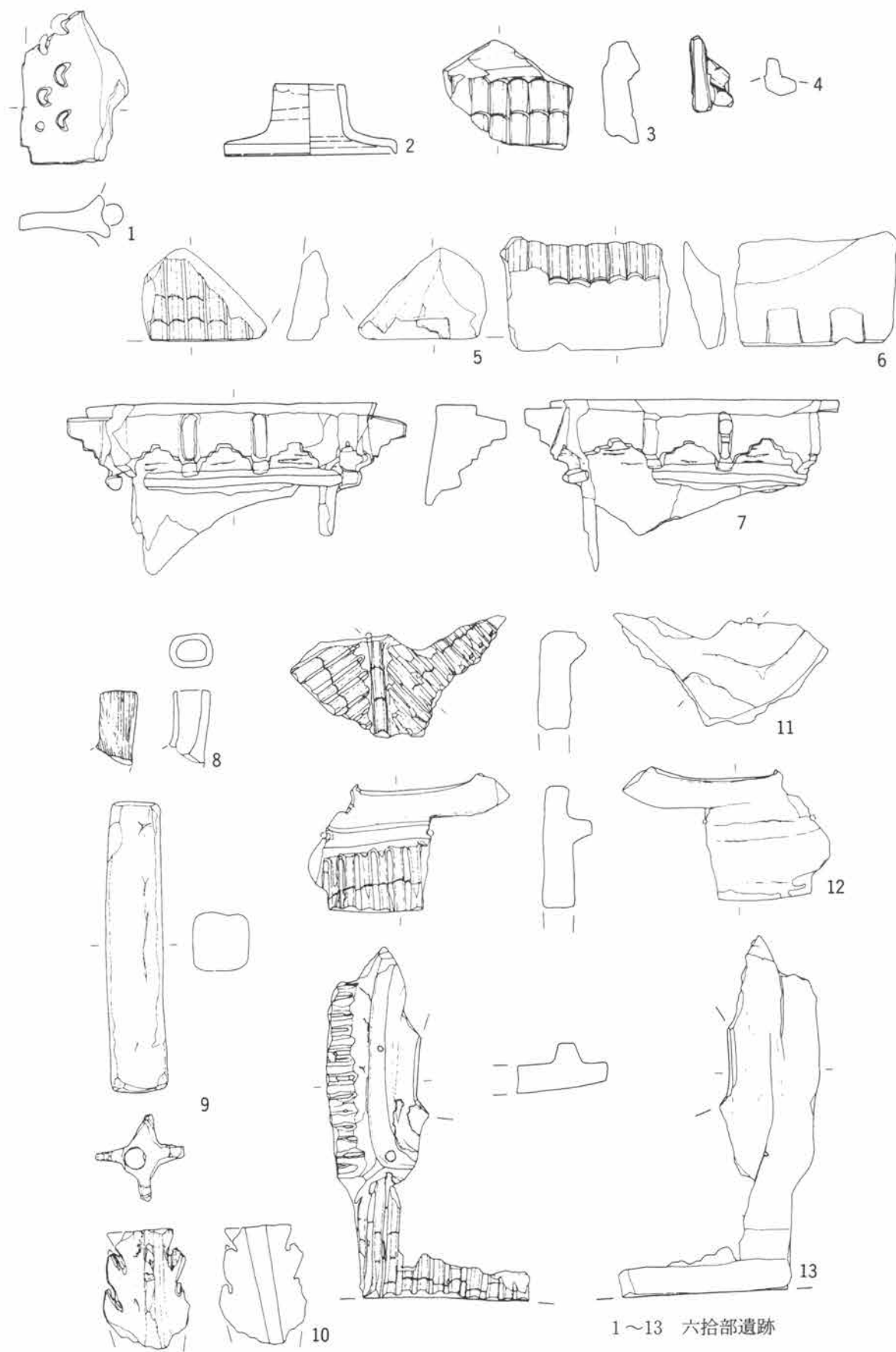
瓦塔については、還元炎と酸化炎のものが見られるが、還元炎のものについては、須恵器窯で焼成されていると考えられる。酸化炎のものについても須恵器窯で焼成された可能性が強いが、土師器の焼成土坑と同様な円形土坑¹⁷⁾で焼成された例も他地域では見られるので、どちらとも言えないのが実態である。瓦塔の中には赤色の彩色を施されたものや赤色と白色彩色を施したもの（第126図1・2・4・7）が見られる。瓦塔のみではなく瓦金堂も出土しており、両者の出現の時期は他の器物と同様に8世紀後半代であり、瓦塔の最盛期は9世紀代である。なお、関東地域における瓦塔の最古の出土時期は、8世紀前半代である。

仏像・小金銅仏等

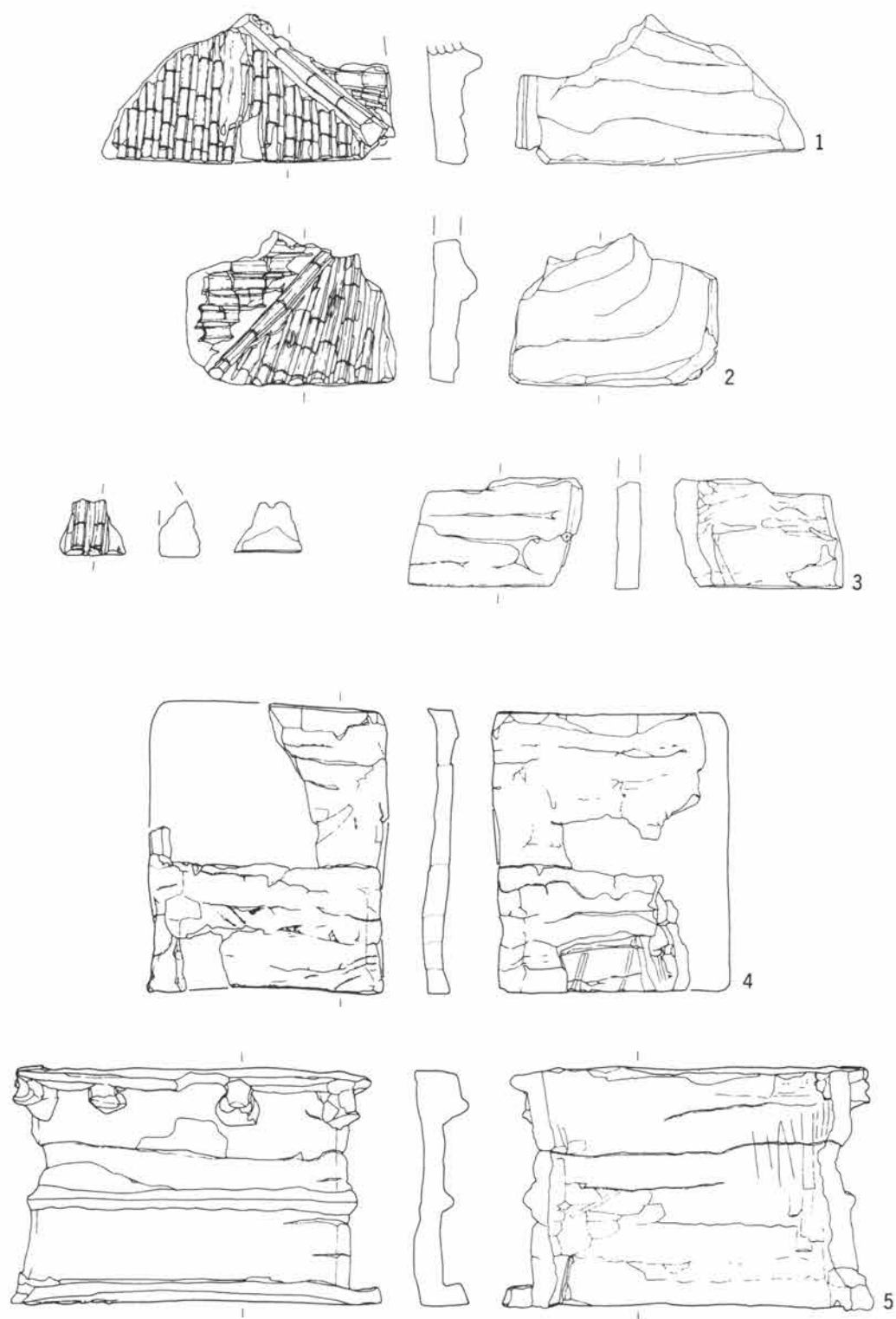
仏像・小金銅仏については、本県ではあまり出土が見られない上に、大部分のものが表土からの出土であり、共伴遺物がなく、明確に時期決定ができるものに乏しい。



第123図 瓦塔 1

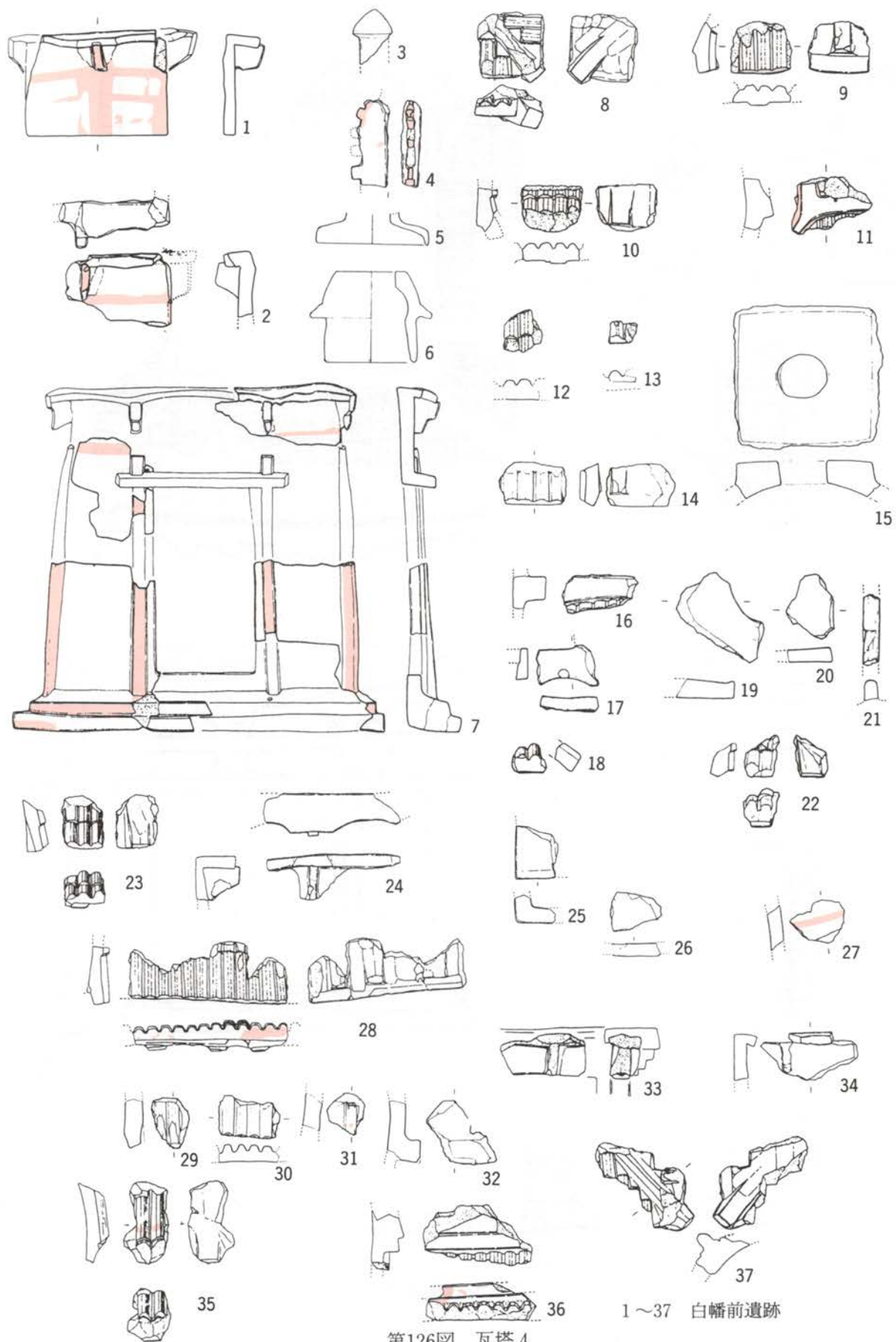


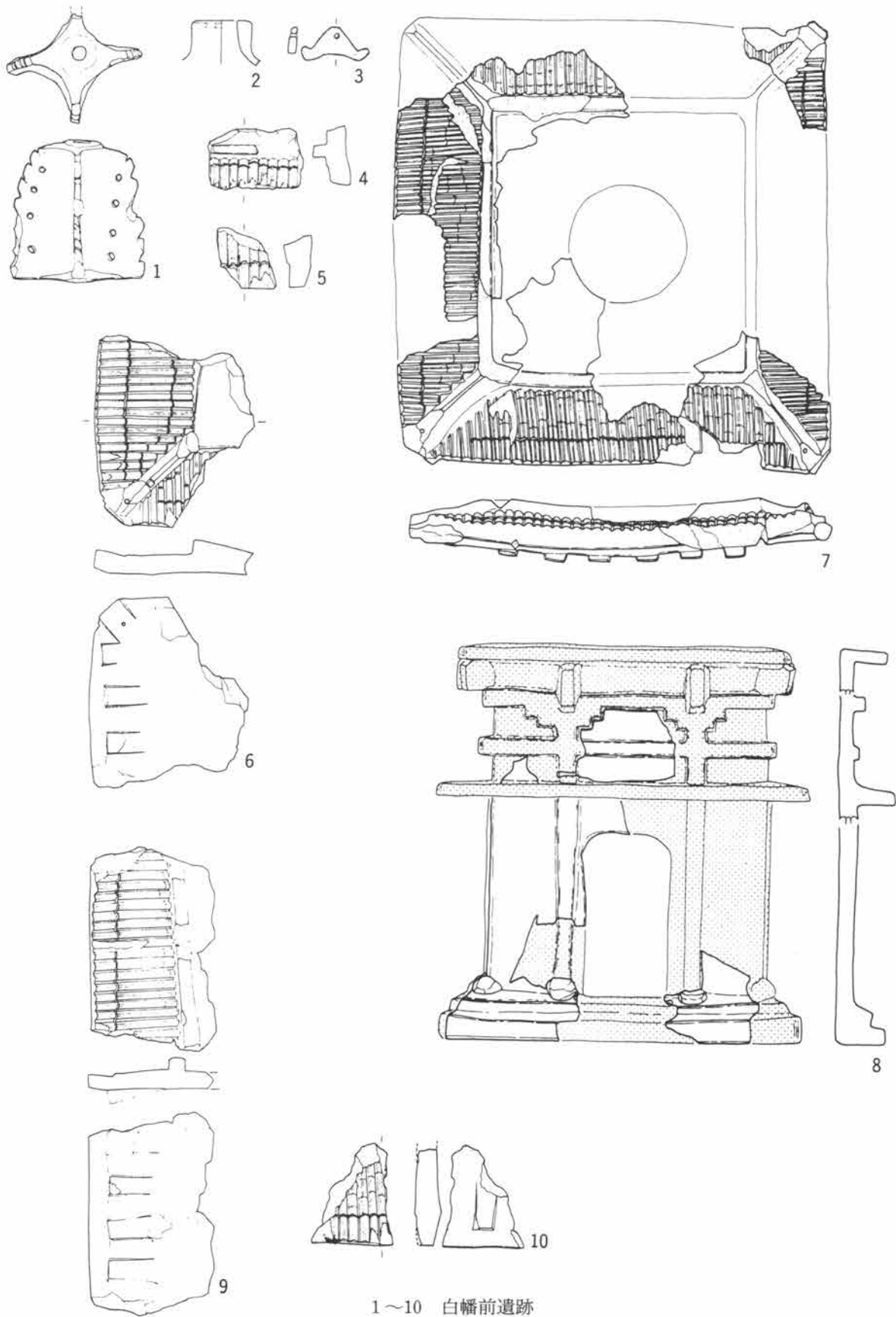
第124図 瓦塔 2



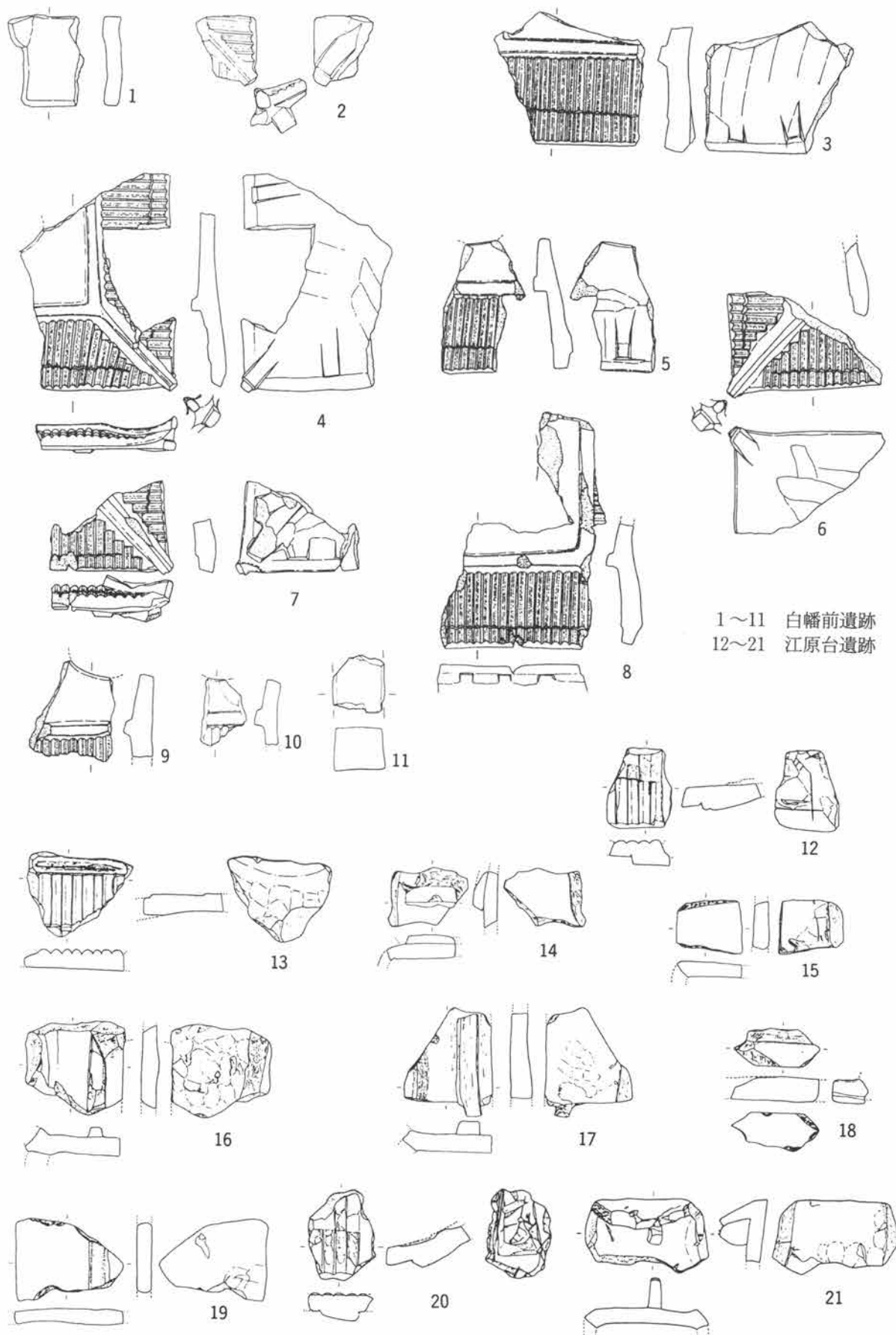
1～5 六拾部遺跡

第125図 瓦塔 3

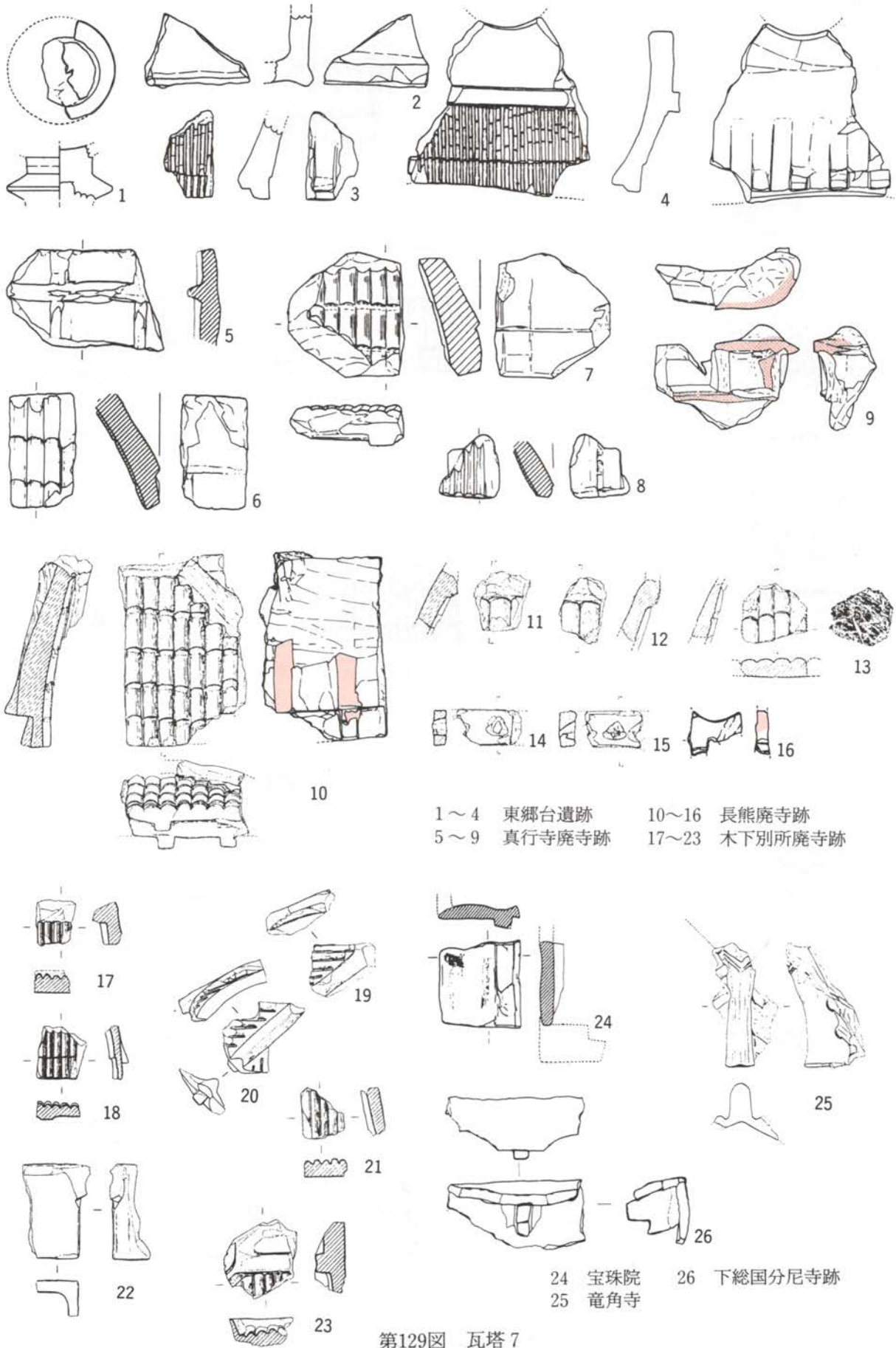


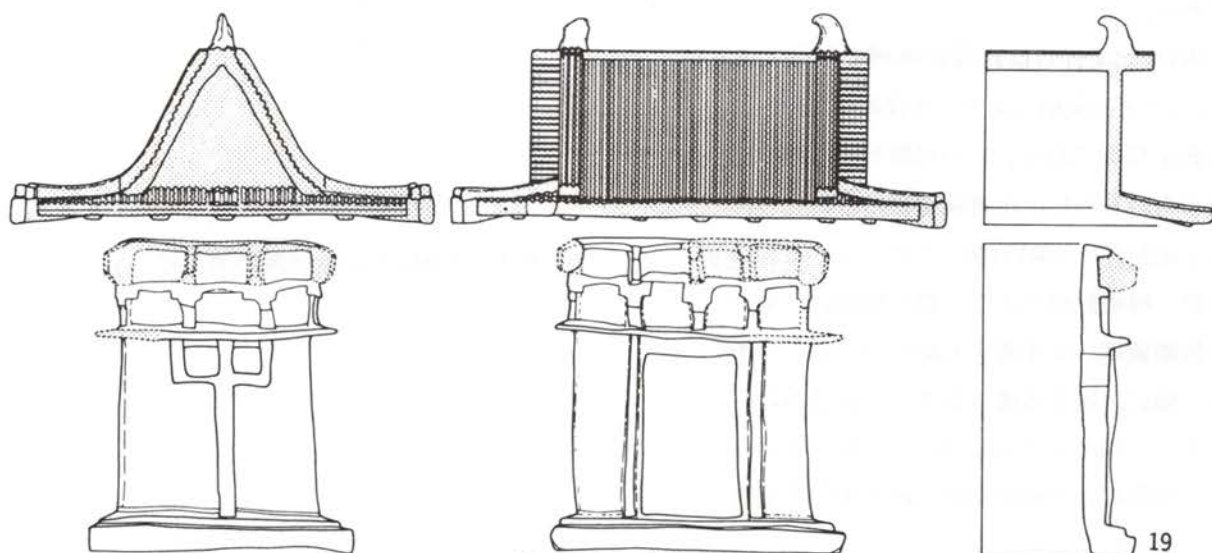
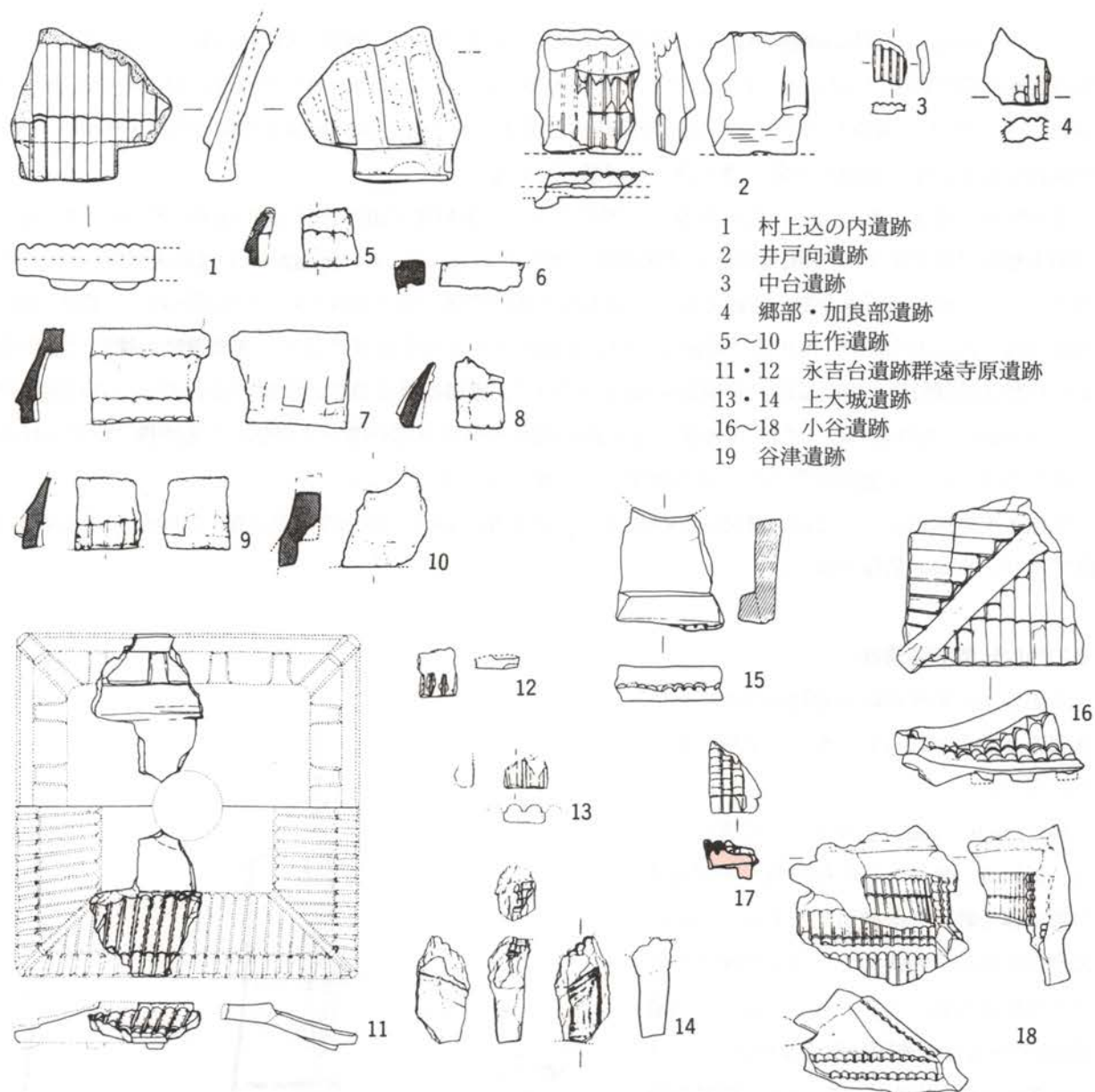


第127図 瓦塔 5



第128図 瓦塔 6





第130図 瓦塔 8

最も古い例としては関峯崎横穴群の3号横穴棺床出土の押出一光三尊仏(第131図1)¹⁸⁾や成東町出土の観音菩薩立像¹⁹⁾が挙げられる。7世紀後半と考えられる。また、駄ノ塚西古墳石室西壁の線刻の如来座像(第131図5)²⁰⁾も古い可能性が考えられる。奈良時代と考えられるものは、結城廃寺跡の埴仏・塑像²¹⁾、大栄町稲荷山出土の十一面観音菩薩立像2体²²⁾とが挙げられる。

平安時代と考えられるものは比較的多く、列記すると、栄町北辺田の菩薩立像(表採)²³⁾、高津新山遺跡の如来座像(表土出土)、栄町龍角寺の如来座像(地表下50cm)²⁴⁾、井戸向遺跡の宝冠如来座像(竪穴住居跡出土)²⁵⁾、木下別所廃寺跡の菩薩立像²⁶⁾、名木廃寺跡の菩薩立像(表採)²⁶⁾、坂志岡・尼ヶ谷遺跡の観音菩薩立像(表土出土)²⁷⁾、市川市下総国分寺付近の塚出土の誕生釈迦仏立像²⁸⁾、峯崎遺跡の螺髪(第131図4)(竪穴住居跡)²⁹⁾、田向城跡の宝冠如来座像(土坑)²³⁾、織幡妙見堂遺跡の仏像の後背部分(第131図3)³⁰⁾がある。時期不明のものとしては、上総国分尼寺跡の螺髪や市原市国分僧寺北辺部の如来座像²³⁾が見られる。

以上のように、小金銅仏等の出土は菩薩像と如来像の出土が多いことが分かる。

仏像と小金銅仏については、像高が10cm以下のもの9像、10cm～15cmのもの2像、20cm以上のものが2像であり、小型の仏像が多い。

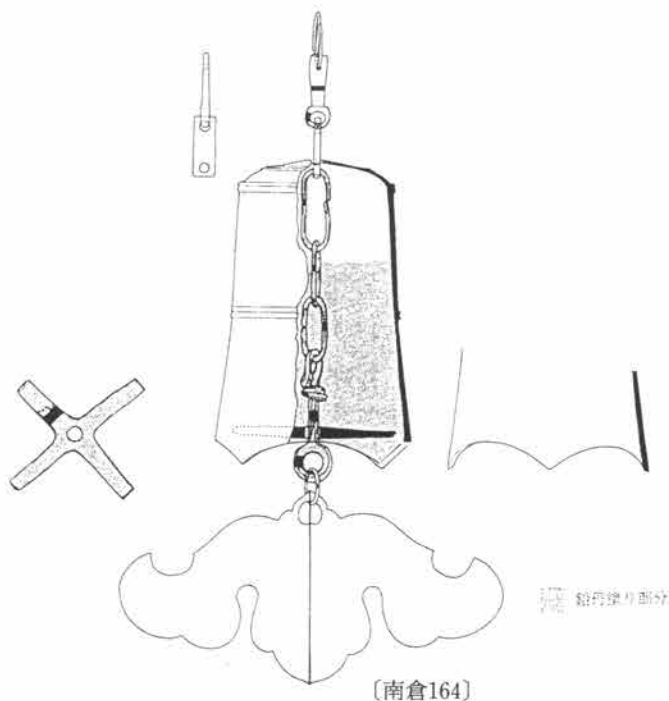
その他の仏教関連遺物

上記の出土頻度が高い遺物のほかにも仏教遺物と考えられるものをここで触れることにする。

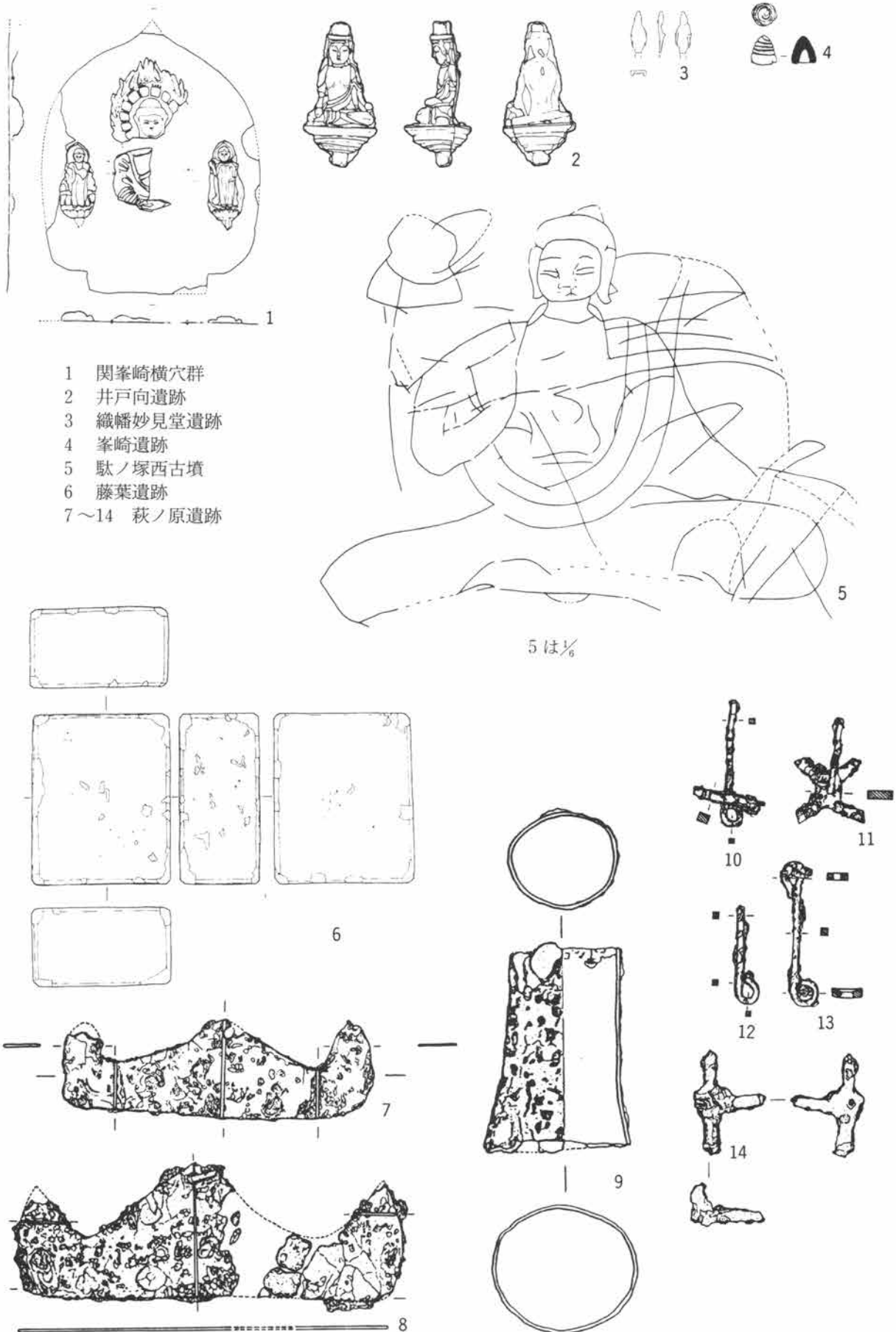
第132図6は、温石と考えられる遺物である。温石は、焼いた石を布に包んで病気等の際に体を暖める医療用具である。当時の医療の状況から判断して、僧侶が使用していた可能性が強いものである。ほかに白幡前遺跡³¹⁾・永吉台遺跡群西寺原地区・北アラク遺跡³²⁾から出土しており、すべて蛇紋岩製である。

第132図7～14は鉄製の風鐸の部品であり、7・8は風招であり、9は鐸身、10～14は釣金具等である。この風鐸と同形態で同寸に近いものに、正倉院宝物の中に見られる金銅鎮鐸³³⁾(第131図)が挙げられる。これは、幢幡鉸具であり、鐸身側面に「東大寺枚幡鎮鐸 天平勝宝九歳五月二日」とあり、幡に付属する鐸であることが分かる。

また、図示していないが、花瓶と考えられる遺物が、上総国分尼寺跡と中内原遺跡から出土している。



第131図 正倉院宝物金銅鎮鐸第1号



第132図 その他の仏教関連遺物

3 墨書土器「神」との対比

古代の寺院を考えるには、その対局にあるもう一つの信仰である神道・神社についても考慮しなければならないであろう。今回は紙面の都合もあるので、特に「神」関連の墨書土器を出土した遺跡についてのみ触れ、それと仏教との繋がりを見ていくことにする。

「神」関連の墨書土器が出土した遺跡は、現在までに28遺跡を数える。出土遺跡は長勝寺脇館跡「□命替神奉」、馬橋鷺尾余遺跡「神奉」、北大堀遺跡「神屋」、庄作遺跡「丈部真次□（召カ）代国神奉」「罪ム国玉神奉」「上総□秋人歳神奉進」「竈神」、吉原三王遺跡「神□」、南借当遺跡「奉玉泉 神奉」、郷部・堀尾（Loc16）遺跡「神奉」、高岡大山遺跡「神」「神屋」、城次郎丸遺跡「神奉」、入谷遺跡「神」、権現後遺跡「神」、鳴神山遺跡「□神」「國玉神上奉丈部鳥万呂」「大國玉罪カ」、東野遺跡「國玉」、神田台遺跡「神宮」「毛神」、庚塚遺跡「神奉」、小座ふちき遺跡「石神」、白幡前遺跡「神万カ」、双賀辺田No.1遺跡「神主」、油作第2遺跡「大神」、多田日向遺跡「大神」「神部」、寺台遺跡「神宮」、池尻遺跡「神主」、谷窪・上楽遺跡「神奉」、須和田遺跡「神」、ムコアラク遺跡「□神申如林為南無界秋」、別当地遺跡「神山」、境堀遺跡「神」、新橋高松遺跡「神」が挙げられる。「神」の一文字が多いことは無論であるが、「神奉」も多く存在する。

8世紀後半には「神」の墨書土器が見られ、9世紀前半から中葉にかけて多く認められるようになる。現在までのところ、「神」の墨書土器は、下総地域のみ出土であり、上総・安房地域から出土しないことは注目される。

この28遺跡という「神」関連の墨書土器出土遺跡数は、「寺」「仏」の墨書土器が出土した99遺跡と比較すると3割弱の数値で、少ないものとなっている。また、注目されるのは、「神」等の墨書土器が出土する遺跡のうち12遺跡に何らかの仏教関連遺物が認められることである。このように多くの遺跡から神道関係と仏教関係の遺物が混在して見られるという点はどのように評価したら良いのであろうか。神仏混合の風習が広がったとする根拠となり得るかは評価の分かれるところであろう。

ただし、「神」の墨書土器と仏教関連遺物が同一の竪穴住居跡から出土した例は現在までのところ見られず、この点から考えると、峻別されていた可能性が強いのではなかろうか。

4 仏教関連遺物の出土遺跡の頻度について

今回、浄瓶・水瓶、香炉・香炉蓋、鉄鉢、瓦塔、墨書土器等の文字資料の中で「寺」「仏」「佛」を主な仏教関連遺物として認定し、分析を行ってきたが、これらのすべての遺物と何らかの遺構を検出した遺跡は、真行寺廃寺跡のみである。このことは、前述したように本格寺院については上総国分寺尼寺を除き、部分発掘のみであることに起因するとも考えられる。なお、瓦窯跡を除いた仏教関連遺跡204遺跡（線刻画古墳2、仏教関連遺物を出土した窯跡3遺跡を含む。）のうち、遺跡の半数以上の114遺跡で1種類のみの遺物ではなく、仏教関連の遺構又は他の仏教関連遺物が出土している。

この204遺跡のほか、瓦窯跡を含めると223遺跡となる。この数値はどのように評価してよいのだろうか。今回、作成した地図には総計で730遺跡以上の点を落とした。これは、上記仏教関連遺跡・瓦窯跡・瓦出土

地と、発掘調査がなされた奈良・平安時代の集落跡の合計である。

発掘調査がなされた奈良・平安時代の集落跡に関しては、千葉県教育委員会の千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報や各都市文化財センターの年報等から抜き出したものである。地図上に落とす際には遺跡が各地点に分かれているものに関しては、1遺跡とした。古い文献には遺跡の位置が記されていないものが若干存在し、点を落とせないものがあつた。また、遺跡が稠密な区域に関しては見づらいためドットの数減らしたところも存在するので、実際の遺跡数はこれよりも増加する。ただし、いくら増加しても1,000遺跡を超えることはないと考えられる。この数字から仏教関連遺跡の割合を単純に割り出すと20%を超えることになる。

また試みに、奈良・平安時代の遺物が分布している遺跡数を千葉県分布地図上から拾うと、4,366遺跡となった。この数字からでも仏教関連遺跡は全体の4.7%前後になる。4,366遺跡という数字は発掘されていない遺跡を含んだものであり、これでも1/20程度の数値になるということは、かなりの頻度で仏教関連遺跡が見られるということになる。

そして、これらの仏教関連遺物の出土遺跡を概観すると、本格的寺院からの出土は少数であり、いわゆる村落内寺院及び明確な仏教遺構を伴わない遺跡が大半である。その意味ではある程度、房総地域においても官寺や郡寺級の寺院のみではなく、仏教が一般民衆にまで受容されていたことを物語る数値であろう。

以上、仏教関連遺物について検討を行ってきたが、その出現時期については8世紀後半代に集中することが分かった。また、8世紀第3四半期まで遡ると考えられる遺物も多く認められる。従来から考えられてきた8世紀末という時期よりも遡ることは確実となった。また、8世紀末に創建と考えられていた小食土廃寺跡をはじめとするいくつかの瓦葺寺院跡が8世紀第3四半期まで遡る可能性が明らかとなり、この時期に何らかの画期があつたことが考えられる。

また、仏教関連遺物が最も多く出土する時期は、9世紀前半から中葉である。10世紀に至ると出土量は格段に落ちており、この時期にさらに変容するものと考えられる。

註

- 1) 「軍防令第一七」『令義解』巻第五 国史大系本 吉川弘文館
- 2) 宮内庁正倉院事務所 1986 『正倉院年報』第8号
- 3) 阪田宗彦 1992 「正倉院宝物の塔鉢形合子」『仏教芸術』200号 毎日新聞社
- 4) 渡辺 一ほか 1992 「柳原遺跡A地区」塔鉢形香炉蓋 『鳩山窯跡群発掘調査報告書第4冊 一人集落編(2)-』 鳩山町教育委員会
- 5) 弗若多羅、鳩摩羅什共訳 『十誦律』第五六 後秦時代 『大正新修大藏經』二三内
- 6) 雨宮龍太郎 1983 「古代村落と仏教—磁鉢をめぐる人々—」『研究連絡誌』第2号 (財)千葉県文化財センター
- 7) 奈良国立文化財研究所 1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II 藤原宮西方官衙地域の調査』
- 8) 渡辺 一ほか 1990 『鳩山窯跡群発掘調査報告書第2冊 一窯跡編一』 鳩山町教育委員会
- 9) 中野正樹 1976 「供養具」『新版仏教考古学講座 第5巻 仏具』 雄山閣出版株式会社
- 10) 吉田恵二氏の御教示による。
正倉院事務所 1971 『正倉院の陶器』 日本経済新聞社

- 11) 「二五 比丘ノ六物ト云ハ何ソ」 『塏囊鈔』卷第十一 文安3年 『日本古典全集 塏囊鈔』 1936
日本古典全集刊行會
- 12) 大寶二年の御野（美濃）国戸籍に「寺」「寺賣」の名前が見える。
竹内理三 1963 『寧楽遺文』上巻 東京堂出版
- 13) 1975 『日本靈異記』（日本古典文学全集6） 小学館
- 14) 直木孝次郎 1960 「靈異記に見える「堂」について」『續日本紀研究』第7巻第12号 續日本紀研究会
- 15) 『将門記』『日本思想大系 古代政治社会思想』
- 16) 池田敏宏 1995 「瓦塔屋蓋部表現手法の検討ー埼玉県児玉町堂平遺跡採集瓦塔をめぐってー」『土曜考古』第19号
- 17) 埼玉県鳩山町鳩山窯跡群柳原遺跡A地区から9世紀初頭から9世紀前半の瓦塔・瓦堂を焼成したと考えられる円形の焼成土坑が検出されている。
渡辺 一他 1991 『鳩山窯跡群発掘調査報告書第3冊 ー工人集落編ー』 鳩山町教育委員会
- 18) 原田享二他 1988 「関峯崎横穴群3号横穴」『佐原市内遺跡群発掘調査概報II』 佐原市教育委員会
- 19) 麻生脩平 1987 「山形・円福寺の銅造観音菩薩立像とその兄弟仏」『仏教芸術』175号 毎日新聞社
- 20) 杉山晋作 1996 「駄ノ塚西古墳の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告第65集』 国立歴史民俗博物館
- 21) 斉藤伸明 1989 『結城廃寺第1次発掘調査概報』 結城市教育委員会
斉藤伸明 1991 『結城廃寺第3次発掘調査概報』 結城市教育委員会
- 22) 平野元三郎 1972 「千葉県上代仏教文化史資料録」 『千葉県の歴史』第3号 千葉県
- 23) 埼玉県立博物館 1993 『特別展図録甕る光彩ー関東の出土金銅仏』
- 24) 林 宏一 1982 「古代東国の小金銅仏ー出土仏を中心にー」 『歴史手帳』10巻10号 名著出版
- 25) 藤岡孝司 1988 『八千代市井戸向遺跡ー萱田地区埋蔵文化財調査報告書IV』（財）千葉県文化財センター
- 26) 埼玉県立博物館 1982 『古代東国の甕ー仏教文化の夜明けをさぐる』
- 27) 稲見英輔 1993 「坂志岡・尼ヶ谷遺跡」『平成4年度芝山町内遺跡発掘調査報告書 小池麻生遺跡・坂志岡・尼ヶ谷遺跡』 芝山町教育委員会
- 28) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1978 『古代の誕生仏』
- 29) 松田政基ほか 1996 『峯崎遺跡』 結城市
- 30) 小見川町埋蔵文化財調査会 1989 『織幡地区遺跡群発掘調査報告書』
- 31) 大野康男 1991 『八千代市白幡前遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 32) 阪田正一 1996 「古代房総の民衆と仏教文化」『坂詰秀一先生還暦記念 考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
- 33) 宮内庁正倉院事務所 1993 『正倉院年報』第15号

追記

挿図中の土器で、大きさの記載のないものについては縮尺1/4である。

2 寺院と仏堂・付属施設

今回の紀要は重要遺跡確認調査と同種の遺跡の調査成果をあわせて検討し、これまで明らかになった古代仏教遺跡の実態を整理しようというものである。重要遺跡確認調査では、真行寺廃寺跡や九十九坊廃寺跡など複数の基壇建物跡で伽藍が構成された寺院跡ばかりでなく、長熊廃寺跡や小食土廃寺跡などいわゆる一堂伽藍の寺院や、名木廃寺跡のように仏堂と竪穴住居跡群が近接した寺院跡も対象とした。こうした多様な規模と内容の寺院跡の存在を明らかにするとともに、伽藍周辺の寺地の解明についても一定の成果を上げた。寺院は塔や金堂といった仏や法の空間（仏地）ばかりでなく、講堂や僧坊などの僧の空間（僧地）や、寺の日常生活を運営するための空間がある。さらにこれらを取りまくように寺領や、檀越の邸宅をはじめとする集落が寺辺の空間を形成している。

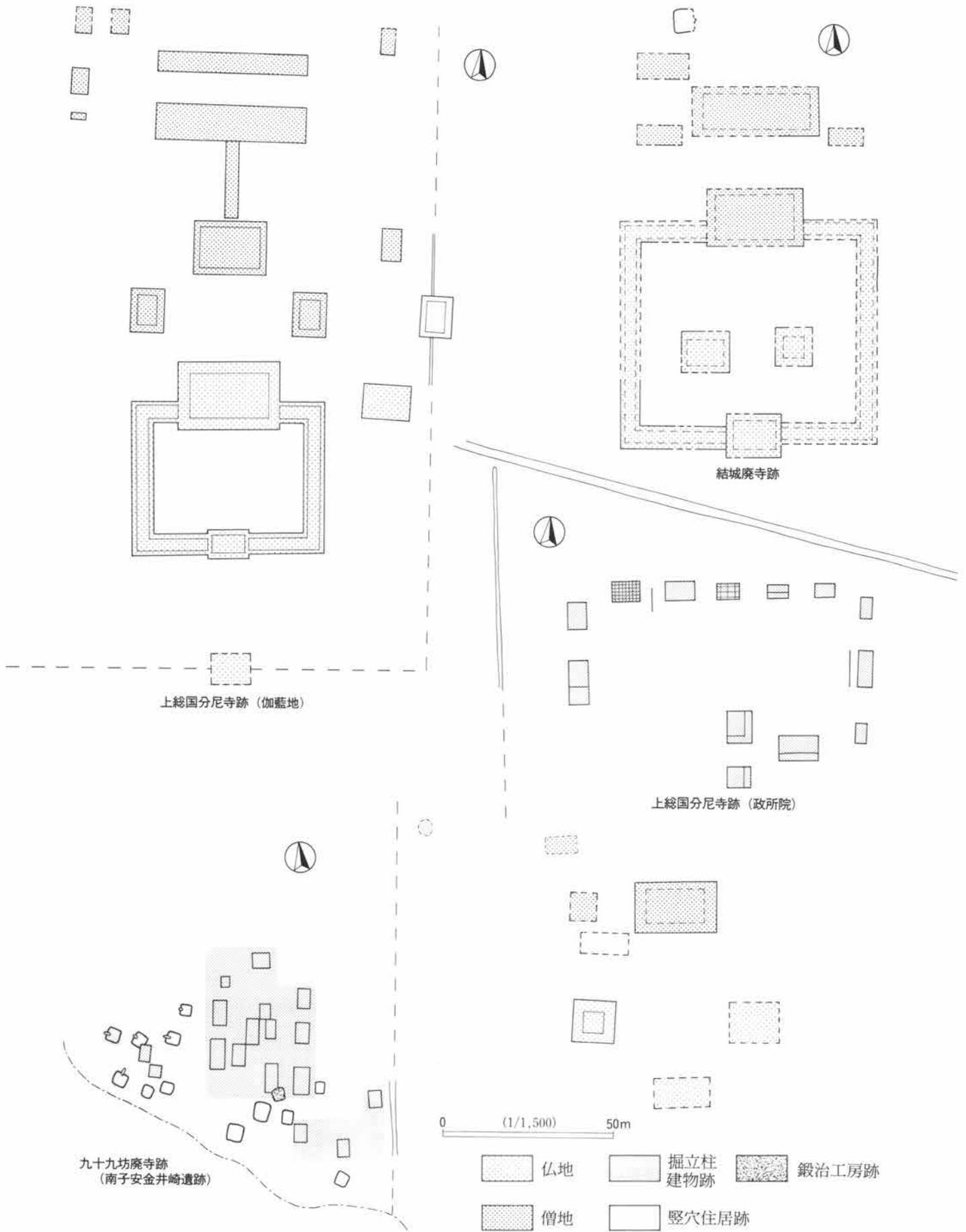
古代寺院の空間について、山路直充氏や須田勉氏をはじめとする関東の国分寺研究では、いわゆる七堂伽藍と呼ばれる南大門から区画された仏地と僧地を「伽藍地」、そして中心伽藍以外の寺の運営を支え日常業務に関わる場を「付属院地」に分け、両者を合わせた寺の敷地全体を「寺院地」、さらにそのまわりを取り囲む寺田や山川沼沢を「寺地」と捉えている¹⁾。ただし、この際「付属院地」の性格づけが多少問題となる。坂詰秀一氏は講堂・僧坊などを「僧地」と捉え、大衆院以下の補助空間を「俗地」と捉えている²⁾。上原真人氏は、寺域外を「俗地」と捉え、大衆院以下の寺域内の施設を僧侶が共同生活し宗教活動を行うための補助空間として「僧地」に含めている³⁾。寺院地周辺を含めた空間で寺院を考えていく上では、上原氏のように寺域外を「俗地」として捉える必要がある。ただし、講堂や僧坊等と運営施設が配置上区分されている事例を扱う上で、両者を「僧地」として一括するのは実態を把握する上で問題が生じる。そこで、これらを区別する必要上、講堂や僧坊などの僧の空間を「僧地」、僧侶が宗教活動を行うための補助空間として付属院地を「属地」と便宜的に区別してみたい。こうした基本的な空間構成の中に多様な在地寺院の実態をあてはめてみたい。まず仏堂を中心とした仏地と伽藍地について触れた上で、その周辺遺構のあり方を整理してみたい。

1 国分寺・初期寺院の仏堂・仏地・伽藍地

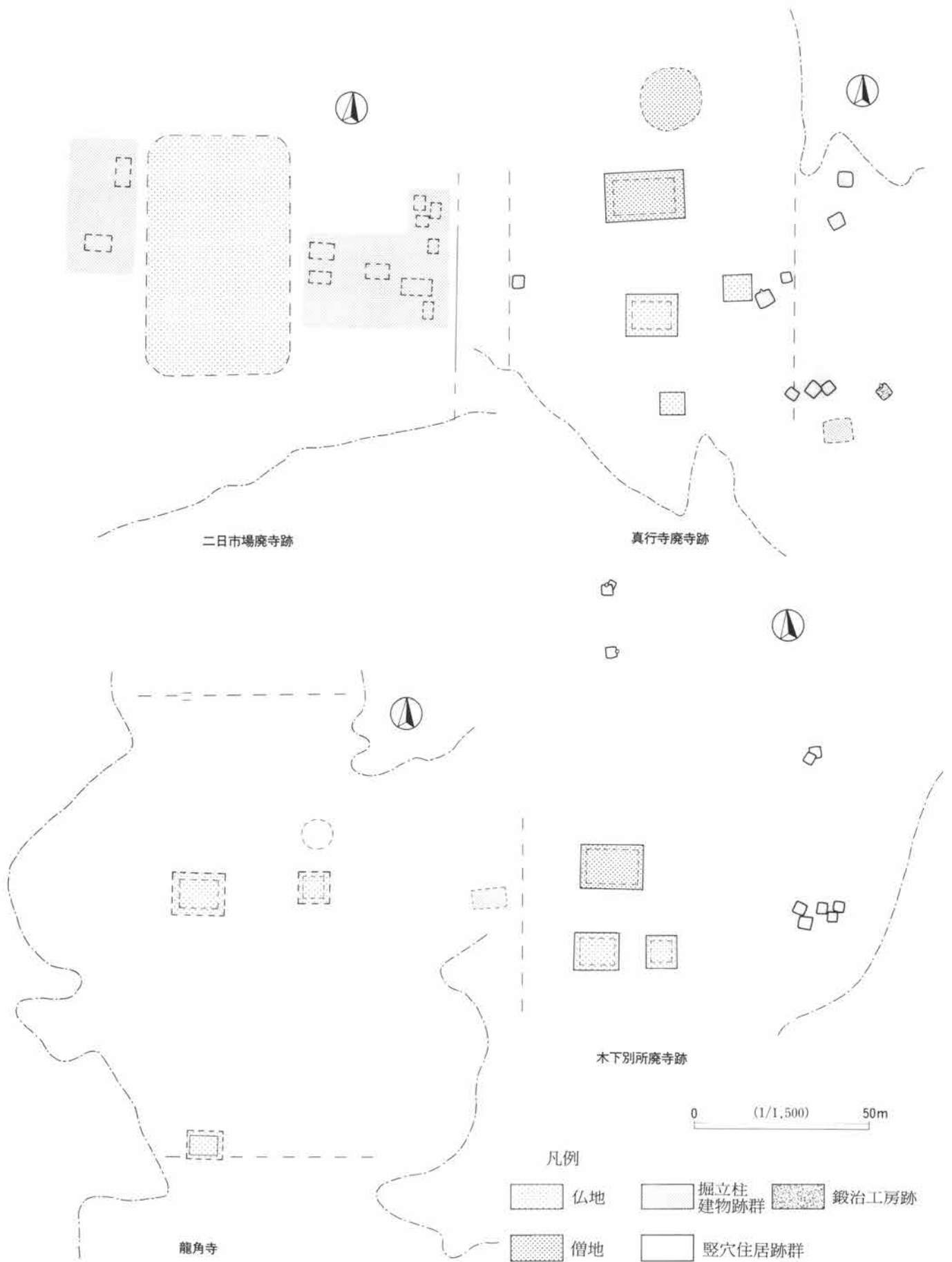
上総国分寺では塔を囲み、金堂・中門へと取り付く回廊からなる金堂院と、講堂などの僧地を合わせた伽藍地を区画する築地・塀と南大門・西門が確認されている。上総国分尼寺跡では金堂に取り付く回廊と中門からなる金堂院と、その北方の講堂・経楼・鐘楼・尼坊等を合わせた伽藍地を囲む築地と東門と西門が確認されている。このように上総国分寺と尼寺跡では基壇建物等によって整備された、自己完結した空間としての金堂院と伽藍地のあり方が窺える。

下総国分尼寺跡では溝と塀跡で区画された金堂と講堂と、掘立柱の中門と南大門が確認されている。そしてその北方でも溝で区画された掘立柱の尼坊が確認されている。区画された伽藍地のあり方が窺える。下総国分寺では金堂と塔、講堂と、その北方から掘立柱の僧坊が発見されている。僧坊を区画する溝と塀跡が確認され、尼寺跡同様区画された伽藍地と想定されている。このように発掘調査が進んでいる上総と下総の国分寺では基壇建物跡等で整備された仏堂と、自己完結した伽藍地のあり方が窺える。なお、安房

III 各 論



第133図 仏堂・付属施設模式図1



第134図 仏堂・付属施設模式図2

国分寺は基壇建物跡の金堂が確認されているが、他の建物跡や区画施設等は確認されていない。

下総国の初期寺院では、結城廃寺跡の発掘調査が進んでおり、伽藍地等の全体的な様子が窺える。結城廃寺跡では金堂と塔を囲んで、中門と講堂に取り付く回廊が確認されている。その北方では基壇建物跡の僧坊と掘立柱建物跡2棟と竪穴住居跡1軒が発見された。そしてこれらを大きく区画する大溝が確認された。この大溝は現段階では寺域区画溝と捉えられ、伽藍地の区画との関係は不明である。大溝周辺から大溝外にかけて竪穴住居跡が多く発見されたのに対して、伽藍近辺では僧坊北方の平安時代後期の1軒のほかは竪穴住居跡は発見されておらず、基壇建物跡等で整備された伽藍地は建物構成の上で周辺と区分されている。このほか、龍角寺で金堂と塔の基壇建物跡が、木下別所廃寺跡で金堂と塔と講堂に比定される基壇建物跡が確認された。木下別所廃寺跡では、伽藍から外れた北・東・西のトレンチで竪穴住居跡や掘立柱跡が確認された。また、龍角寺では金堂の南約65mに礎石建物跡の門跡があり、南大門の可能性が指摘されている。また、塔北方からは瓦塔や瓦とともに掘立柱建物跡が発見された。これら南大門から塔北方建物跡を含めた伽藍地からは竪穴住居跡等は発見されていない。

上総国の九十九坊廃寺跡では塔と講堂の基壇建物跡と、講堂の西側から複数の掘立柱建物跡がまとまって確認された。講堂や塔の軸線とほぼ同一で、位置関係から伽藍を構成する仏堂等の可能性が高い。真行寺廃寺跡では金堂と講堂の基壇建物跡と、金堂の南で掘立柱建物跡が発見されている。報告書では2棟の掘立柱建物跡に復原されているが、1棟の掘立柱建物跡への復原の可能性も指摘されている。金堂のほぼ南に位置し、1棟の掘立柱建物跡の復原では中央の柱間が東西の柱間よりも広い点から、中門に想定することも可能である。また、金堂の北東から三間四面の掘立柱建物跡が、講堂北側から掘立柱跡が確認された。このように、南北基壇周辺から掘立柱建物跡がやや集中して確認され、中門や僧坊等と想定される。それに対して、伽藍地から外れると奈良・平安時代の竪穴住居跡が多く確認された。

これまでに初期寺院では国分寺で見られた伽藍地の区画施設は明確に発見されていない。ただし、伽藍地内は基壇建物などによって構成され、広い空間に周辺と一線を画した占地が窺える。また、伽藍地の区画施設の可能性がある遺構も複数検出されている。龍角寺の伽藍北方から部分的に東西溝が確認された。この付近は台地のくびれ部分に当たっている。なお、南大門付近も東西から谷津が深く入りこむ台地のくびれ部分に当たっている。龍角寺では地形を生かした伽藍地の占地の可能性がある。木下別所廃寺跡では講堂の西約9mと15m付近で南北溝が2条発見された。時期を決定する遺物がなく、寺院跡に伴うか不明とされている。ただし、溝の西側から掘立柱跡が発見され、伽藍と掘立柱建物跡群を区分した施設の可能性も考えられる。真行寺廃寺跡では中門の東約32m地点で南北溝1条が、また金堂の西約33m地点では南北方向の掘立柱列が確認された。掘立柱列は複数の時期の重複が認められ、先行する柱列は座標北から3度西に偏し、時期が新しい柱列が同じく7度西に偏している。これらは金堂基壇が同じく2度ないし3度西に偏し、講堂基壇が6度西に傾く傾向とほぼ共通しており、寺院関連施設と捉えられている⁴⁾。これらは伽藍地の区画施設の可能性がある。断片的ではあるがこうした伽藍区画施設と周辺から区別された建物構成と区分された建物配置から、国分寺同様にこれら初期寺院の伽藍地も自己完結した空間として機能していた可能性が高い。

2 その他の寺院の仏堂・仏地

次に国分寺と初期寺院以外の寺院の仏堂・仏地について検討してみたい。上総国分寺創建期瓦等を出土する小食土廃寺跡では基壇建物跡の金堂の四囲から溝が発見された。この溝内からはこのほかに、東側から掘立柱跡が2基まとまって検出された。山田台廃寺跡の幢竿支柱跡のあり方と類似している。なお、溝の外側の東と北から溝に沿った掘立柱建物跡が、西から竪穴住居跡が発見された。この溝は仏堂を区画する施設であり、仏地は自己完結した空間と捉えられる。

大塚前遺跡では下総国分寺系瓦を葺棟に葺いたと想定される三間四面の掘立柱の仏堂が発見された。このほか、方二間の総柱構造の掘立柱建物跡1棟と竪穴住居跡1棟が並立して発見されたが、竈を備えた竪穴住居跡は仏堂から離れている。また、仏堂は掘立柱建物跡ながら、建物規模と構造から周辺建物と区別されている。

この大塚前遺跡と類似した遺跡に針ヶ谷遺跡がある。標高130mの丘陵頂部に南北に三間四面の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、側柱建物跡4棟がほぼ並立して発見された。明確な仏具の出土は不明ながら、一般集落と異なる立地や建物構成と配置、大塚前遺跡との類似性から寺院跡の可能性が高い。西に面した三間四面建物跡が仏堂で、その前面の空閑が前庭として機能したと考えられる。仏堂が他の建物跡から離れ、周辺と区分されている。

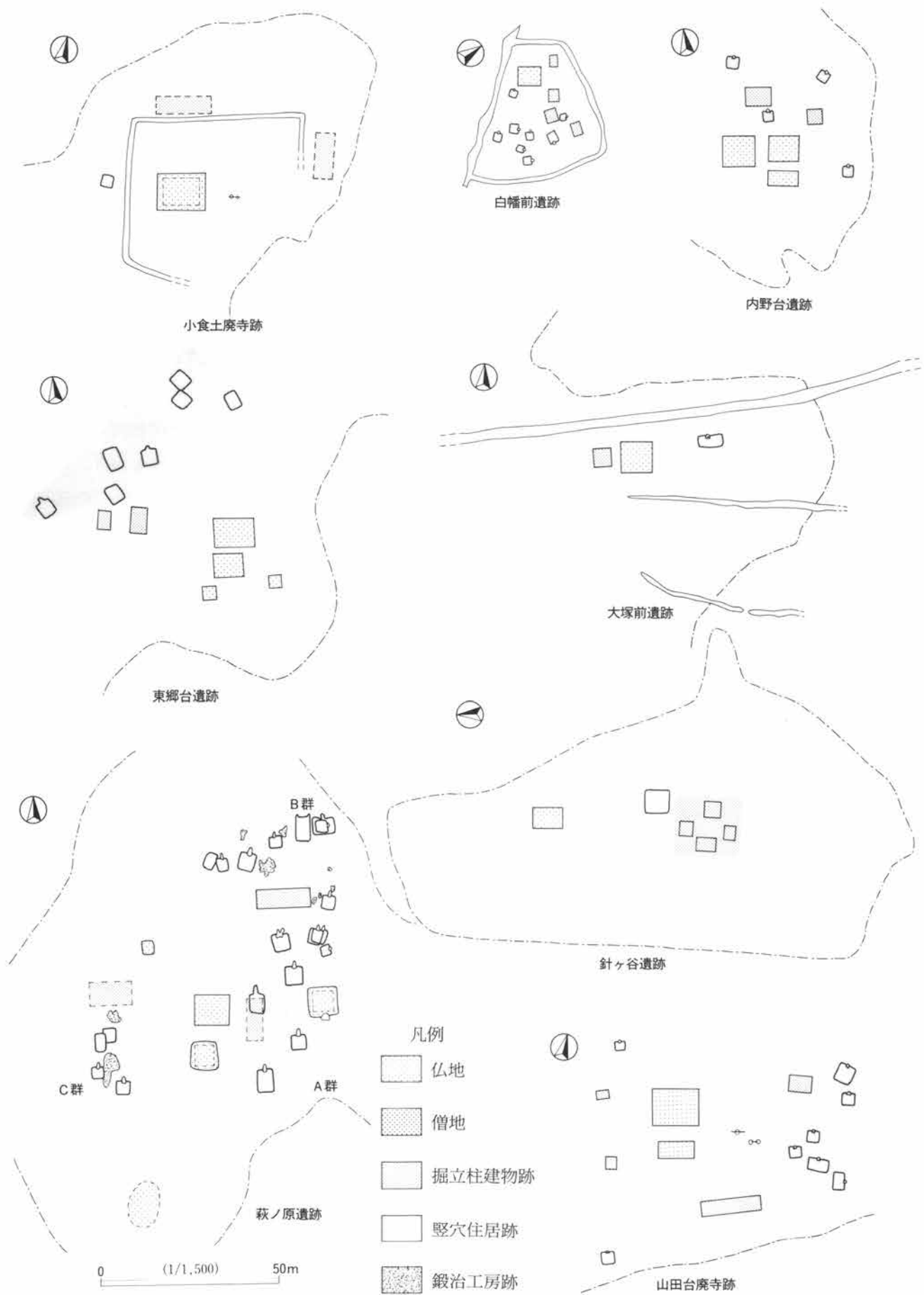
東郷台遺跡では台地南端から仏堂が発見された。仏堂は四間四面の掘立柱建物跡で、後で坪地業の礎石建物跡に、さらにその後四間片底の坪地業の礎石建物跡に建て替えられている。なお、この南には方二間の掘立柱建物跡2棟が東西に並立している。仏堂を中心としたこれら建物群は、北方の竪穴住居跡群等から離れており、仏地が周辺と区分されている。

山田台廃寺では四間四面と四間×二間の掘立柱建物跡からなる双堂形式の仏堂が発見された。四間四面建物跡は後に身舎部分が坪地業の礎石建物跡に建て替えられている。この仏堂の東約10mと約15m離れて幢竿支柱跡と想定されるピット群が2箇所発見された。そして、これらを取りまくように掘立柱建物跡と竪穴住居跡が発見された。密集した建物跡群の中であって、仏堂から幢竿支柱跡にかけてやや広い空間が認められる。

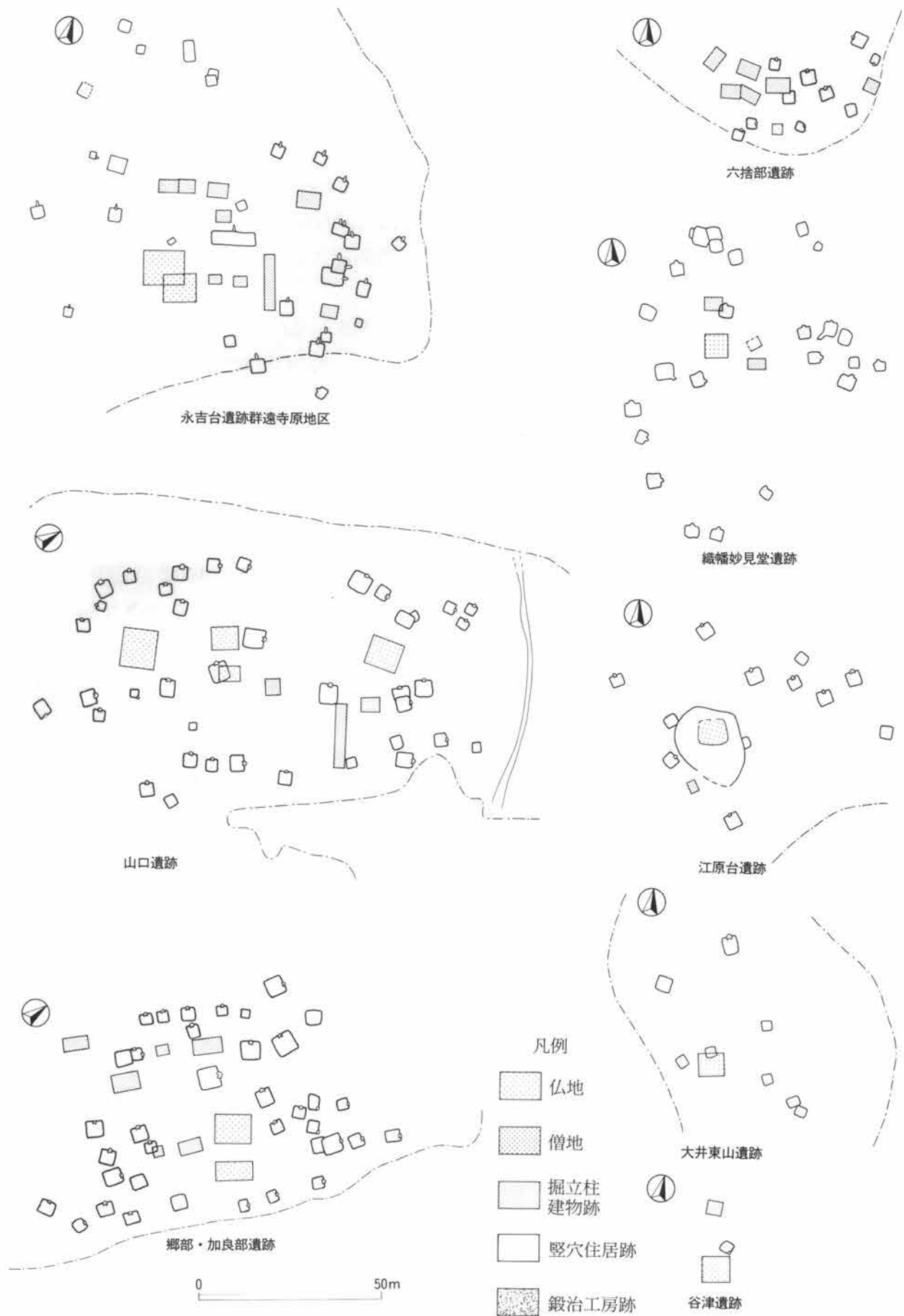
萩ノ原遺跡では基壇建物跡2基と二間四面の掘立柱建物跡の仏堂、そして簡易な瓦塔基壇跡が遺跡の南側から3か所にまとまって発見された。基壇建物跡2基は同規模で一間四面の建物跡に復原されている。これら仏堂が併存したものか、時期変遷があるものか不明である。二間四面堂・2号基壇と1号基壇の間に、1軒の建替えと捉えられる竪穴住居跡が認められるものの、その他の竪穴住居跡は仏堂の北側と西側にまとまっており、仏堂と竪穴住居跡の配置に区分の傾向が認められる。

内野台遺跡では、仏堂と考えられる四間四面南孫庇の掘立柱建物跡と四間×三間北庇と四間×二間の掘立柱からなる双堂が発見された。両仏堂は北側の柱筋をほぼ揃え、軒先を接する建物跡と想定される。これらの東と北からやや散在ぎみに竪穴住居跡と掘立柱建物跡が発見されているが、これらと仏堂との間には配置上の区分が認められる。

永吉台遺跡群遠寺原地区では台地の東西に建物跡群が分布しているが、東側の建物群から仏堂が発見された。三間四面の掘立柱建物跡で、建替えが1度確認できる。密集した東側建物群の中であって、仏堂はやや広い空間に占地している。仏堂と重複ないし近接する32号・47号竪穴住居跡は9世紀末以降の寺院衰



第135図 仏堂・付属施設模式図3



第136図 仏堂・付属施設模式図 4

退期以降のものである。

郷部遺跡では台地の北西と南東に建物跡群が分布するが、その南東建物群の中心から二つの掘立柱建物跡群が発見された。そのうちの南西の掘立柱群から双堂形式の仏堂が発見された。密集した掘立柱群の中であって、仏堂周辺はやや広い空間が認められる。

山口遺跡では集中する建物群の中心から掘立柱建物跡群が、周辺から竪穴住居跡群が発見された。なお、掘立柱群中の011号・024号竪穴住居跡は8世紀後半で、寺院整備期以前のものと捉えられる。この掘立柱群から三間四面の仏堂と、双堂形式の仏堂と、五間二面の仏堂が並立して発見された。竪穴住居跡群と仏堂を中心とした掘立柱建物群には配置上の区分がある。

以上、小食土廃寺跡では仏堂周辺から区画施設が発見され、仏堂が周辺から区分され、仏地が自己完結した空間と認められた。また、仏堂周辺に区画施設が認められない多くの事例でも、建物構成の配置上、仏堂が周辺から区分され、また建物構造と規模の上で仏堂が周辺建物と区別されていた点が窺えた。

なお、国分寺と初期寺院以外のこれらの寺院では、桁行二間～四間の四面庇建物跡や一間四面建物跡、双堂など多様な構造の仏堂が認められた。最も多く認められる桁行三間～四間の四面庇建物跡は寺院建築として伝わったもので、この時期の寺院の金堂等の一般的な構造である⁵⁾。一間四面堂は奈良時代から平安時代初期のものは現存せず、文献上の存在もほとんど確認されていない。ただし、この時期の記録は官の大寺にほぼ限定する事情によるもので、平安中期以降になると文献上多くの存在が確認され、一般的な仏堂である。構造的にも母屋と庇の構成をとる仏堂建築の中で最も基本的な構造であり、小さな寺院で一早く取り入れられた仏堂と捉えられる⁶⁾。また、二つの建築を前後に並べる双堂は、小さな寺院や大寺院の付属建築では奈良時代前期からその存在が確認され、平安初期以降、大寺院の中心建築にも多く見られる建築形式である⁷⁾。ただし、建築上は正堂と礼堂が別棟のものと、正堂の屋根を前へ葺き下ろした前庇を礼堂とした一体のものがある⁸⁾。山田台廃寺跡については正堂の前面に雨落ち溝もしくは区画溝が認められない点から、笹生衛氏は正堂と礼堂が1棟の建物に近い構造と捉えている⁹⁾。ただし、山口遺跡の事例では正堂と礼堂の間隔がやや広く、間口が合わない点から、別棟の建物跡と想定すべきであろう。このように仏堂と捉えてきた遺構は、建築史上において同時期の仏堂の一般的な構造である。

3 国分寺・初期寺院の伽藍地周辺の規則的な建物群

次に伽藍地周辺の建物群と、寺院地の区画施設について検討してみたい。

上総国分寺では溝で区画された南北490m、東西約325m、変形した二つの長方形が重なった形をした寺院地が明らかになっている。寺院地内の伽藍北方は溝で3ブロックに分けられている。中央ブロックでは官衙的配置の掘立柱建物跡が発見された。ここからは墨書土器「東院」が多数出土し、官衙的建物配置から「政所院」と想定されている。西側ブロックからは墨書土器「厨」が出土し、その南の僧坊等との位置関係等から「厨院」と想定されている。東側ブロックからは大型の銅溶解炉が発見され、「修理院」と想定されている。

上総国分尼寺跡では溝で区画された南北約372m、東西約285mの長方形を呈した寺院地が明らかになっている。寺院地の北東部分からコの字形配置の掘立柱建物跡が発見され、僧寺の「東院」同様に「政所院」と想定されている。また、この建物群の東側からは鍛冶遺構や鋳銅遺構とともに竪穴住居跡が多く検出さ

れ、「修理院」と想定されている。このほか、寺院地の北西部分や南西部分からは建物跡が確認されず、「蘭院」や「花苑院」として使われたと想定されている。

下総国分寺でも北辺211m以上、西辺201m以上の寺域溝が確認されている。寺院地内の北西部分で竪穴住居跡と鍛冶工房跡や墨書土器「造」などが発見され、営繕施設や下働きの人々が住んでいた区域と想定されている。また、伽藍地の北方では掘立柱建物跡が7棟集中して発見され、出土した「講院」の墨書土器から講院の可能性が指摘されている。

下総国分尼寺跡でも北辺324m以上、東辺303m、南辺53m以上の寺域溝が確認されている。寺院地内の北西で鍛冶遺物が竪穴住居跡から発見され、僧寺同様に営繕施設の存在が推測されている。また、その南から発見された掘立柱建物跡5棟は倉庫機能を有した屋と想定されている。

このように国分寺からは寺院地を区画する溝と、寺院地内から特徴のある建物跡群、特定の機能を示す墨書土器などが出土し、区画された寺院地内は機能ごとに付属施設が分立していたと想定されている。特に上総国分寺では建物群を区画する溝が発見され、それぞれが「院」等として独立していたと想定されている。なお、上総国分寺の東側では荒久遺跡が、上総国分尼寺跡の北側では坊作遺跡が、下総国分寺と尼寺跡の北側では国分遺跡が、寺院地にほぼ接して発見されている。これらの遺跡からは仏教遺物や国分寺の機構を示す墨書土器なども多く発見されており、国分寺の機能を支えた寺辺の集落と想定されている。

次に初期寺院の伽藍周辺について検討してみたい。結城廃寺跡では溝による区画が伽藍の東・南・西で発見され、東西170m、南北260m以上の古代の寺院区画が確認されている。この区画内からは伽藍地の建物跡群のほかに、南東部から竪穴住居跡群などが発見された。なお、区画外の北東からも竪穴住居跡とともに掘立柱建物跡が発見され、区画外に寺院地が広がる可能性もある。なお、「東院」の墨書土器も出土している。

九十九坊廃寺跡の伽藍北側では2か所で掘立柱跡が発見されたが、竪穴住居跡等は発見されていない。一方、伽藍の西側で南北溝が1条確認され、その西側から掘立柱群と竪穴住居跡群が発見された¹⁰⁾。北に掘立柱群が、南に鍛冶工房跡を含む竪穴住居跡群がまとまり、それぞれ複数の建替えが認められる。掘立柱建物跡群は中央に南北棟が東西約3列、南北約2列配置され、北側に総柱構造と方三間と東西棟の一群が認められる。さらに南西と南東にやや離れた小規模な南北棟群が認められる。このように掘立柱建物跡群も複数のブロックが認められ、異なる性格の建物跡で構成されている。僧名と考えられる「弘安」の墨書土器も出土しており、寺院地内の付属施設の可能性が高い。

二日市場廃寺跡では大量で多種の瓦や朱付き瓦や香炉蓋形土器が出土し、未発掘の瓦分布の中心部分が伽藍地と想定される。遺構としては瓦分布範囲のほぼ東限と西限でそれぞれ南北溝が発見された。東溝の西側では掘立柱群が発見されたのに対して、東溝の東側では建物跡等は発見されていない。この東溝が寺院地の東を区画する施設の可能性がある。掘立柱建物群は東西棟が南北に2列認められ、これらは想定伽藍地の東側に隣接し、東溝に規制されている。総柱構造の掘立柱建物跡が含まれ、さらに掘立柱群は北側に続く状況で、九十九坊廃寺跡伽藍西側の建物群と類似している。

真行寺廃寺跡では寺院地の区画は不明であるが、中門より南は緩斜面であり、北側には谷津が入り込み、地形上、寺域の限界が認められる。伽藍の東溝の東側では鍛冶工房跡を含む竪穴住居跡群と多くの仏具と掘立柱跡が見つかっており、九十九坊廃寺跡伽藍西側の建物群と類似している。

木下別所廃寺跡の伽藍西側でも掘立柱跡が、伽藍北側と東側からは竪穴住居跡群と転用硯や畿内産土師

器などが発見された。伽藍の南からは竪穴住居跡が発見されず、伽藍の他の三辺から建物構成が異なる建物跡が発見された。

龍角寺は南大門と伽藍北側の東西溝の位置関係から、台地のくびれ部分を利用した伽藍地の占地が想像される。なお、南大門より南の台地では多くの竪穴住居跡が発見されているが、特徴的な建物跡などは未確認で、古墳時代後半から続く一般集落の様相が強い¹¹⁾。伽藍の西側は緩斜面で、東側は狭い台地端部である。一方伽藍北側は、東西150m、南北200mほどのやや広い台地が広がっており、この西側斜面に龍角寺所用瓦を焼成した龍角寺瓦窯跡群と五斗蒔瓦窯跡が発見されている。また、この台地の北側には東から入り込む谷津を挟んで天福遺跡が位置している¹²⁾。天福遺跡も龍角寺との関連が窺えるものの一般集落の様相がある。伽藍北方の台地上は未調査ながら、瓦工房跡とともに寺院付属施設が存在した可能性が高い。

以上、初期寺院の伽藍地周辺でも、特徴的な建物群や遺構の内容を分ける区画溝などが複数認められた。断片的ではあるが、伽藍地周辺に溝などによる区画施設や地形的境界が存在し、寺院地ないし寺院地内の区画の存在が想定される。また、伽藍周辺に特徴的な建物群が存在し、寺院の付属施設としての機能が窺える。ただ、九十九坊廃寺跡の伽藍西側等では複数の建物群が集中した状況が窺え、国分寺で見られた機能分化した建物跡群が独立しているあり方とは様相を異にしている。

4 その他の寺院の仏堂周辺の規則的な建物群

次に国分寺と初期寺院以外の寺院について仏堂周辺の規則的な建物群について検討してみたい。

小食土廃寺跡では仏堂を区画する溝の東側と北側から掘立柱建物跡が、西側からは竪穴住居跡が仏具とともに発見された。それぞれ溝に沿っており、建物構成による配置の規則性も認められる。このほか、北側の掘立柱建物跡付近からは、製鉄関連の遺構も発見されている。これらは三方を谷津に囲まれた60m～70m四方の狭い台地上にあり、広い台地との接続部分からは遺構が未発見で、寺院地として完結している。

白幡前遺跡からは四囲を溝で区画された遺構群が発見された。約35m四方の小規模な区画で、北西の三間四面の仏堂、北側の掘立柱建物跡群9棟及び南側の竪穴住居跡群9軒で区画内は構成されている。仏堂前面には空地があり、前庭として機能したことが窺える。区画内の建物跡には大きく3つの軸線があるが、これは三辺の溝に規制されたものである。建物構成による配置の規則性が窺え、掘立柱建物跡には仏堂と柱筋を揃えるものもある。複数発見された瓦塔は区画内の北側から発見され、掘立柱建物跡の中に瓦塔を納めた建物があったと想定される。また、鉄鉢形土器や浄瓶などの仏具も竪穴住居跡から発見されており、これらも仏堂に伴う施設と考えられる。なお、区画外からも広範囲に仏具は出土しているが、区画施設との間に規則性は認められず、遺跡全体でのあり方と差異はない。小規模ではあるが区画施設内が寺院地として機能し、周辺遺構は寺院と深く関わった寺辺の集落と位置づけられる。

このように寺院地が明確な事例において、仏堂が周辺から区分された小食土廃寺跡と、仏堂と付属施設が一つの区画に配置された白幡前遺跡の二つのあり方が認められた。後者も区画内の建物構成による配置の区分が認められる。これらは、寺院地内で仏堂、掘立柱建物跡及び竪穴住居跡がセットとして機能しており、こうしたあり方は周辺遺跡から独立した大塚前遺跡や針ヶ谷遺跡等でも認められる。大塚前遺跡では仏堂の東西から、並立する方二間の総柱構造の掘立柱建物跡1棟と竪穴住居跡1棟が発見された。掘立柱建物跡は僧坊ないし倉庫の機能が、東の竪穴住居跡は厨としての機能が想定される。針ヶ谷遺跡では西

面する仏堂の南側から竪穴住居跡1軒、側柱建物跡4棟がほぼ並立して発見された。また、内野台遺跡では仏堂群の東と北から竪穴住居跡4軒、側柱建物跡1棟、総柱建物跡1棟が発見された。東郷台遺跡では仏堂の北側から竪穴住居跡8棟と掘立柱建物跡2棟が発見された。掘立柱建物跡に接して集中して営まれた竪穴住居跡は8世紀第4四半期から9世紀後半に営まれ、仏教関係遺物が当初から認められる。掘立柱建物跡2棟も柱筋を揃え、仏堂の軸線と同一で、仏堂との規則的な配置が窺える。これらの事例は、仏堂とその周辺の規則的な配置の建物群が完結している遺構群であり、寺院地内の仏堂と付属施設のあり方が明確である。こうしたあり方は、周辺遺構に囲まれた他の事例でも認めることが可能である。

山田台廃寺跡では仏堂周辺から掘立柱建物跡6棟と竪穴住居跡11棟がまとまって発見された。仏堂の西側は小規模な掘立柱建物跡が、南は七間×二間の掘立柱建物跡が、東側は竪穴住居跡が特徴的に分布している。掘立柱建物跡などの軸線も仏堂や幢竿支柱跡とほぼ同一であり、柱筋も概ね揃えており、規則的な配置が窺える。

萩ノ原遺跡では仏堂群の北と西などから竪穴住居跡22棟と掘立柱跡群3か所が発見された。竪穴住居跡群は8世紀第4四半期から9世紀後半にかけて営まれ、各時期の各竪穴住居跡から多くの仏教関連遺物が出土した。掘立柱の建物復原が不十分なものの、竪穴住居跡を含めた大半の建物跡が仏堂と軸線をほぼ揃えている。竪穴住居跡群は笹生衛氏により仏堂と第1号柱穴に囲まれた南東のA群、第1号柱穴列の北側のB群、仏堂西側のC群に分けられている¹³⁾。A群が創建当初から連綿と続く一群であるのに対して、B群とC群は9世紀半ば以降に成立し、多くの鍛冶遺構を伴う。これら様相を異にする竪穴住居跡群が、仏堂や五間×三間に復原される第1号柱穴列を基準に配置されている。

こうした仏堂、掘立柱建物跡及び竪穴住居跡のあり方は、大きな集落遺跡内で発見された区画施設を有しない仏堂周辺の建物群にも認めることができる。永吉台遺跡群遠寺原地区は8世紀第3四半期に成立し、10世紀第4四半期まで続く。仏教関連遺物は8世紀第4四半期から9世紀第1四半期の間認められる。仏堂の北側には軸線を揃え、ほぼ並立する二間×三間の掘立柱建物跡が、仏堂の東側でも軸線や柱筋を揃えた規則的な配置の掘立柱建物跡群が発見された。この東側の掘立柱建物跡群には八間×一間の特徴的な建物跡が認められる。さらにその東側には、仏堂とは別の軸線に揃えた竪穴住居跡を中心とした建物跡群が認められる。この東側の竪穴住居跡群からは多くの仏教関連遺物が出土している。なお、仏堂からやや離れた台地西側の竪穴住居跡群からも多くの仏教関連遺物が出土しているが、建物配置の上で散在しており、仏堂東側の竪穴住居跡群のように規則的な配置が認められず、両者に大きな違いが認められる。仏堂東側の竪穴住居跡群は、台地東側の端部の地形的境界に軸線を揃え、仏堂の東側にまとまった規則的な配置が窺え、仏教関連遺物も多く出土しており、仏堂周辺の掘立柱建物跡群とともに寺院の付属施設の可能性がある。

郷部遺跡では8世紀第2四半期に集落が成立し、9世紀第3四半期まで続く。仏教関連遺物は8世紀第4四半期から9世紀第2四半期にかけて認められる。仏堂の南西に掘立柱建物跡2軒が柱筋を揃えて配置され、西にやや離れて4棟の掘立柱建物跡が発見されている。後者の掘立柱建物跡群もほぼ軸線を揃えており、うち2棟は建替えが認められる。なお、これら掘立柱建物跡群中の044号竪穴住居跡は8世紀第2四半期で、寺院整備以前の遺構である。仏堂周辺にはこのような規則的な掘立柱建物跡群が存在し、竪穴住居跡はこれを縁取るように配置されている。竪穴住居跡からは仏教関連遺物も出土しており、これら台地南西側に集中する建物群が寺院として機能した可能性がある。なお台地北側の建物群からは仏教関係遺物

の出土は認められず、台地南西側の寺院と想定される建物群とは異なる建物構成である。

山口遺跡では8世紀第2四半期に集落が成立し、9世紀第4四半期まで続く。仏教関係の墨書土器は8世紀第4四半期から9世紀第2四半期にかけて認められる。仏堂は掘立柱建物跡群の西側に広く展開し、他の掘立柱建物跡がこれらに近接し、これらを縁取るように竪穴住居跡群が分布している。これら竪穴住居跡の多くから仏教関連遺物が出土している。仏堂周辺に建物構成による配置の区分が認められる。

このように仏堂周辺に区画施設が確認されていない事例も、周辺に規則的な掘立柱建物跡群と仏教関連遺物を出土する竪穴住居跡群のまとまりが確認できる。こうしたあり方は、国分寺や初期寺院で認められた仏地ないし伽藍地周辺の特徴的な建物群のあり方と類似している。また、仏堂周辺の規則的な建物群についても、建物構成を異にした複数のものが認められ、性格を異にした建物群の可能性が高く、これが僧地と属地の違いを示す可能性もある。白幡前遺跡では仏堂の北東に掘立柱を中心とした建物跡群が、南東に竪穴住居跡群が配置され、異なる機能が想定される。北東の掘立柱建物跡群に近接した竪穴住居跡の覆土中から瓦塔や鉄鉢形土器、浄瓶が出土している点から、北側の掘立柱を中心とした建物跡群が僧坊や仏具を管理し、僧地として機能し、南東の竪穴住居跡群が属地として機能したと推測される。永吉台遺跡群遠寺原地区では仏堂と軸線を揃えた仏堂北と東の掘立柱建物跡群が僧地として機能し、その掘立柱建物跡群の東に別の軸線で揃えた竪穴住居跡を中心とした建物跡群が属地として機能したと推測される。こうした掘立柱を中心とした建物跡群が僧坊ないし仏具の管理施設などの僧地として機能し、竪穴住居跡を中心とした建物跡群が属地として機能したと推測される遺跡としては、ほかに大塚前遺跡や内野台遺跡、山田台廃寺、郷部遺跡などを挙げることが可能である。ただし、内野台遺跡や東郷台遺跡などでは特に全体の中で両建物跡群が接しており、僧地と属地が一体として機能したと推測される。国分寺や初期寺院では伽藍地内もしくは仏地に隣接して僧地があり、周辺の属地とは区画施設ないし建物配置等の上で明確な区分が認められた。それに対して、その他の寺院の僧地と属地は、建物構成と配置上区別があるものと、ないものの2種がある。僧地と属地との関わりは寺院運営を考える上で注目される。こうしたあり方の違いは寺院の規模や性格に関わると考えられる。

5 寺院施設の成立過程と寺院組織

このように国分寺や初期寺院など区画施設が認められる事例だけでなく、これまで集落遺跡内の仏堂と捉えられていた事例も、小食土廃寺跡や白幡前遺跡など区画施設が認められる事例と共通性があり、仏堂とその周辺に集中する規則的な配置の建物群が寺院として機能したと捉えられた。そこで、次に初期寺院の付属施設についてその成立時期と運営部門に触れ、あわせて小規模な寺院の付属施設と比較検討してみたい。

九十九坊廃寺跡の伽藍の創建は、創建期の重圈文縁単弁四葉蓮華文軒丸瓦の年代観から7世紀第4四半期から8世紀第1四半期にかけての時期と考えられる。一方、伽藍西側の建物群は8世紀後半に成立し、10世紀前半まで続く。伽藍の西側では寺院創建段階の遺構は発見されていない。これは伽藍内の堂塔の整備との関連で考えると興味深い。講堂基壇の版築中から複数の瓦敷面が確認され、講堂基壇に先行する瓦葺き建物跡の存在が想定され、金堂ないし塔の成立後に講堂が整備されたと考えられる。出土瓦も創建期から8世紀中葉にかけての4段階の瓦群の存在が明らかにされている¹⁴⁾。創建期の瓦が全体の6割を越え、

それ以降の瓦群は補修瓦と位置づけられている。ただし各堂塔の瓦の使用状況が不明な現段階では、後続の堂塔の整備に伴う瓦の追加生産の可能性もある。こうした瓦生産の時期と、瓦葺建物跡が見られない伽藍西側の建物群の成立時期に連続性がやや認められる点が注目される。伽藍北方と推測される僧坊等の施設が不明であるが、伽藍の整備から運営部門を含めた付属施設の整備へという寺院全体の成立過程を示す可能性がある。

こうした伽藍と周辺建物群の成立時期との差異は、断片的ではあるが他の事例でも認められる。二日市場廃寺跡の伽藍の創建は、遺構は未発見ながら、創建瓦の雷文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦等の年代観から7世紀第4四半期と考えられる。一方、想定伽藍東側の掘立柱建物跡の多くの柱穴からは根固めとしての瓦が多く出土し、これらの大半が創建段階から遅れる可能性が指摘され、さらに根固め瓦の中に8世紀中葉の補修瓦も認められる点から、この建物群は9世紀から10世紀後半を中心とした時期と想定されている¹⁵⁾。

また、真行寺廃寺跡の伽藍の創建は、創建瓦の雷文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦の年代観から7世紀第4四半期から8世紀第1四半期にかけての時期で、これは金堂に伴うものと考えられる。なお、講堂は基壇構築方法が特徴的で、上総国分寺跡との共通性が認められることから、国分寺創建段階まで降ると考えられている¹⁶⁾。これは国分寺系瓦が多く出土している点からも容易に推測される。そして、伽藍西側の掘立柱列が金堂と軸線を揃えるものから、講堂に軸線を揃えるものへ建替えが認められ、伽藍区画施設が創建段階と講堂成立段階の2段階の整備が認められる。一方、伽藍東側の建物群については、そのうちの鍛冶工房は8世紀後半ないし末から9世紀初頭にかけての操業と位置づけられている¹⁷⁾。また、8世紀後半から10世紀初頭にかけての仏具が多く認められ、東側建物群も8世紀後半以降に整備が進んだ可能性がある。

このように伽藍の整備に遅れて、付属施設が整備されたと考えられる事例がある。この点について山背の初期寺院の北野廃寺跡や北白川廃寺跡などで、寺院地の成立や付属施設の整備が伽藍地の造営に対して遅れる点を網伸也氏が指摘されており¹⁸⁾、初期寺院の成立過程の一つのあり方と考えられる。また、初期寺院ばかりでなく、国分寺創建期瓦を出土する千草山遺跡でも伽藍と付属施設の成立時期に差が存在した可能性がある。基壇建物跡の北方で確認された区画溝や掘立柱建物跡、竪穴住居跡は9世紀以降の遺構群と捉えられ、国分寺創建期よりも降る時期の遺構である。区画施設や北方建物跡を「岡館」との関連で捉える指摘もあり¹⁹⁾、寺院としての全体像も不明であるが、現段階では伽藍に対して付属施設の整備が遅れた事例の可能性もある。

こうした付属施設の中で特に政所院や政所屋の成立は寺院の組織に関わる問題である。寺院組織を窺わせる資料として、国分寺レベルの「講院」等を除くと、上総国分寺に隣接する下アラク遺跡出土の墨書土器「綱所」や多田日向遺跡出土の墨書土器「三綱寺」がある。多田日向遺跡は一間四面の仏堂を中心に、規則的に配置された掘立柱建物跡群と竪穴住居跡群が発見され、これらが寺院として機能したと考えられる遺跡である。この遺跡からはほかに墨書土器「観音寺」など複数の寺名の墨書土器が出土している。これらがすべて多田日向遺跡の寺院の名前を指すものか、関係がある別の寺院の名前を含むものかは不明である。ただし、多田日向遺跡からは僧坊もしくは礼堂として機能したと考えられる八間×二間の掘立柱建物跡のほかに、仏堂の西と北に2つの掘立柱建物跡群が認められ、僧地とは別に運営施設の存在を想定することが可能な遺跡である。こうした三綱に関わる墨書土器が出土した点は注目される。三綱制は中国に淵源があり、当時の東アジアにおける仏教教団固有の寺職である。奈良時代から平安時代にかけて三綱による寺院運営がなされたと捉えられているが²⁰⁾、地方寺院での具体的な実態は不明に近い。すべての寺院で

上座と寺主、都維那からなる三綱が寺院運営に当たったかは疑問であるが、上総国分寺の政所院に見られる官衙的な配置の建物群の存在は、こうした三綱をはじめとした寺院組織の存在を窺わせるものである。日本の三綱などの寺院組織については、官司的性格が指摘されており、こうした組織の性格が建物配置の上でも示されていると考えられる。初期寺院の九十九坊廃寺跡の伽藍西側の建物群でも、北から中央にかけてL字形や縦列形の官衙的な配置を読みとることが可能である。これらは、寺院運営施設を含む可能性も高い。その他の寺院でも、仏堂周辺に規則的な配置の複数の並立する掘立柱建物跡群が認められる小食土廃寺跡や、永吉台遺跡群遠寺原地区、山口遺跡、郷部・加良部遺跡では、僧坊とは別に寺院運営施設を備えた付属施設を有した可能性が考えられる。一方で、仏堂周辺に複数の規則的な配置の建物群が認められる事例であっても、厨や下働きの人々が暮らした竪穴住居跡で属地が主に構成された多くの事例では、宗教施設としての寺院機能の完結性は窺えるものの、自立的な組織としての寺院運営は不完全なものと推測される。初期寺院における伽藍に対する運営施設を含めた付属施設の整備が遅れたあり方を参考にするならば、これは寺院の整備過程を示すものかもしれないが、この時期における多くの小規模な寺院のあり方と考えられる。

では、こうした自立的な運営施設が整備される以前の寺院や、自立的な運営施設を有しない寺院の運営・経営はどのようになされたのであろうか。大寺院との関係や、有力な檀越との関係が想像される。初期寺院については、隣接する大規模な古墳群の造営者や国造・郡司層との関係がこれまで多く指摘されている。また、国分寺造営期以降の寺院跡については中小の有力豪族層や国分寺・初期寺院等との関係が指摘されている。こうした点をふまれば、初期寺院にみられる寺院運営施設の成立過程は、有力な檀越である郡司層等の家政機関から徐々に自立していく過程と考えられる。また、自立的な運営施設が認められない小規模の寺院については、寺院の運営や経営を有力な檀越や大寺院が握っていたと考えられる。寺院と檀越との関連が窺える資料として、永吉台遺跡群遠寺原地区出土の墨書土器の中に、8世紀後半の「家カ」「士家」、9世紀前半の「士寺」「田寺」、9世紀中葉の「士寺」「西カ寺」「家」の資料がある。これらは比較的まとまった資料で、遠寺原地区の寺院と関連するものと考えられるが、その中で「士家」と「士寺」の存在が目立つ。「士家」がある有力な富家の存在を示すものと考えれば、「士寺」はその有力な富家と寺院との深い関係を示している。そして、「士家」から「士寺」への変遷傾向は、有力な檀越の家政機関から自立的な寺院運営組織へと整備されていく過程を示す可能性がある。一方、大寺院と小規模寺院との運営面における関係については、小規模寺院で出土する国分寺や初期寺院の瓦の存在から既に多く指摘されている²¹⁾。

6 仏堂と周辺建物群との関係にみられる寺院と堂

国分寺や初期寺院とそれ以外の寺院について、伽藍地ないし仏堂周辺に規則的な複数の建物跡群のまとまりが認められるものをこれまで取り上げてきた。ただし、このほかにも多くの仏堂が発見されている。この中には、仏堂と周辺の付属施設のまとまりが不明確なものや、仏堂周辺の規則的な建物跡群が小規模なものや認められないものがある。最後に、こうした事例に触れ、もう一つの仏教施設のあり方を検討してみたい。

大井東山遺跡では一間四面の掘立柱建物跡と熨斗瓦などの瓦が発見され、一間四面建物跡が簡単な薨棟

葺の仏堂と考えられている。やや散在ぎみに分布する周辺の竪穴住居跡から墨書土器「新生寺」や灯明皿、転用硯等が出土したが、仏堂との間の規則的な配置はほとんど窺えない。

江原台遺跡では集落の北側の周溝状遺構から瓦塔片がまとまって発見された。覆屋は確認されなかったが、この周溝状遺構と瓦塔が仏堂として機能したと考えられる。これに接して、竪穴住居跡3軒と掘立柱建物跡1棟が発見された。この掘立柱建物跡は集落北側では唯一発見された掘立柱建物跡であるが、これらと竪穴住居跡との配置の規則性は弱い。

谷津遺跡では集落の北側から、瓦塔と瓦堂が柵列状遺構に伴って発見された。この遺構と瓦塔・瓦堂が仏堂として機能したと考えられる。ただし、この周辺からは仏堂と同時期の竪穴住居跡の分布は散漫で、掘立柱建物跡も北側に1棟のみである。

これらの事例は仏堂が明確ながら、周辺の建物群の配置上の規則性が弱く、仏堂と付属施設のまとまりが周辺遺構群中にあって不明確なものである。これらは母屋と庇を有した定型的な建物構造である点や、瓦塔を伴うという点で仏堂と捉えられるものである。このほかに村上込の内遺跡や白幡前遺跡Ⅰ群Bグループ、庄作遺跡も瓦塔をまつた施設が不明確ながら、小規模な仏堂の存在を窺わせる事例である。また、定型的な仏堂や瓦塔が出土していない遺跡でも仏教関連遺物がまとまって継続的に出土する状況から仏堂の存在が窺われる事例もある。ただし、こうした事例は先の大井東山遺跡や江原台遺跡、谷津遺跡同様に、仏堂周辺に規則的な複数の建物群の存在が認められず、前節までに取り上げてきた寺院跡とは空間構成の上で大きく異なっている。自立的な運営施設ばかりでなく、専住する宗教者の居住施設や、日々の法会や勤行に必要な諸施設の存在という点からも、寺院機能の上で大きな違いがある。運営・維持する上でも周辺に拡く展開する集落遺跡の遺構群の存在がより重要な寺院と考えられる。なお、大井東山遺跡からは墨書土器「新生寺」が、江原台遺跡からも墨書土器「寺」が出土しており、これらが当時寺と呼ばれていた可能性がある。同時期の記録である『日本霊異記』では仏教施設が「寺」、「山寺」、「堂」と使い分けられている。「寺」は官・国又は有力な貴族・豪族によって建てられ、官僧が常住し設備内容が整って寺院としての体面を備えているもの、「山寺」は僧侶の修行の場所として建立され、国家あるいは特定の貴族・豪族や村落との関係がほとんど見られないもの、そして「堂」は①村人らの建立②優婆塞が居住（専門僧侶はいない）③檀越が寺の管理・造仏を造る④本尊は木造⑤里名を寺名とする特徴が指摘されている²²⁾。また、村落の信仰の基本が「堂」の基本的なもので、仏道を修行する場所という性格が加わると、道場と呼ばれ、さらに設備や規模が充実すると「寺」と呼ばれるとも指摘されている。ただし、県内からは多数の寺名墨書土器や墨書土器「寺」が出土しているのに対して、「堂」と記された墨書土器はこれまでに発見されておらず、県内での寺と堂との具体的な使い分けは確認できない。ただし、『日本霊異記』での使いわけも、奈良時代から平安時代初頭の畿内を中心とした使いわけのひとつであるが、僧侶の居住や管理、設備、規模等が「寺」と「堂」の区別の要素である点は注目される。仏堂周辺の規則的な複数の建物群の存在の有無にみられる寺院の機能や様相の違いは、『日本霊異記』にみられる「寺」と「堂」の区別と類似するものと考えられる。なお、「山寺」や道場については、扱う余裕がないので、第Ⅳ章で若干触れたい。

以上、伽藍や仏堂周辺の規則的な建物群に注目して、国分寺や初期寺院、その他の寺院について、空間的分析を試みてきた。また、国分寺の実態や、初期寺院と檀越層との関係、小規模寺院と大寺院・有力豪族層・周辺集落遺跡との関係、集落遺跡内の仏堂の性格など、多種多様な寺院の性格や機能を考える上で、付属施設の検討が重要と考え、推測を重ねた。県内の多種多様な寺院について笹生衛氏によって、これま

でに国分寺・郡寺・定額寺・山林寺院（山寺）・別院・修行場・村寺・村堂に類型化され、これらのネットワークの存在が指摘されている²³⁾。こうした類型化を寺院の空間構成から導くことが今後の課題である。

註

- 1) 宮本敬一 1981 「上総国分寺の伽藍と付属諸院」『月刊歴史教育』30～33
 山路直充 1994 「寺院地という用語」『下総国分寺跡 平成元～5年度発掘調査報告書』市立市川考古学博物館
 須田勉 1994 「国分寺創建の諸問題」『シンポジウム 関東の国分寺 在地からみた国分寺の造営 資料編』関東古瓦研究会
 大脇潔 1997 「古代寺院と寺辺の景観を復原するーその研究史と問題の所在」『摂河泉の古代寺院とその周辺』第1回摂河泉古代寺院フォーラム
- 2) 坂詰秀一 1982 「初期伽藍の類型認識と僧地の問題」『歴史考古学研究』II ニューサイエンス社
- 3) 上原真人 1986 「仏教」『岩波講座 日本考古学4』岩波書店
- 4) 今泉潔他 1984 『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』(財)千葉県文化財センター
- 5) 井上充夫 1969 『日本建築の空間』鹿島出版会
- 6) 清水擴 1992 『平安時代仏教建築史の研究』中央公論美術出版
- 7) 藤井恵介 1990 「平安初期礼堂試論」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1990年度大会(中国)
- 8) 5と同じ
- 9) 笹生衛 1993 「「村落内寺院」における堂宇建物と仏教信仰」『野中徹先生還暦記念論集』野中徹先生還暦記念祝賀会
- 10) 稲葉昭智 1996 『南子安金井崎遺跡』(財)君津郡市文化財センター
- 11) 大原正義 1989 『栄町龍角寺確認調査報告書』千葉県教育委員会
- 12) (財)印旛郡市文化財センター 1988 『財団法人印旛郡市文化財センター年報4』
- 13) 笹生衛 1990 「袖ヶ浦町遠寺原遺跡・東郷台遺跡・市原市萩ノ原遺跡」シンポジウム『平安前期の村落とその仏教』千葉県立房総風土記の丘
 1991 「シンポジウム 平安前期の村落とその仏教〈記録集〉」『千葉県立房総風土記の丘年報』14
- 14) 永沼律朗 1990 「上総における瓦生産の一例」『千葉県文化財センター研究紀要』12
- 15) 郷堀英司他 1984 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会
- 16) 今泉潔他 1984 『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』(財)千葉県文化財センター
- 17) 滝口宏他 1985 『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告 鍛冶工房址の調査』成東町教育委員会
- 18) 網伸也 1997 「北山背における7世紀の寺院造営」『古代寺院の出現とその背景』第42回 埋蔵文化財研究集会
- 19) 田中清美 1995 「謎の千草山廃寺跡(予察)」『市原市文化財センター研究紀要』III
- 20) 牛山佳幸 1986 「諸寺別当制をめぐる諸問題」『古代史研究の最前線』第二巻
- 21) 須田勉 1985 「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』II
 笹生衛 1994 「古代仏教信仰の一側面」『古代文化』46-12
- 22) 直木孝次郎 1960 「日本霊異記にみえる「堂」について」『続日本紀研究』7-12

- 23) 笹生衛 1994 「古代仏教信仰の一側面」『古代文化』46-12

Ⅳ 房総における古代寺院の成立過程

—— 印幡郡・埴生郡を例として ——

はじめに

今回の資料調査と収集の中でいくつかの成果と多くの問題点が明らかとなった。そこで、今後につなげるため、古代寺院の成立過程を素描してみたい。ただし、房総三国を扱うには力量不足であり、下総国印幡郡と埴生郡の地域に限定する。龍角寺等の成立が評や印幡国造とも関わる年代で、郡・評成立以前はこの2郡は一つの地域と捉えられる可能性がある。

1 小地域の設定

『和名類聚抄』によると印幡郡は八代、印幡、言美、三宅、長隈、鳥矢、吉高、船穂、日理、村神、余戸の11郷、埴生郡は玉作、山方、麻在、酢取の4郷の記録が残されている¹⁾。このうち遺称地名が認められるものに、印幡郡の八代、長隈、吉高、船穂、村神、埴生郡の麻在、酢取がある。遺称地の分布傾向から印幡郡が現在の印旛沼周辺に、埴生郡が印旛沼北方から根木名川周辺に拡がっていたと捉えられる。そこで、最初にこれら郷の分布をふまえた小地域の設定を行いたい。

埴生郡には埴生郡三社といわれる一宮神社が現在栄町安食字矢口に、二宮神社が成田市松崎字遠原に、三宮埴生神社が成田市郷部字三宮に所在している²⁾。遺称地名が確認できない玉作郷は二宮神社が位置する松崎・上福田周辺に、山方郷は三宮埴生神社が位置する郷部周辺と推測される³⁾。なお、鎌倉時代前期に遡る遠山方郷は、遺称地として成田市遠山があり、郷部の根木名川対岸に当たる。この遠山方郷と山方郷については、印旛沼や長沼方面から見てやや内陸の山口、郷部、囲護台など根木名川支流の小橋川上流域を山方と呼び、さらに内陸部の根木名川の対岸地域を遠山方と称した地名と木村修氏により指摘されている⁴⁾。前代の古墳時代後期の古墳分布からも根木名川西岸周辺には北から南羽鳥古墳群、竜角寺古墳群、大竹・上福田古墳群、公津原古墳群という大規模古墳群がづらなっており、各古墳群の分布が郷を比定する上で参考になる。なお、根木名川上流の中世の遠山方郷周辺には野毛平古墳群が、中世の河栗郷周辺には川栗・久米野古墳群が重なるが、両古墳群とも比較的小規模である。古墳群や古代の郷、古代後半から中世の荘園への地域単位の流れで捉えると根木名川西岸周辺地域を、竜台川西岸周辺(想定麻在郷、A)、竜台川東岸周辺(想定羽鳥郷、B)、根木名川支流の松崎川周辺(想定玉作郷、C)、根木名川と支流小橋川・取香川周辺(想定山方郷、D)の4つの小地域に分けられる。

次に印幡郡についても、遺跡分布と郷の存在をふまえて小地域分けしてみると、江川周辺(想定八代郷、E)、酒々井中川周辺(想定印幡郷、F)、亀成川中・上流周辺から利根川右岸(想定言美郷、G)、亀成川下流と支流浦部川周辺(想定三宅郷、H)、高崎川周辺(想定長隈郷、I)、鹿島川周辺(想定鳥矢郷、J)、印旛沼西岸周辺(想定吉高郷、K)、神崎川下流から支流戸神川周辺(想定船穂郷、L)、手操川周辺(想

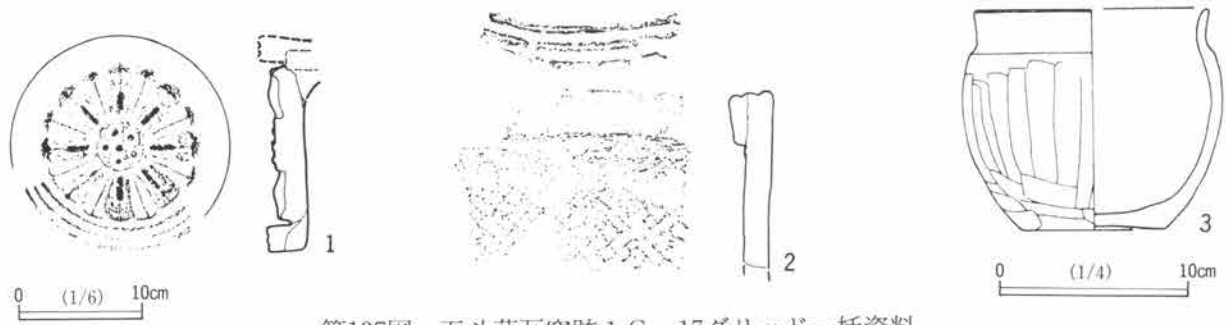
定日理郷、M)、新川周辺(想定村神郷、N)、高崎川支流の南部川周辺(想定余戸郷、O)の11地域に分けられる。ただし、印幡郡の郷の想定には問題の余地もあり、遺跡分布の詳細な検討が今後必要である。

2 7世紀後半の初期寺院の成立

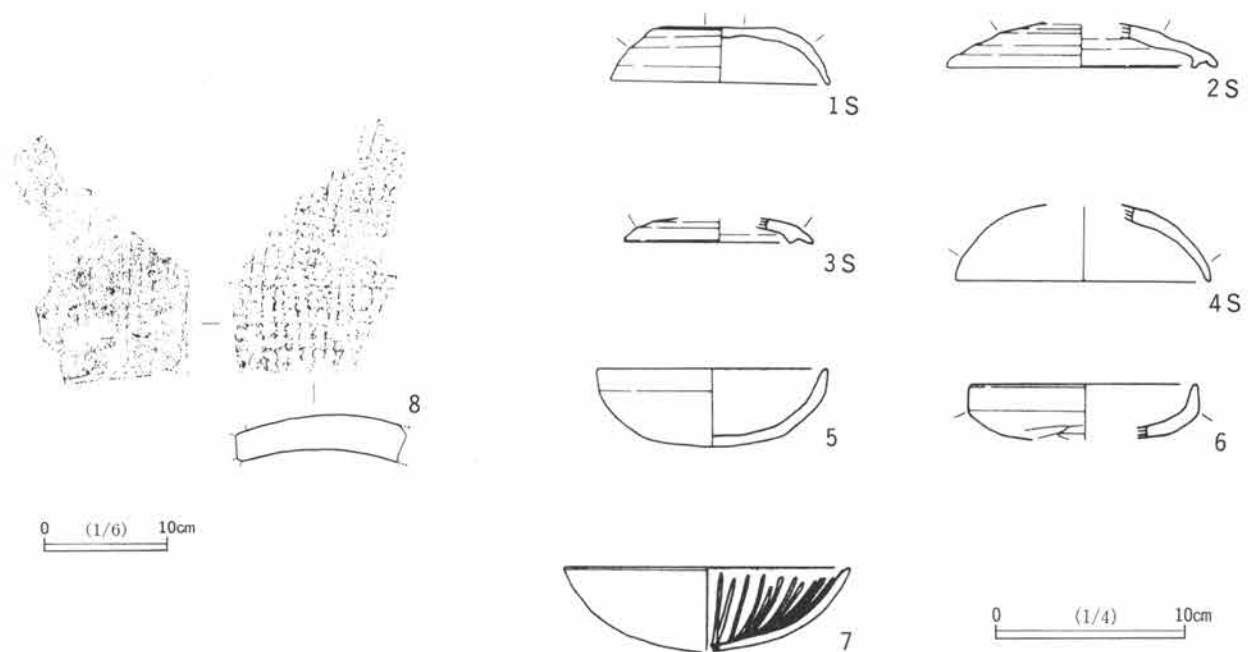
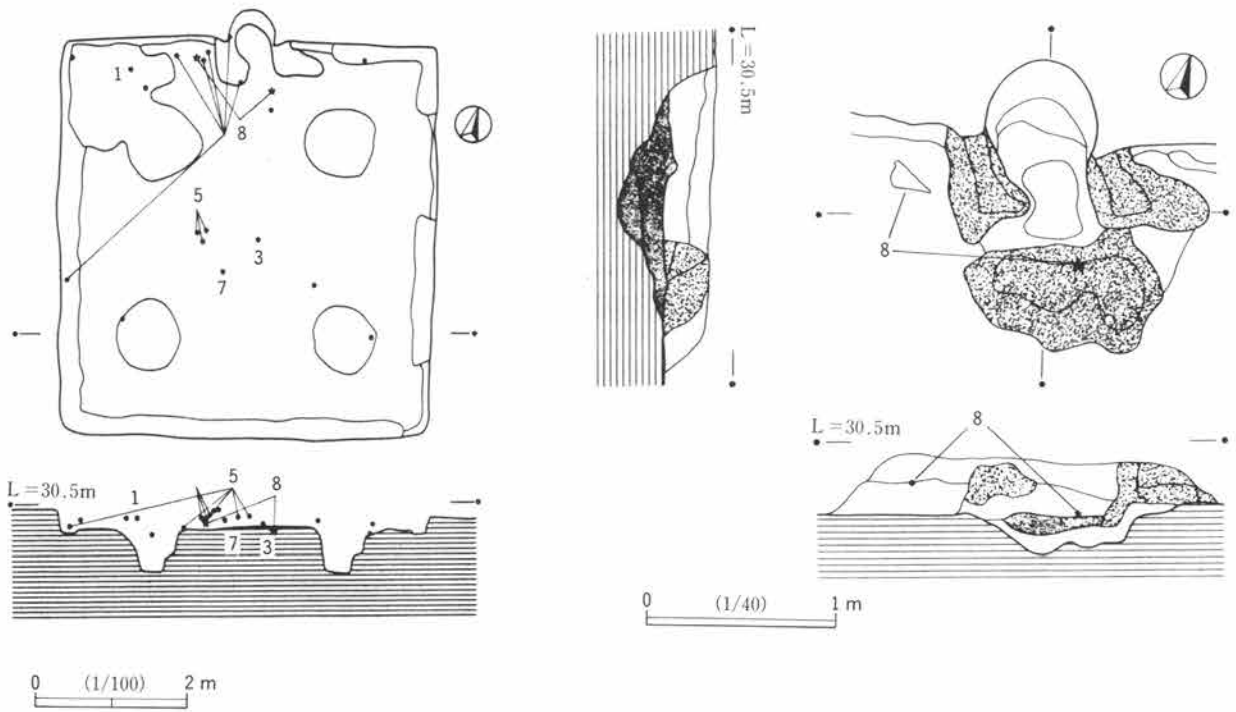
下総国で最初の寺院の龍角寺は金堂と塔を備え、埴生郡の北西の旧香取海に面した竜台川西岸地域に位置している。創建期軒瓦は三重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦の組み合わせである。この軒丸瓦の範型は一つであるが、中房蓮子の2度の彫り直しが確認され、3度の変遷が認められる。第1段階は1+5の蓮子配置で、中心と周辺蓮子が同じ大きさである。第2段階は中心蓮子を周辺よりも一まわり大きく彫り直し、第3段階は周辺蓮子を増やして1+10に彫り直している。この第1段階の瓦が生産遺跡の五斗蒔瓦窯跡の窯前ピットから7世紀第3四半期の鉢と共伴し⁵⁾、第3段階と想定される平瓦が周辺の向台遺跡のS I 3住居跡の崩落カマド内から7世紀第3四半期から第4四半期前半の土器と共伴し⁶⁾、第2段階の軒丸瓦が周辺の天福遺跡で五斗蒔瓦窯跡の窯前ピット出土と同一の鉢と共伴している⁷⁾。こうした土器との共伴関係から、7世紀第3四半期には龍角寺の造営が始まっていたと石戸啓夫氏により指摘されている。

なお、第2段階と第3段階の軒丸瓦には接合する丸瓦先端を片柄形に加工した製品が多い。これは瓦当文様上の祖形である大和・山田寺跡出土瓦の創建段階から塔再開期に認められる特徴的な技法である⁸⁾。7世紀前半の飛鳥寺跡⁹⁾や坂田寺跡¹⁰⁾等の出土瓦で認められ、7世紀後半では山田寺跡や田中廃寺跡¹¹⁾、石川廃寺跡¹²⁾など一部の寺院で認められる。片柄形加工は浅い切り方から深い切り方へと変化し、技法の拡がりが限られてくる。龍角寺の片柄形加工は山田寺よりも深い切り方である。こうした7世紀後半の中央で限定的な技法が、文様上の型式化にある龍角寺で確認された点は注目される。細かい造営過程と瓦の変遷が認められる山田寺跡との関係から、龍角寺もより細かな年代が問題となる。さらに山田寺式軒瓦には氏寺から準官寺扱いに性格が変化する¹³⁾山田寺跡の出土瓦と、百済大寺の可能性が高い吉備池廃寺跡の出土瓦¹⁴⁾等があり、龍角寺に伝わった山田寺式軒瓦の直接の祖形を明らかにすることは龍角寺成立における歴史的背景の問題と深く関わってくる。畿内を中心として全国的に分布する山田寺式軒瓦の中で、中房蓮子1+5などの特徴的な文様と丸瓦先端片柄形加工などの特徴的な技法から、龍角寺創建期瓦の直接の祖形を絞りこむことは可能であろう。全国的な問題であり、今後の大きな課題である。

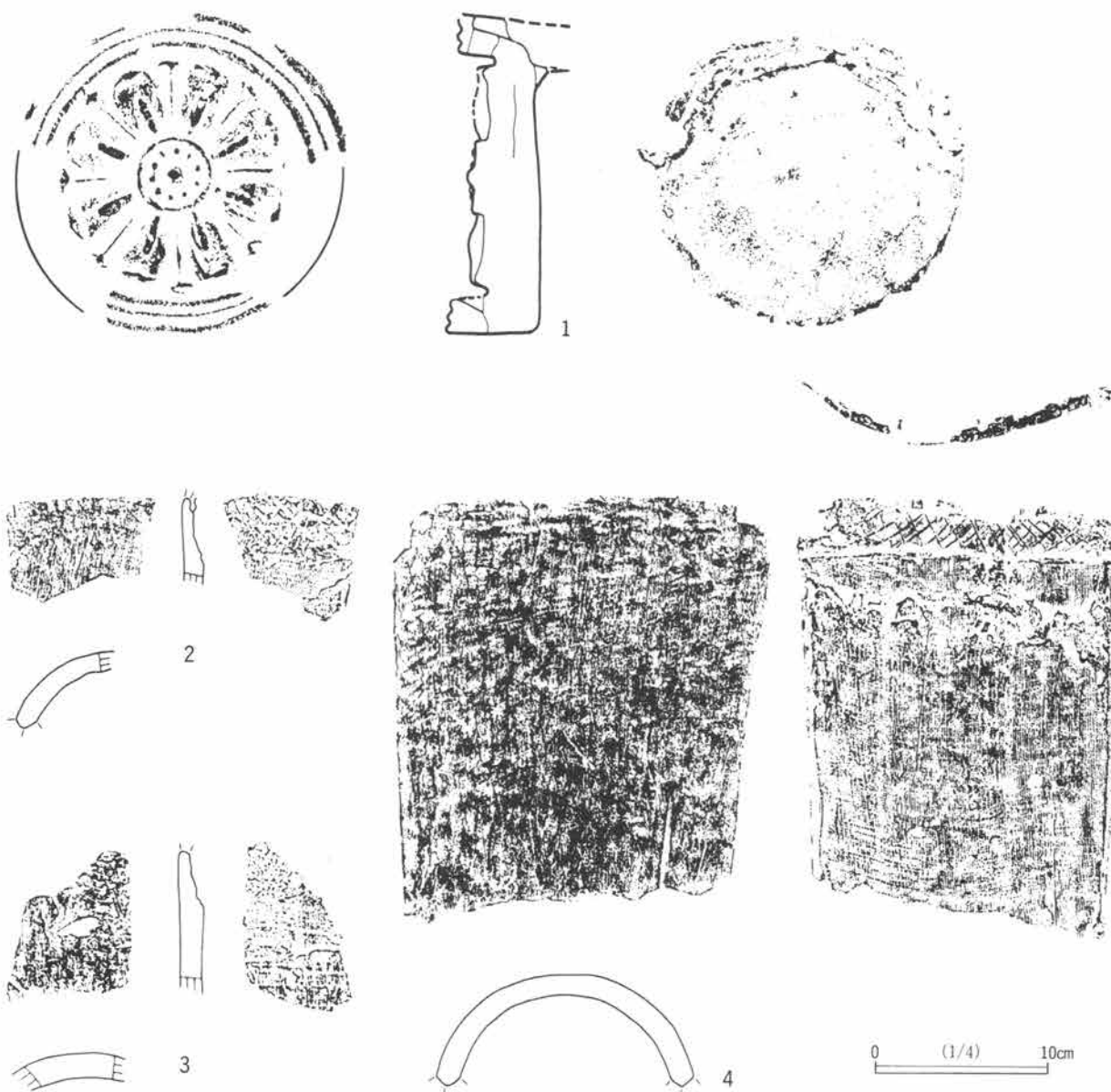
一方印幡郡域では最初に木下別所廃寺跡が造営された。印幡郡域の最も北側で、旧香取海に面した亀成川中・上流周辺地域に位置している。創建期軒瓦は三重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦の組み合わせである。軒丸瓦の中房の中心蓮子が周辺蓮子よりもやや大きく、龍角寺創建期軒丸瓦の第2段階以降の影響が認められる。軒丸瓦に接合する丸瓦先端は凹凸面を削って先を尖らせたものと、未加工のものがある¹⁵⁾。年代的には岡本東三氏により7世紀第3四半期と位置づけられている¹⁶⁾。龍角寺出土軒瓦が型式化したものは下総国のほかに上総国や武蔵国、常陸国まで分布しているが、下総国では旧香取海から旧樺海に面した場所に特に集中している。旧鬼怒川の川尻から外洋に向かって木下別所廃寺跡、龍角寺、龍正院、名木廃寺跡、木内廃寺跡、そして樺海沿岸の八日市場大寺廃寺跡である。名木廃寺跡を除くと、これらは郡・評単位の地域を代表する寺院跡である。龍正院は実態不明ながら、近接して3基の瓦窯跡が発見され、大量の瓦を葺いた本格的な寺院跡と推測される。一方、名木廃寺跡は出土瓦が少なく、龍正院



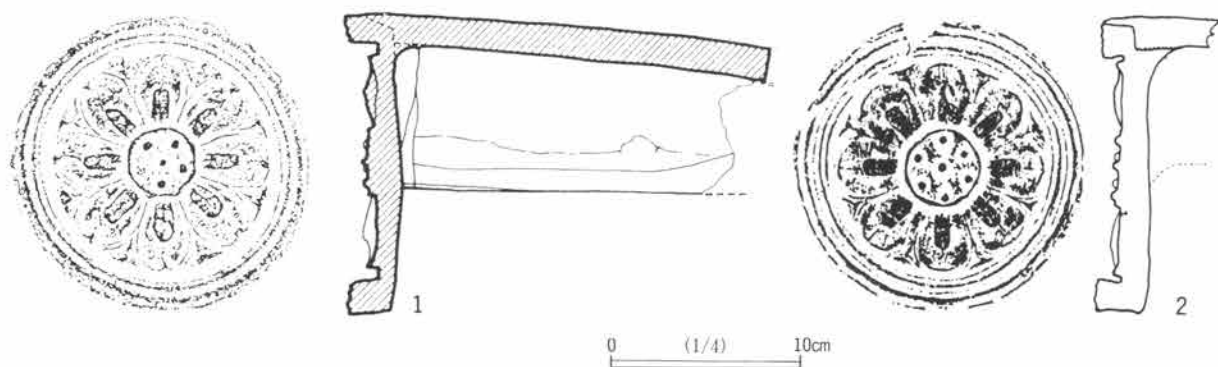
第137図 五斗蒔瓦窯跡 1 G-17グリッド一括資料



第138図 向台遺跡 S I-3遺物出土状況図・出土遺物



第139図 県内丸瓦先端部片柄形加工資料
(1. 五斗蒔瓦窯跡 2~4. 大畑 I 遺跡 S I 36)



第140図 大和丸瓦先端部片柄形加工資料
(1. 山田寺 2~4. 田中廃寺跡)

との関係で成立した小規模寺院と捉えられる。こうした郡・評単位の地域を代表する初期寺院の中には郡家推定地と近接しているものが認められる。ただし、印幡郡の郡家推定地は酒々井中川周辺の酒々井町本佐倉など印旛沼南岸と捉えられ¹⁷⁾、木下別所廃寺跡が位置する地域とは明らかに異なる。評家や郡家の成立にみられる地方の律令体制の整備と深く関わって成立した初期寺院とは様相をやや異にする。木下別所廃寺跡の成立背景を考える上で、前代の古墳群分布に見られる有力な檀越との関係が前提や背景とはなるが、常陸国や外洋とつながる旧香取海と旧椿海周辺に集中する龍角寺軒瓦によっていち早く成立した下総国の初期寺院の立地の共通点が注目される。下総国は畿内と蝦夷地域とを結ぶ東海道のルート上で、当時の重要政策の一つである対蝦夷関係で、旧香取海や旧椿海の津が政治経済上重要な場となっていた点が推測される。こうした東国交通の要衝という政治経済上の重要性の高まりを背景として、下総国では龍角寺や木下別所廃寺跡などの多くの初期寺院が次々と成立したと捉えられる。

3 8世紀前半の初期寺院の整備

龍角寺出土瓦には創建期瓦のほかに、葡萄唐草文軒平瓦が出土している。また、伽藍について、南大門・金堂の軸線から東側にずれて塔が配置されている点から、最初は金堂のみの一堂式で、後に塔を建て、伽藍を整備した可能性が指摘されている¹⁸⁾。わずかに出土した葡萄唐草文軒平瓦はいずれも塔北方から出土しており、創建段階以後に塔が追加変更された可能性がある。葡萄唐草文軒平瓦の年代観は、8世紀初頭から8世紀中葉と捉えられている¹⁹⁾。下総国に広く分布する下総国分寺系の軒瓦は龍角寺では未確認であり、国分寺成立以前の8世紀前半に塔建立を含めた伽藍の整備が行われたと推測される。

また、印幡郡では長熊廃寺跡が8世紀第2四半期に成立する。三重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文様軒平瓦の組み合わせである。軒丸瓦は龍角寺出土瓦の型式化と捉えられるが、子葉が消滅し、型式化が著しい。また、平瓦は凸型台一枚造りのみで、旧香取海と旧椿海周辺に分布する龍角寺式軒瓦のあり方とは一線を画している。また、軒丸瓦全体の2%ほどの常陸国分寺系の軒丸瓦が出土している。これを補修瓦と捉えれば、国分寺成立以前に長熊廃寺跡が成立していたと考えられる。なお、8世紀第3四半期の墨書土器「高罌寺」が出土し、「高罌寺」が長熊廃寺跡の寺名の一つである可能性が高い。高岡は現在の隣接する字名と一致しており、郷よりも小地域の地名に由来する寺名と推測される。ただし、長熊廃寺跡は隅切り瓦を含む多量の出土瓦から金堂は本瓦葺きの屋根構造と想定され²⁰⁾、郷よりも小さな地域を背景として成立した寺院跡とは考えがたい。寺名は通称も含め、使用方法により複数認められることが多く、「高罌寺」も地域の中で使われた長熊廃寺跡の寺名の一つと捉えられる。むしろ長熊廃寺跡は印幡郡家推定地周辺に位置し印幡郡の郡司層を有力な檀越とした寺院跡と想定される。印幡郡の郡家として、長熊廃寺跡の北約600mに位置する酒々井町の猿楽場遺跡、本佐倉大堀遺跡周辺が有力な候補地である。長熊廃寺跡の谷津向かいの高岡大山遺跡からは大規模な倉庫群やコの字形配置の掘立柱建物跡群が発見されており、長熊廃寺跡周辺が印幡郡の政治経済上の中心地であったと考えられる²¹⁾。

このように埴生郡では龍角寺の伽藍の整備が、印幡郡では長熊廃寺跡の造営が8世紀前半に認められる。埴生郡家推定遺跡の大畑遺跡からは軒丸瓦を含めた龍角寺出土と同一の瓦が多く出土し、墨書土器「寺」も出土し、寺院と郡家との深い関係が想定される。前段階が旧香取海や旧椿海に面した東国交通の要衝に初期寺院の造営が認められるのに対して、8世紀前半には郡家周辺に位置する寺院の整備と造営が特徴的

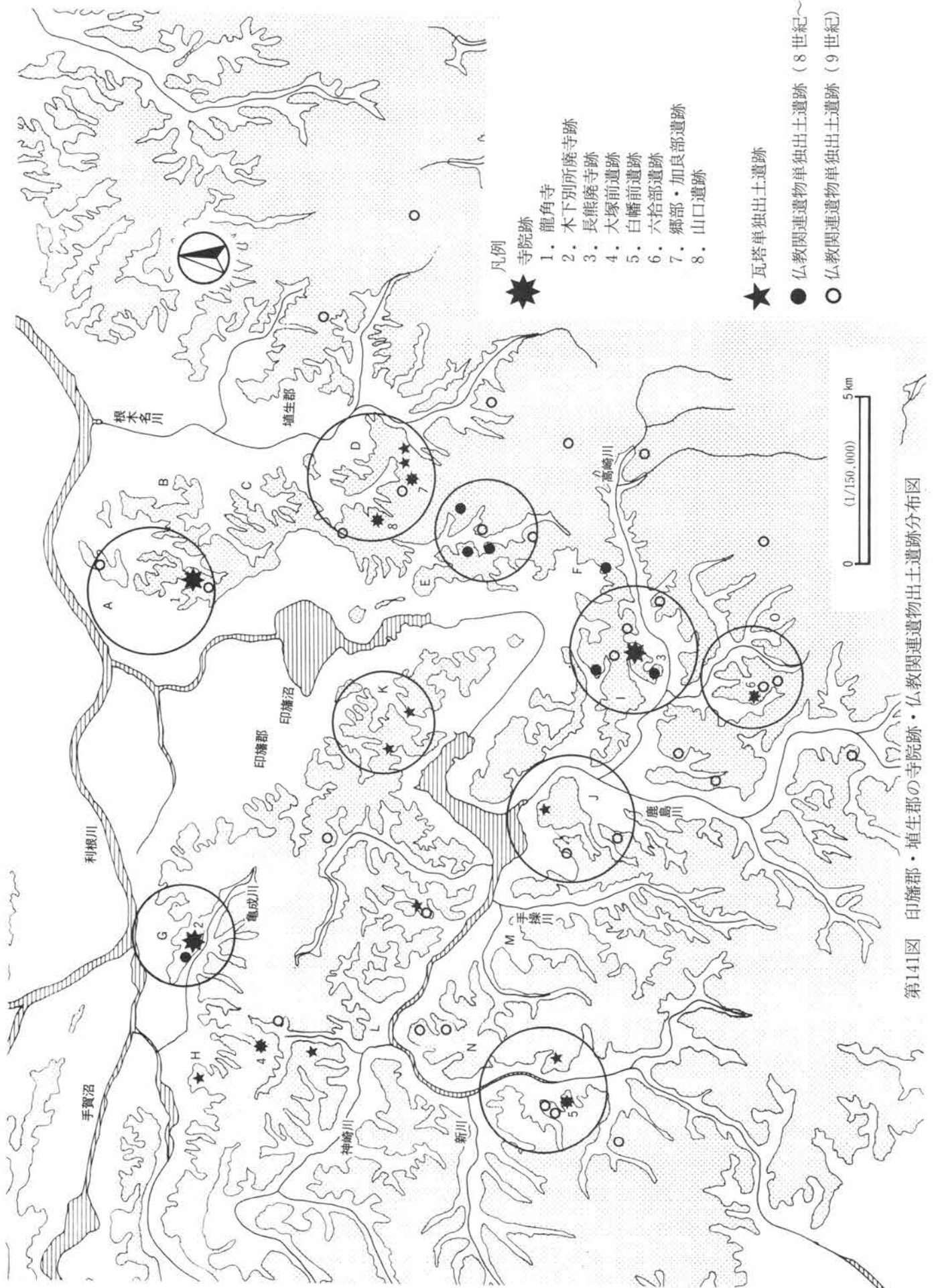
である。なお、下総国ではこのほか、結城郡で結城廃寺跡が、千葉郡では千葉寺が各郡の中心地付近に成立する。また各郡の中心地付近に位置する海上郡の木内廃寺跡や匝瑳郡の八日市場大寺廃寺跡等でも国分寺前段階の補修瓦の存在を多く確認することができる。次の8世紀後半の段階には、小規模な寺院跡の成立が多く認められるのに対して、この8世紀前半段階は各郡の拠点的な寺院の伽藍整備が顕著に認められる。

4 8世紀後半の各小地域への寺院造営の拡がり

8世紀後半になると長熊廃寺跡が位置する高崎川周辺地域の遺跡から多くの仏教関連遺物が発見される。廃寺跡の谷津向かいの高岡大山遺跡から鉄鉢形土器や墨書土器「寺」などが、廃寺跡の北1.2km離れた将門鹿島台遺跡から墨書土器「福カ寺」が、同じく北東約2.5km離れた尾上藤木遺跡からは墨書土器「佛」が出土する。こうした長熊廃寺跡周辺の仏教関連遺物の出土は9世紀になっても続き、隣接する長勝寺脇館跡から鉄鉢形土器が、北大堀遺跡から墨書土器「寺」「佛坏」が出土し、さらに高崎川の対岸の馬橋鷺尾余遺跡からも鉄鉢形土器が出土する。こうした高崎川周辺地域の仏教関連遺物の出土分布は長熊廃寺跡を中心に捉えることが可能で、周辺地域へ与えたこの寺の影響が推測される。具体的には、尾上藤木遺跡や長勝寺脇館跡、馬橋鷺尾余遺跡など、一般的な集落遺跡の竪穴住居跡からの鉄鉢形土器や墨書土器「佛」などの出土から、僧侶や優婆塞などの集落内での宗教活動の拡がりが見える。また、将門鹿島台遺跡や北大堀遺跡などの墨書土器「福カ寺」「寺」の出土から寺院や仏堂と周辺の集落遺跡との直接的な関わりが生じたことが窺える。また、高岡大山遺跡では、「郡衙の出先機関ないし、郡家の運営に関わる階層の氏族の居住地、あるいは郡家造営からその運営に至るまでに中心的に関わった氏族の本拠地」と捉えられている。建物群のうち、中央に位置する「コ」の字形ないし方形に巡る掘立柱建物跡群周辺から仏教関連遺物が神道関連遺物とともに、やや集中して発見されている点が注目される。この掘立柱建物跡群は3期にわたり建て替えられているが、その官衙的建物配置から、官衙関連施設ないし、在地有力者の居館の中心的施設と捉えられる。こうした施設周辺からの脚付香炉や墨書土器「寺／莫」の出土は、「神屋」とともに施設内ないし周辺の持仏堂の成立を窺わせる。

このような小規模な仏堂や寺院の成立は、複数の遺跡からの墨書土器「福カ寺」「寺」からも窺える。同様に他の初期寺院でも、龍角寺に近接する大畑遺跡の墨書土器「寺」の出土や、木下別所廃寺跡に隣接する天神台遺跡の墨書土器「ササ」の出土からも8世紀後半以降の周辺への仏教信仰の拡がりが見られる。

また、初期寺院が成立した地域以外でも、小規模な寺院や仏堂が成立する。埴生郡では根本名川の支流小橋川周辺地域で山口遺跡と郷部遺跡に寺院が建てられる。周辺には古墳時代後期から続く中台遺跡などが位置し、集落が多く分布する地域である。印幡郡では江川中流域で8世紀第2四半期から9世紀の仏教関連遺物がまとまって発見されている。大袋台畑遺跡から墨書土器「赤寺・崎寺」「赤男（界）寺」が大袋台畑遺跡の南800mの飯仲金堀遺跡から墨書土器「寺」と托が、同じく東1.2kmの飯田町向野遺跡から鉄鉢形土器が、同じく東約500mの大袋山王第2遺跡から鉄鉢形土器が出土した。このように時期と分布にまとまりがあり、この地域に「赤寺・崎寺」「赤男（界）寺」が8世紀第2四半期には成立していた可能性が高い。このほか、新川周辺地域の白幡前遺跡で溝が区画された寺院が、南部川周辺地域の六拾部遺跡でも「白井寺」と呼ばれる仏堂が造られる。白幡前遺跡はこの時期以降、大きな集落に発展し、周辺にも多くの集



第141図 印旛郡・植生郡の寺院跡・仏教関連遺物出土遺跡分布図

落が成立する²²⁾。一方、六拾部遺跡はその上流域に古墳時代後期から歴史時代に続く大規模な墓域があり、六拾部遺跡もこうした墓域を形成した大集落の一画と考えられるが、8世紀後半から9世紀中葉にかけての長い期間仏堂が営まれる。このように8世紀後半には各地で寺院や仏堂の成立が認められる。これらは大規模に展開する集落域付近から発見されている。いずれも近接する複数の遺跡を大規模に発掘調査して明らかとなったものであり、印旛郡や埴生郡の他の地域でもこうした小規模寺院が存在した可能性がある。こうした8世紀後半の各地の小規模寺院の成立については、同時期の初期寺院周辺で確認された僧侶や優婆塞の活発な活動や寺院と周辺集落とのつながりの発生、造寺造堂の高まりの地域的拡大として捉えられよう。

また、その時期は国分寺成立期であり、国分寺との直接的・間接的な関係も想定され、国分寺成立を契機とした地方仏教の整備と拡張がこうした地域的拡大の大きな背景となったことは容易に想像ができればよい。

神崎川支流の戸神川周辺地域と亀成川支流の浦部川周辺地域の間に位置する大塚前遺跡からは、下総国分寺と同範の瓦等が多く出土した。薨棟葺きの三間四面の掘立柱構造の仏堂と方二間の総柱建物跡1棟と竪穴住居跡1棟が発見された。この周辺からは建物跡などは発見されず、周辺遺跡から独立した特異な立地にある。また仏堂などは北側の溝に沿って発見された。この大溝については、遺物出土状況から瓦葺建物跡と同時期に機能した古代の道路跡とみる所説²³⁾が発表されているが、調査所見からは道路跡としての痕跡は全く認められない。ただし、この大溝は少なくとも近世まで遡る木下街道に沿って発見されており、この大溝に平行して古代の道路跡が存在している可能性までも否定することはできない。木下街道の経路は、古代においても、下総国府が位置した旧江戸湾沿いの地域と、木下別所寺院跡が位置する旧香取海沿いの地域をつないだ主要な経路と想定される。7世紀後半以降の東海道の官道は相模の走水から旧江戸湾を横断し、上総を旧江戸湾沿いに北上し、下総に入ると印旛沼東岸を北上し、旧香取海を渡り、常陸に入る経路である。下総国の旧江戸湾沿いの河曲駅—浮島駅—井上駅、そして武蔵国の—豊島駅—乗渚駅—武蔵国府のルートは当初東山・東海の連絡道という性格と規模であったが、神護景雲2年(768)に交通量の増大から本道扱いの馬十疋の常置する記録が残され、さらに宝亀2年(771)には武蔵国が東山道から東海道に所管替えされ、こうした交通情勢に大きな変化が生じる。旧江戸湾横断の交通量が減少し、下総国府から印旛沼東岸地域を通して常陸国に抜ける官道ルートの需要が増大したと想定される。ただし、この経路は距離的に大きく迂回した経路で、新たに手賀沼西岸を通る官道の経路が敷設され、その結果、延暦25年(805)に印旛沼東岸の4駅が廃止となる。このように、8世紀後半に下総国府方面から常陸国に向かう交通量が増大し、迂回路となる印旛沼東岸から手賀沼西岸への官道の付替えが行われた²⁴⁾。大塚前遺跡付近で想定される下総国府と木下別所廃寺跡を結ぶ経路は、こうした交通量の増大を背景とした、迂回解消の主要経路の一つと推測される。また下総国府と旧香取海とを結ぶ最短経路であり、この経路は重要であったと想定される。そして大塚前遺跡からの下総国分寺との同範瓦などの出土は、こうした主要道路に接した寺院跡の成立に下総国分寺が関わっている可能性が高い。また、集落域から離れた手賀沼水系の分水界付近であり、道路の維持管理や交通の安全確保の面で、寺院の存在は一定の役割を果たしたと考えられる。また、主要交通路に接している点から仏教の普及にも一定の役割を果たしたと考えられるが、檀越の本拠地や集落域と近接した寺院跡と比較するならば別の観点から捉える必要がある。比蘇山寺と吉野宮への道や崇福山寺と山中越などこの時期の山寺の多くが峠道など主要街道に接し、交通の要衝に位置している事例が多い²⁵⁾。そして、これらの山寺は道場としての修行の側面が認められる。下総国には地形的に「……山」

と呼ばれるものはないが、大塚前遺跡の周辺遺跡から独立し、交通の要衝に位置したあり方に山寺との類似点が認められる。また、大塚前遺跡は仏堂のほか、総柱建物跡と竪穴住居跡1棟のみから構成され、付属施設が最低限のものであり、法会などを営む上で設備が簡素である。こうした点から道場としての側面を想定することも可能である。房総の古代寺院の中であって、集落域や竪穴住居跡群に接する多くの寺院と対比して、大塚前遺跡の立地と構成は特異である。

このように8世紀後半には、各郡の拠点に立地した初期寺院の周辺では活発な僧侶や優婆塞等の活動や信仰の拡がりが見られる。また、郡内各地の大規模な集落域付近でも小規模な寺院や堂が成立し、周辺への僧侶や優婆塞等の活動や、信仰や寺院とのつながりの拡がりが見られる。このほか、持仏堂的機能を有した仏堂や、分水界に位置する道場としての機能が想定される寺院跡など多様な仏教施設の成立が認められる。こうした小規模寺院や仏堂の成立や寺院周辺への仏教の拡がりの動きは、9世紀以降さらに顕著になる。

5 9世紀における仏教信仰の拡がり

8世紀末から9世紀になると寺院周辺への仏教遺物の拡散と瓦塔などを奉った仏堂の成立が顕著となる。埴生郡では8世紀後半に成立した郷部遺跡と山口遺跡の寺院跡周辺の小橋川周辺地域で、郷部遺跡の東約400mの中台遺跡と、同じく約900m離れた圀護台遺跡から瓦塔が発見されている。郷部遺跡と隣接する郷部、堀尾遺跡から墨書土器「寺」が、郷部遺跡の北約500mの石橋台遺跡から墨書土器「佛」が、山口遺跡の北約1.2kmの外小代遺跡から墨書土器「寺カ」が出土している。こうした僧侶や堂、そして信仰の拡がりや寺院とのつながりはさらに地域の上流域へと拡がる。根本名川の上流域の久能高野遺跡からは墨書土器「桑田寺」が、支流香取川上流の野毛平植出遺跡から墨書土器「手寺」が、取香和田戸遺跡から墨書土器「寺」が出土している。

印旛郡域でも、こうした埴生郡の根本名川周辺地域と同様の状況が窺える。六拾部遺跡の東南約200mの南広遺跡から墨書土器「佛」が、同じく東南約500mの栗野Ⅰ遺跡から鉄鉢形土器が出土している。また、白幡前遺跡からは、寺院跡の北約200mから瓦塔と墨書土器「大寺」などが、白幡前遺跡北約200mの井戸向遺跡から仏像や鉄鉢形土器が、同じく北約800mの北海道遺跡から墨書土器「尼」「勝光寺」が出土している。こうした小規模寺院周辺での僧侶や信仰の拡がりばかりでなく、各小地域の集落域付近から瓦塔などが多く出土している。鹿島川周辺の江原台遺跡からは周溝状遺構に伴って瓦塔が発見され、印旛沼西岸では浅間山遺跡、井戸向遺跡、西方遺跡からそれぞれ瓦塔が単独で発見されている。それぞれ周辺に奈良・平安時代の集落が広がっている。神崎川の支流戸神川周辺の鳴神山遺跡からは瓦塔のほか、墨書土器「波田寺」「播寺」や鉄鉢形土器が出土した。鳴神山遺跡は周辺地域の中で拠点的な集落である。このように印旛郡では各地に瓦塔を奉った仏堂が成立している。この中には仏堂周辺に規則的な配置の建物跡群を伴い、寺院としての機能を備えたものも含む可能性があるが、一方で江原台遺跡や村上込ノ内遺跡のように瓦塔や瓦塔を奉った施設が単独で機能したものが多いと考えられる。なお、こうした寺院や仏堂が現在確認できない地域でも仏教関連遺物の出土が認められ、寺院や仏堂が今後さらに各地で発見される可能性が高い。さらにこの時期、各地の上流域や集落遺跡の分布が希薄な地域でも仏教関連遺物の出土が認められる。江川上流域の七栄から墨書土器「寺」が、高崎川上流の一之綱Ⅲ遺跡から墨書土器「寺・佛」が出土してい

る。印旛沼西岸周辺地域と亀成川中・上流周辺地域神崎川と支流戸神川周辺地域の三地域にはさまれ、密集する集落域から離れた角田台遺跡の388号竪穴住居跡から「千仏」「鉢」と墨書された鉄鉢形土器2点がまとまって出土した。角田台遺跡は小さな舌状台地ごとに少数の竪穴住居跡群が発見され、そのうちの一つの竪穴住居跡からまとまって仏具が発見された。なお、近接して香炉形土器や墨書土器「寺」も発見されている。印旛沼の南沼に注ぐ師戸川の谷津と旧香取海に面した印旛沼の北沼に注ぐ谷津との分水界に位置し、自然発生的な交通の要衝の地である。こうした集落域から離れた奥まった場が、修行の場として適していたと考えられる。このように8世紀末から9世紀になると、寺院・仏堂や僧侶・優婆塞等や信仰の拡がり、寺院とのつながりがより密に、より広い地域に認められ、集落域やさらに奥まった場所で、多様な仏教信仰者のあり方が窺える。

以上、印旛郡と埴生郡の地域でこれまで発見された寺院や仏堂、仏教関連遺物が出土した遺跡について、郡内や小地域内の分布の拡がり注目して、その変遷を追ってみた。その結果、寺院や仏堂の成立を契機として、周辺遺跡から多くの仏教関連遺物が出土する傾向や、上流域へと仏教関連遺物が出土する遺跡が拡がる傾向が認められた。また、初期寺院の成立や整備、小規模な寺院や仏堂の成立についても画期や段階的な変遷といった地方への仏教浸透の大きな流れの存在が窺われた。

註

- 1) (財)千葉県史料研究財団 1996 『千葉県の歴史 資料編古代』 千葉県
- 2) 武田宗久 1986 「第二章 第二節 鎌倉前期の成田市周辺」『成田市史 中世・近世編』 成田市史編さん委員会
- 3) 千葉県郷土資料刊行会 1972 『千葉県地名変遷総覧』
- 4) 木村 修 1986 「第二章 第四節 鎌倉中期以後の庄園の動き」『成田市史 中世・近世編』 成田市史編さん委員会
- 5) 石戸啓夫・小牧美知子 1997 『千葉県印旛郡栄町 龍角寺五斗葺瓦窯跡』 (財)印旛郡市文化財センター
- 6) 石田広美他 1985 『主要地方成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 7) 5と同じ
- 8) 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1994 「山田寺跡出土瓦の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1994』 奈良国立文化財研究所
佐川正敏 1997 「山田寺跡の発掘調査」『仏教芸術』235号
- 9) 菱田哲郎 1986 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』67-3
- 10) 奈良国立文化財研究所 1992 「坂田寺 第7次調査」『飛鳥藤原宮発掘調査概報』16
- 11) 竹田政敬 1995 「平松廃寺 -前身寺院は飛鳥に-」『シンポジウム 古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所
- 12) 京都国立博物館 1974 『京都国立博物館蔵 瓦と埴図録』
- 13) 大橋 章 1979 「山田寺造営考」『美術史研究』16

- 14) 小澤 毅・佐川正敏 1997 「吉備池廃寺の調査―第81-14・16次」『奈良国立文化財研究所年報 1997-II』奈良国立文化財研究所
- 15) 安藤鴻基他 1978 『木下別所廃寺跡 第1次発掘調査概報』木下別所廃寺跡調査会
- 16) 岡本東三 1993 「下総龍角寺の山田寺式軒瓦について」『千葉史学』22
- 17) 阿部寿彦他 1994 『高叢遺跡群』Ⅳ (財)印旛都市文化財センター
- 18) 16と同じ
- 19) 近江俊秀 1996 「岡寺式軒瓦出土寺院をめぐる二、三の問題」『考古学雑誌』81-3
播摩尚子 1996 「下野薬師寺跡出土の葡萄唐草文字瓦」『史館』28
- 20) 今泉 潔 1995 「瓦と建物、そのイメージと原風景に関する覚書」『千葉県史研究』3
- 21) 17と同じ
- 22) 藤岡孝司 1996 「古代東国村落の構造」『古代』101
- 23) 今泉 潔 1990 「「瓦と建物の相剋」試論―大塚前遺跡出土瓦の分析」『千葉県文化財センター研究紀要』12
糸原 清 1997 「房総の古代寺院と交通路」『人間・遺跡・遺物』3
- 24) 今泉 潔 1997 『平成9年度企画展 古代の道と旅』千葉県立房総風土記の丘
- 25) 松浦俊和 1979 「古道と遺跡」『史想』18
近江俊秀 1996 「岡寺式軒瓦出土寺院をめぐる二、三の問題」『考古学雑誌』81-3

V ま と め

今回集成できた仏教関連遺跡（古代寺院跡と仏教関連遺物を出土した遺跡）は199か所になる。それに線刻画古墳2か所、小金銅仏出土地（単独）6か所、生産遺跡（寺院へ供給する瓦窯跡と仏器を生産している須恵器窯跡）22か所を加え、房総における仏教関係遺跡は229か所になることが明らかになった。また、仏教と対比する意味で神道関係遺跡19か所（単独）、今後の寺院跡と瓦窯跡の新発見にそなえて他の瓦出土地（単独）90か所も併せて集成した。当初の見込みを大幅に上回る遺跡数になった。この仏教関係遺跡の多さは関東地方のみならず全国的にも特異な存在であることが明らかになったが、この数字が奈良平安時代の実体を示すものか、単に調査数に比例するものかは即断できないが、墨書土器の多量さを考慮してみると房総の特異性を示すものとしてよさそうである。

今回の集成作業の成果は一覧表と分布地図に示されている。そして、主要な遺跡についてはその概要を記し、さらに、遺構については新しい視点で分類し、その性格を明確にし、仏教受容の過程を後付けた。ここで付属施設を備えた伽藍寺院（特に初期寺院・国分寺）、単独の仏堂で主に構成された仏教施設、竪穴住居跡等から仏教関連遺物を出土する一般的な集落遺跡という3類型に分類した。この重層性の存在こそが最大の問題点になる。仏教関連遺物については公表されているものについてはすべて図示し、その概要を記した。また、問題点についても若干の考察を加えた。最後に試論として1地方の仏教受容の展開を素描した。本来なら房総全域にわたって行わなくてはならないが時間的問題と筆者たちの力量に限界があり、印旛郡・埴生郡にのみとどまってしまった。ただ今後の方向性を示し得たと思われる。

本巻の構成は要約すると以上のようなものになる。そこで最後に今回の研究により到達し得た点と今後の方向性について簡単に概略を記し、まとめとしたい。

1 瓦と柱穴だけから 一判ったこと一

歴史考古学において古代寺院を考える手段としてはまず出土した古瓦を中心に考えるのが伝統的な手法である。対象が明確であるためこの研究法は精緻なものとして完成されている。瓦当面の精密な分類に始まり、技法を通じて工人集団の特定、供給関係のあり方までを解明している。それにより各寺院の関係までを究明することが可能になっている。これらは畿内の文献に残っている大寺院を中心に行われた研究であるが、地方においてもその有効性は糸口を見つければ全く同じに操作できるものであることがようやく確立されてきた。房総においては龍角寺式の三重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と山田寺式の三重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦の関係を考察することにより同時代性を明確にすることが可能になり、龍角寺式の三重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦の型式変化も房総地域においてほぼ確立された。同様な例は上総国分寺の重圈文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦、下総国分寺の宝相華文軒丸瓦においても確認されている。

遺構については上総・下総国分寺以外の初期寺院では、旧下総の結城市結城廃寺しか全体が判明している遺跡はない。地方の初期寺院を考える上で極めて重要な遺跡である。多量な軀仏と塑像の出土は今後の初期寺院を考える上で参考にするべきものである。

ここでは基壇と瓦をもつ本格的な寺院構成を有していると思われるもので、かつ各地域での拠点寺院として機能したものを初期寺院として考え、これらの成立時期について判明したことを列挙する。

- 1) 初期寺院は7世紀第3四半紀に出現。
上総大寺廃寺跡、下総龍角寺
- 2) 初期寺院は7世紀第4四半紀に地域的に偏在傾向を有して増加。
上総 光善寺廃寺跡、武士廃寺跡、二日市場廃寺跡、今富廃寺跡、九十九坊廃寺跡、真行寺廃寺跡
下総 木下別所廃寺跡、八日市場大寺廃寺跡、龍正院
- 3) 初期寺院は8世紀前半（国分寺造営以前）から伽藍整備の時期を迎える。そして各地域に拡散。
上総 菊間廃寺跡、法興寺跡
下総 長熊廃寺跡、手賀廃寺跡、結城廃寺跡、木内廃寺跡、名木廃寺跡、千葉寺
- 4) 国分寺の成立。
初期寺院と周辺地域に仏教が浸透する。
- 5) 国分寺成立期ないし直後に整備される初期寺院
上総 真行寺廃寺跡（北基壇の瓦積み化粧は上総国分尼寺の影響と思われる）

2 墨書土器と仏教関連遺物から 一判ったこと2一

仏教関連遺物としては仏教関係が記載された墨書土器、浄瓶・水瓶、香炉、鉄鉢形土器、瓦塔、小金銅仏等を今回取り上げた。そして集成し、各々の変遷を明らかにし、分布論から仏教受容の側面を補強することにした。

仏教関連の墨書土器（ヘラ書、刻書を含む）を出土した遺跡数は102遺跡である。「寺」と書かれたものが最も多く83遺跡を数える。この中には寺名が判明したものが39遺跡を数える。寺名には郡名を表した上総真行寺廃寺跡の「武射寺」があり、郡名寺院の代表例である。地名を表したものとしては六拾部遺跡の「白井寺」、長熊廃寺跡の「高置寺」、久野高野遺跡の「桑田寺」、広遺跡の「坂津寺?」、一夜山遺跡の「赤穂寺」「阿光寺」、山田・宝馬古墳群の「小金山寺」「小金寺」、文六第6遺跡の「砂田東寺」、滝台東遺跡の「三井寺」等がある。ほかに吉祥句、仏・菩薩の名称や経典由来例、造営に関する例、方位、大小に関する例、僧侶の職名の例、その他がある。また、上総国分寺では寺名「金寺」「光寺」「金明光寺料」、付属諸院名「講院」「東院」「油菜所」「厨」等が出土しており、国分寺の全体を復元するのに欠かせない資料となっている。寺名墨書の初現は大袋台畑遺跡の「赤男（界）寺」「赤寺」、草刈遺跡の「草刈於寺坏」で8世紀第2四半世紀のものである。ただこの2遺跡にはほかに仏教関係を示すものがない。他の仏教関連墨書土器も本格的に増えるのは8世紀第3四半世紀からであり、9世紀前半にピークを迎える。

浄瓶・水瓶は27遺跡から30個体出土している。浄瓶は灰釉陶器が大部分を占め、東海地方の搬入品と考えられる。水瓶は須恵器が多く、永田・不入窯跡群、南河原坂窯跡群でも焼成されている。浄瓶は9世紀中葉には出現する。水瓶は8世紀第3四半紀に出現し、9世紀代に増加する。

香炉は20遺跡から39個体出土している。蓋の紐は塔を模したものが多く、身の部分は脚付きが多い。大部分は土師器であるが、安房国分寺では奈良三彩、東野遺跡では二彩が出土している。土師器の香炉は9

世紀初頭に出現する。

鉄鉢形土器は53遺跡から68個体出土している。内訳は須恵器15個体、土師器51個体、不明が2個体である。また、鉄鉢とセットとなるべき托は大綱山田台NO3遺跡の銅製托と3遺跡から出土した奈良三彩の托があるのみである。8世紀第3四半期に出現し、9世紀代に隆盛を見る。墨書土器と並んで集落における仏教受容の過程を最も反映しているものである。

瓦塔は37遺跡で出土している。破片のみの出土が多く、谷津遺跡、白幡前遺跡出土品は半完形品の少ない例である。白幡前遺跡出土品は赤色の彩色を施している。孟地遺跡、谷津遺跡では瓦金堂も一緒に出土している。鉄鉢形土器の出現時期は8世紀後半代であり、9世紀代に最盛期を迎える。

仏像は龍角寺の薬師如来座像が唯一の白鳳仏として現存している。ほかに成東町出土の観音菩薩立像が白鳳仏の可能性があるだけである。関峯崎横穴群の3号横穴棺床出土の押出仏は7世紀後半と考えられている。また、駄ノ塚西古墳石室西壁の線刻の如来座像も7世紀後半ごろのものと思われる。奈良時代になると結城廃寺跡の軀仏と塑像、大栄町稲荷山出土の十一面観音菩薩立像2体がある。小金銅仏は平安時代のもので11か所から出土している。ほかに螺髪が2か所から単独で出土している。

ほかに仏教関連遺物として温石と考えられるものが白幡前遺跡、永吉台遺跡群西寺原地区、北アラク遺跡から出土している。いずれも蛇紋岩製である。また、萩ノ原廃寺跡からは鉄製の風鐸が出土している。

以上の仏教関連遺物の分布状況を見ると初期寺院、国分寺周辺と全く関係ない地域に8世紀第3四半期から増大することが明らかになった。この傾向は9世紀の中葉を最盛期として9世紀末まで継続する。

3 「村落内寺院」は存在しない 一判ったこと3ー

最初に寺院が建立される。初期寺院は当然としても所謂「村落内寺院」においてもこれはあてはまる。従来「村落内寺院」と言われてきたものには一般の村落ではなく、寺院を支える機能を有する「村落」も含まれている。言い換えれば寺院の付属施設である。初期寺院、国分寺と違い明確な伽藍区画をもたないために、また近接して竪穴住居、掘立柱建物が営まれたための誤解なのである。萩ノ原遺跡(「寺」「寺塔」)、東郷台遺跡(「寺」)、永吉台遺跡群遠寺原地区(「土寺」「山寺」)、山田台廃寺跡、白幡前遺跡(「大寺」)、郷部・加良部遺跡(「忍保寺」「大寺」「新寺」)、山口遺跡(「忠寺」)などは独立した寺院として存在していたのである。ただし、須田勉が提唱した「村落内寺院」は以上のような遺跡ではなく一般村落において堂のみが存在する「寺院」や仏教関連遺物を出土する村落において使用できる用語ではある。しかしながらその定義付けは根本的な変更が必要になる。

上記の遺跡以外に瓦をもつ一堂の寺院としての小食土廃寺跡、薨棟の仏堂をもつ大塚前遺跡、基壇に小型瓦を使用した建物をもつ小谷遺跡、瓦をもたない双堂の内野台遺跡(「祥寺」)、仏堂をもつ多田日向遺跡(「観音寺」「三綱寺」「多里草寺」)等も同様な寺院である。これらは8世紀第3四半期以降に成立し、10世紀前半までは機能している。また、六拾部遺跡(「白井寺」)、久野高野遺跡(「桑田寺」)、広遺跡(「坂津寺?」)、北海道遺跡(「勝光寺?」)、一夜山遺跡(「赤穂寺」「阿光寺」)、山田・宝馬古墳群(「小金山寺」「小金寺」)、文六第6遺跡(「砂田東寺」)、滝台東遺跡(「三井寺」)等の施設を持たない寺の存在も無視することのできないものである。これらの墨書土器の年代は8世紀第3四半期から9世紀代にかけてのものである。

初期寺院以外のこれらの仏教施設は8世紀第3四半期から成立し、9世紀代にわたって存続している。中には10世紀代まで存続する遺跡もある。これは仏教関連遺物と全く同じ傾向を示す。

4 古代寺院研究から仏教関連遺跡研究へ ―今後の課題―

古代寺院研究の難しさはその総合性にある。古代仏教の難解性はその具現体である荘厳な建築、仏像、仏画等の仏教美術、文献史料等を総合して初めて理解されるものである。ただし、房総地域においては古代寺院の雰囲気をとどめるものは龍角寺の白鳳仏しか残されていない。あとは出土する瓦と遺構のみになる。結城廃寺跡の甃仏と塑像群は、古代寺院の思想と空間を考察するのに大きな手がかりになるものである。畿内に遺存する古代寺院の比較検討は当然であるが、瓦だけに頼るのはもはや限界である。むしろ建物の本格的な比較検討に入る時期に来ている。

瓦は使用目的がはっきりしている建築部材であるため土器の編年観とは違う「所用」という概念が先行するため、どうしても在地の土器編年との摺合せの厳密さに欠けているきらいがあり、古代寺院の年代観にも齟齬をきたしている部分がみられる。幸いなことに国分寺造営の詔という全国的に通用する文献史料が存在し、また国分寺の調査は全国的に実施され、国分寺造営過程が明らかになりつつあるこの時期に取り組むべき大きな問題である。考古学上全国的に同時代の認定をできる事象はほかには存在しないのであるから。房総においても国分寺の造営過程を土器編年に当てはめることが容易になれば、一般村落における仏教関連遺物の時期決定に大きな意義をもつようになってくる。

今回の一番の大きな成果は仏教の影響と思われるものをとにかく集成したことである。その結果は想像を越える遺跡、遺物の多さであった。そして、従来古代寺院研究は古瓦出土地を中心に考えていたが、それでは全体像を明らかにすることが困難になっている状況であることがはっきりした。瓦をもつ寺院、瓦をもつ一堂の寺院、瓦をもたない寺院、一堂の村落内の仏教施設、仏教関連遺物だけが出土する竪穴住居等の差異は時間的、空間的に重層的に存在している。この意義を最終的に解明しなければ古代社会の民衆の実像に迫れない。今後はこの集成作業の成果を生かして仏教関連遺跡研究を進めたい。

なお、ここで瓦について敢えて触れなかったのは以上のような主旨であったことによる。今後も並行して進めなければならない道である。

遺 跡 一 覧 表

凡 例

- 1 仏教関係遺構・遺物の出土した遺跡は『仏教関係遺跡』に掲載し、須恵器・瓦窯跡、製鉄遺跡から仏教関係遺物が検出された遺跡については『生産遺跡』の中で、仏教関係の線刻が見られる古墳については『線刻画古墳』、小金銅仏は『小金銅仏出土遺跡』の中で取り扱った。

瓦のみが検出された遺跡は、瓦については仏教関係遺跡以外からも出土することから、混乱を避けるために『瓦出土地』として一括して取り扱った。また、神道関係の遺物が出土した遺跡についても、仏教関連との比較という観点から『神道関係遺跡』としてまとめた。ただし、仏教関連の遺物・遺構が検出された遺跡から複合的に神道関係の遺物が出土した場合は、仏教関係遺跡の中の特殊遺物の項目で触れ、神道関係遺物の集成表からは除いている。

- 2 表の各項目については以下のとおりである。

- (1) Naについては、各表の種別ごとの番号を記した。
- (2) 地図については、国土地理院発行25,000分の1の地図名を表している。
- (3) 国郡の記載・所在については、千葉県立中央図書館が1970年に刊行した『千葉県地名変遷総覧』に主に依拠している。
- (4) 時期については、遺跡内の古墳時代から平安時代までの存在する遺構・遺物の時期を表している。
- (5) 当該時期については、仏教関係遺構・遺物等の存続時期を表している。
- (6) 竪穴については、主に奈良・平安時代の竪穴住居跡の軒数を表している。
- (7) 掘立については、掘立柱建物跡の棟数を表している。
- (8) 遺構1・遺構2については、竪穴住居跡・掘立柱建物跡以外の遺構を表している。
- (9) 仏教遺物については、墨書・線刻を含めた仏教関係遺物について表している。
- (10) 墨書土器については、遺跡内から出土した墨書・線刻の判読可能なものを示したが、「寺」・「仏」等仏教関係の遺物は仏教遺物の中で扱っているので、除外した。
- (11) 特殊遺物については、灯明皿、奈良三彩等の特殊な遺物について記載した。
- (12) 概要欄の数字は文献目録の番号と一致する。

仏教関係遺跡

No	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
1	姉崎	上総国市原郡	上総国分僧寺	市原市惣社字太子堂 812他	台地上	25	養老川	8世紀中葉～	8世紀中葉～			基壇建物跡 (金堂・塔・中門・回廊・講堂・南大門・西門)		井戸	
2	姉崎	上総国市原郡	上総国分尼寺跡	市原市根田字祇園原	台地上	25	養老川	8世紀中葉～不明	8世紀中葉～不明			基壇建物跡 (金堂・中門・回廊・講堂・経楼・鐘楼・東門)		銅遺構	
3	蘇我	上総国市原郡	光善寺廃寺跡	市原市市原	台地上	23		7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明						
4	鶴舞	上総国市原郡	奉免上原台遺跡	市原市奉免字上原台	台地上	80	養老川	8世紀第1四半期・9世紀中葉	8世紀第1四半期	4	1	方形墳墓	55	火葬墓	10
5	蘇我	上総国市原郡	菊間廃寺跡	市原市菊間	台地上	20	村田川	8世紀前半～不明	8世紀前半～不明						
6	海土有木	上総国市原郡	武士廃寺跡	市原市福増字大明神	台地上	75	養老川	7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明						
7	海土有木	上総国市原郡	武士遺跡	市原市福増字向田・勝間字土器石	台地上	75	村田川	7世紀後半～9世紀前半	8世紀後半	1		方形墳墓	37		
8	蘇我	上総国市原郡	千草山遺跡	市原市能満字西千草山 1450他	台地上	30		7世紀～10世紀	8世紀後半～10世紀前半	72	9	基壇建物跡	1	鍛冶遺構	
9	蘇我	上総国市原郡	南大広遺跡	市原市能満字東四辻 1871-6他	台地上	40		8世紀後半～9世紀	8世紀後半～9世紀	5	2	基壇建物跡	1	鍛冶遺構	1
10	海土有木	上総国市原郡	孟地遺跡	市原市山倉字孟地	台地斜面	44		8世紀第3四半期	8世紀第3四半期						
11	鶴舞	上総国市原郡	沢遺跡	市原市奉免字沢165他	河岸段丘上	27	養老川	古墳時代後期～平安時代		2	4	工房跡	1		

出 土 瓦	仏 教 遺 物	墨 書 土 器	特 殊 遺 物	概 要
二十四葉蓮華文・有心二重 圈文・有心三重圈文軒丸瓦 均整唐草文・重郭文・素 文・連珠文軒平瓦 丸瓦(無 段・有段) 平瓦(縄叩き・ 格子叩き)	墨書土器「金寺」「講院」 「光寺」「法花寺」「金 明光寺料」 如来立像 銅製風鐸	「講院」「東院」「油菜所」 「厨」「充 広椅備所坏」 「器」「末」「畔」「安カ蒜」 「長カ柄刑田」「新田」「罌 山」「荅 蘆道」「金安」 「金明光寺料」「法花寺」 「金寺」「光寺」	銅鏡 帶金具 和同開 珎2	大官大寺式の伽藍地と、南 北約490m、東西325mの寺 域が明らかになっている。 2・3・6・8・9・10・14・15・ 16・39・52・67・88・109・ 113・118・127・133・135・ 142・195・273・412・423・ 468・469・471・472・473・ 525
二十四葉蓮華文・有心三重 圈文軒丸瓦 均整唐草文・ 重郭文軒平瓦 丸瓦(無 段・有段) 平瓦(縄叩き・ 格子叩き)	墨書土器「法花寺」 花瓶 螺髪	「盛」「大屋」「甘木」「法 証」「佛勝」「川成」へ ラ書き瓦「人 倉椅郷長 谷部稲□」	埴塼 帶金具(鉸具・ 巡方) 仏像鋳型	南北371m、東西285～350m に及ぶ寺域が明らかになっ ている。53・57・116・142・ 166・229・408・412・465・ 466・467・482
単弁四葉蓮華文・鋸齒文縁 複弁八葉蓮華文・素文縁複 弁八葉蓮華文・複々弁四葉 蓮華文・単弁二十四葉蓮華 文・重圈文軒丸瓦 三重弧 文・均整唐草文・重郭文軒 平瓦 丸瓦(無段・有段) 平瓦(格子叩き・縄叩き・ 凸面布目) 甗				遺構については未確認であ るが、多種多量の瓦と甗が 出土している。 78・479
三重圈文縁単弁四葉蓮華文 軒丸瓦 三重弧文軒平瓦 丸瓦(無段・有段) 平瓦 (格子叩き・凸面布目)				8世紀第1四半期の遺構群 周辺から、まとまった瓦が 出土している。 362
細弁蓮華文軒丸瓦 均整唐 草文軒平瓦 丸瓦 平瓦 (格子叩き・縄叩き)				瓦は表面採集資料。以前は 土壇状の高まりがあったと されるが、現在は確認でき ない。71
鋸齒文縁複弁八葉蓮華文・ 鋸齒文縁複々弁四葉蓮華 文・重圈文軒丸瓦 三重弧 文・重郭文軒平瓦 丸瓦(無 段) 平瓦(縄叩き)				複数の瓦散布地が知られ、 道路工事に伴い一部発掘調 査されているが、詳細不明 である。瓦窯跡の可能性も 指摘されている。 47・481
三重圈文縁単弁八葉蓮華 文・有心三重圈文軒平瓦 唐草文・重郭文軒平瓦 丸 瓦(無段) 平瓦(格子叩き・ 縄叩き)			帶金具(丸柄)	遺構は確認されなかったが、 瓦葺建物跡が存在した可能 性が高い。 431
単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦 均整唐草文軒平瓦 丸瓦 平瓦(縄叩き・格子叩き)	墨書土器「寺」	線刻「得方」	神功開寶 飾金具	昭和38年調査で礎石を伴う 基壇が確認され、大量の瓦 が出土した。93・208・294・ 317・422
丸瓦(無段) 平瓦(格子 叩き)	墨書土器「寺」		蔵手刀 鉄滓	104・354
	瓦塔 瓦堂		灯明皿	瓦塔・瓦堂は多くの灯明皿 を含む一括表面採集資料で ある。374
	土師器鉄鉢形土器			300

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
12	姉崎	上総国 市原郡	あふく いせき 荒久遺跡	市原市惣社 字荒久1006 他	台地上		養老川	8世紀 後半～ 12・13 世紀	8世紀 後半～ 12・13 世紀	280	4				
13	姉崎	上総国 市原郡	ぼうきく いせき 坊作遺跡	市原市根田 540他	台地上			8世紀 中葉～ 10世紀 初頭		114	21				
14	蘇我	上総国 市原郡	いち はら じょうり せい い 市原条里制遺 跡	市原市市原 ・八幡・菊 間・藤井・ 郡本	低地	5		奈良・ 平安時 代							
15	蘇我	上総国 市原郡	くさかり いせき 草刈遺跡	市原市草刈 字下切付他	台地上	30	村田 川	8世紀 前半～ 9世紀	8世紀 前半						
16	蘇我	上総国 市原郡	おしぬま だい い いせき 押沼第1遺跡	市原市押沼 字金糞896 他	台地 斜面	45～ 51	村田 川	8世紀 第3四 半期	8世紀 第3四 半期			製練炉	7	作業場	8
17	姉崎	上総国 海上郡	ふつ か いち ば い じ あと 二日市場廃寺跡	市原市二日 市場機織面 572-1他	河岸 段丘上	15	養老 川	7世紀 第4四 半期～ 10世紀 後半…	7世紀 第4四 半期～ 不明		3	溝	9	土坑	
18	姉崎	上総国 海上郡	いまと みはい じ あと 今富廃寺跡	市原市今富 字坊ヶ谷	河岸 段丘上	7	養老 川	7世紀 第4四 半期～ 不明	7世紀 第4四 半期～ 不明						
19	姉崎	上総国 海上郡	かまがみ いせき 釜神遺跡	市原市浅井 小向499-1 他	台地上	33	養老 川	古墳時 代後期 ～11世 紀		234	5	古墳	9		
20	姉崎	上総国 畦蒜郡	はぎ の ほら いせき 萩ノ原遺跡	市原市上高 根字萩の原	台地上	86	小櫃 川	8世紀 後半～ 10世紀	8世紀 後半～ 10世紀	22	4	基壇建物 跡	2	鍛冶遺構	5
21	上総横 田	上総国 畦蒜郡	ま り やつはい じ あと 真里谷廃寺跡	木更津市真 里谷字横峯	台地上	55	小櫃 川	8世紀 後半～ 不明	8世紀 後半～ 不明						
22	姉崎	上総国 畦蒜郡	とうごう だい いせき 東郷台遺跡 (川原井廃寺跡)	袖ヶ浦市川 原井字東郷 台1403-16 他	台地上	84	小櫃 川	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 後半	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 後半	8	6	溝	7	土坑	16
23	久留里	上総国 畦蒜郡	あたご まえ いせき 愛宕前遺跡	君津市向郷 字愛宕前 1540-1他	台地上	78	小櫃 川	8世紀 末～9 世紀	8世紀 末			土坑	1	石組カマ ド	1

出 土 瓦	仏 教 遺 物	墨 書 土 器	特 殊 遺 物	概 要
軒丸瓦 均整唐草文軒平瓦 丸瓦	浄瓶 水瓶 三彩鉄鉢 形土器 三彩鉄鉢形土 器 墨書土器「講院」 「金光」「□院」「畦□ 院」「四院」「巳」	「南」「盈」「蘭」「益」「信」 「財」「莊」「吉祥」「大井」 「厨」「田主」「東」「司」 「吉」「和世」「小川」「正」 「上」「望負」「湿津寺カ 田」「□長カ谷部郷西里」	飾金具	上総国分僧寺の東に隣接す る。国分僧寺の機構を示し た墨書土器が多数出土し た。国分寺の機能を支える 上で重要な役割を果たした 遺跡である。166
丸瓦（無段） 平瓦（縄叩 き）	墨書土器「法花寺」「法 花」「佛騰」「造寺」	「佛騰」「勝」「最」「興」 「海上厨」「市原□」		上総国分尼寺跡の北側に接 する。国分尼寺と関連する 墨書土器等が多く出土し ており、国分尼寺と深く関わ った遺跡である。166
単弁四葉蓮華文・単弁二十 四葉蓮華文・重圈文・複弁 八葉蓮華文・複々弁四葉蓮 華文軒丸瓦 三重弧文・均 整唐草文軒平瓦 丸瓦（無 段・有段） 平瓦（格子叩 き・平行叩き・縄叩き・凸 面布目） 甃	浄瓶			上総国分寺、光善寺廃寺跡、 菊間廃寺跡が立地する台地 の下に拡がる条里制遺跡。 343・400・415・443
	墨書土器「草苺於寺坏」 浄瓶	「草苺於寺坏」「西万」	青銅製箸 帯金具（丸 納・鉈尾）	401
	須恵器鉄鉢形土器			製鉄遺跡のK地点から鉄鉢 が出土した。斜面上方の台 地上で発見された方形周溝 状遺構等と関連する可能性 がある。373
雷文縁複弁八葉蓮華文・三 重圈文縁単弁八葉蓮華文・ 素文縁単弁十二葉蓮華文軒 丸瓦 二重弧文・三重弧 文・唐草文軒平瓦 丸瓦（無 段・有段） 平瓦（格子叩 き・縄叩き・凸面布目）	香炉蓋		小鍛冶遺物	仏堂の存在は未確認である が、東西約150mの瓦散布範 囲の両端付近から南北方向 の溝が発見されている。多 種多量の瓦が発見されてい る。 249・485・487
三重圈文縁単弁八葉蓮華文 軒丸瓦 二重圈文縁単弁八 葉蓮華文軒丸瓦 重圈文軒 丸瓦 均整唐草文軒平瓦 丸瓦（無段・有段） 平瓦 （格子叩き・平行叩き・縄 叩き）				遺構は未確認であるが、瓦 と「坊ヶ谷」「唐（塔）ヶ崎」 等の地名と、塔跡などの伝 承が残されている。 233・488
	墨書土器「□寺」			田所真氏より墨書土器「□ 寺」の出土をご教示いただ いた。 432・451
平瓦（格子叩き・縄叩き）、 丸瓦（無段）	墨書土器「寺」「寺塔」 「塔寺」「佛」 鉄製風 鐸 太刀 浄瓶 水瓶 青銅製匙 瓦塔 土 師器香炉蓋	「大」「合」「入」「方」「法 カ」「原」「寺」及不寺」 「□□寺」「士カ」	手捏ね 帯金具（巡方） 土器	基壇建物跡と大型の掘立柱 建物跡を中心とした寺院跡。 189
有心二重圈文・有心三重圈 文軒丸瓦 唐草文軒平瓦 平瓦（縄叩き・格子叩き） 甃				瓦は表面採集資料。明治初 期に廃寺となった西光寺が 位置していたと伝えられて いる。33
唐草文軒平瓦 平瓦（格子 叩き・ヘラケズリ・縄叩き） 丸瓦（無段・有段） 甃 斗瓦	瓦塔 水瓶 墨書土器 「四佛」「寺」「□寺」		鉄滓 羽口 灯明皿	掘立柱建物跡から礎石建物 跡へ建替えられた仏堂を中 心とした寺院跡。212・274
	線刻杯「寺」 ロクロ 土師器鉄鉢形土器	線刻「東」	転用硯 灯明皿	仏教遺物と灯明皿等が石組 カマド周辺からまとまって 出土した。279

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
24	木更津	上総国 望陀郡	上総大寺廃寺跡 かみまおほてらはいしやあと	木更津市大 寺字本郷	河岸 段丘 上	8	小櫃 川	7世紀 第3四 半期～ 不明	7世紀 第3四 半期～ 不明						
25	木更津	上総国 望陀郡	小谷遺跡 こやひのせき	木更津市請 西1951-1他	台地 上	65	矢那 川	8世紀 後半～ 9世紀 初頭	8世紀 後半			基壇建物 跡	1	方形墳墓	2
26	上総横 田	上総国 望陀郡	久野遺跡 くのいせき	木更津市下 郡錯綜地字 西久野ヶ原 2502他	丘陵 上	98～ 105	矢那 川	8世紀 第3四 半期～ 10世紀	8世紀 第3四 半期～ 10世紀	33	2	基壇建物 跡	6	鍛冶遺構	6
27	上総横 田	上総国 望陀郡	永吉台遺跡群遠 寺原地区 ながよしだい いせきぐん とう てらはらちく	袖ヶ浦市永 吉字西寺原 ノ武169他	台地 上	63～ 75	小櫃 川	8世紀 後半～ 10世紀	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 前半	51	17	土坑	10		
28	姉ヶ崎	上総国 望陀郡	上大城遺跡 かみおしろいせき	袖ヶ浦市代 宿字上大城	台地 上	45	浜宿 川	8世紀 後半～ 10世紀 前半	8世紀 末～9 世紀中 葉	14	6	土坑	2	方形墳墓	1
29	上総横 田	上総国 望陀郡	永吉台遺跡群西 寺原地区 ながよしだい いせきぐんにし てらはらちく	袖ヶ浦市永 吉字西寺原 ノ武169他	台地 上	63～ 75	小櫃 川	9世紀 第1四 半期～ 10世紀	9世紀 第1四 半期～ 中葉	133	8	火葬墓	1	土器焼成 遺構	60
30	姉崎	上総国 望陀郡	神田遺跡 かんだいせき	袖ヶ浦市蔵 波字西久保 上616他	台地 上	35～ 37	蔵波 川	8世紀 後半～ 9世紀	8世紀 後半～ 9世紀	7	1				
31	上総横 田	上総国 望陀郡	文脇遺跡 ふみわきいせき	袖ヶ浦市野 里字西十二 天1589他	台地 上	38～ 40	小櫃 川	9世紀 ～10世 紀		50					
32	木更津	上総国 望陀郡	上ノ山A遺跡 うまのやま A いせき	木更津市矢 那字上ノ山 1962-1他	丘陵 上	83	矢那 川	8世紀 後半～ 10世紀 前半	8世紀 後半		2		4	鍛冶遺構	
33	鹿野山	上総国 周准郡	九十九坊廃寺跡 くじゅうくぼうはいしやあと	君津市内箕 輪字九十九 坊台他	台地 上	27	小糸 川	7世紀 第4四 半期～ 不明	7世紀 第4四 半期～ 不明			基壇建物 跡(塔・ 講堂)	2	掘立柱	
34	鹿野山	上総国 周准郡	郡遺跡 こおりいせき	君津市郡字 下赤磯・小 山野字福造	河岸 段丘 上	13～ 23	小糸 川	9世紀	9世紀		14	土器焼成 土坑	1	鍛冶遺構	3
35	鹿野山	上総国 周准郡	南子安金井崎 遺跡 みなみこ やすかな い ぎき いせき	君津市南子 安	台地 上	27	小糸 川	8世紀 後半～ 10世紀 前半	8世紀 後半～ 10世紀 前半	23	40	鍛冶工房 跡	1	溝	1
36	富津	上総国 周准郡	川島遺跡 かわしまいせき	富津市大和 田847他	河岸 段丘 上	8～ 10	岩瀬 川	奈良・ 平安時 代		12	1	井戸	2		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
面違鋸歯文縁複弁ハ葉蓮華文・重圈文縁単弁四葉蓮華文・重圈文軒丸瓦 三重弧文・四重弧文・重郭文・均整唐草文軒平瓦 丸瓦 平瓦（格子叩き・縄叩き）	石製露盤			未発掘であるが、多くの瓦と共に、凝灰質砂岩の石製露盤が字「とうのこし」から発見されている。 106・508・509
単弁4弁軒丸瓦 山形文軒平瓦 平瓦（縄叩き）丸瓦（無段）隅切丸瓦 隅切平瓦	瓦塔 瓦堂			基壇跡1基と共に多量の小型瓦が発見された。瓦塔と瓦堂は基壇跡からやや離れた地点からまとまって出土した。388
丸瓦（無段） 平瓦（平行叩き） 熨斗瓦	墨書土器「赤徳寺」「大般若」 土師器香炉蓋 土師器鉄鉢形土器		灯明皿 転用硯	東西に細長い丘陵上の3箇所から仏堂跡が発見された。丘陵の西側からは多くの瓦と共に基壇建物跡4基が確認された。415・443
丸瓦（無段） 平瓦（格子叩き・縄叩き）	墨書土器「土寺」「田寺カ」「西カ寺」「山寺」「寺」ヘラ書き土器「寺」瓦塔 香炉蓋 ロクロ土師器鉄鉢形土器	「田」「酒井」「内」「主」「山」「信」「得」「井」「宋」「家」「土家」「十」「井」「土」「土家」「万得」「家土」「天」「大」「四」「ヘラ」「十」「万得」	風字硯 灯明皿 青銅鏡	三間四面の掘立柱建物跡を中心とした寺院跡。267
平瓦（縄叩き）	浄瓶 瓦堂（塔） 香炉蓋	「平」「立／立」	灯明皿	4、5号竪穴住居跡から瓦堂片が出土した。391
丸瓦（無段） 平瓦（格子叩き・縄叩き） 轆	墨書土器「僧」「佛」「西寺」 温石 脚付香炉	「万」「主」「酒武升半／浄／稲五千」「内」「天」「得」「野／野／野」「仁」線刻「十」「土」「二」「×」「月」「有」ヘラ「八」「加」「人」「上」	灯明皿 羽口 鉄滓 鉄製三足鍋 鉄製匙 土馬 硯 陶印 帯金具（巡方）	竪穴住居跡等から多くの仏教関連の墨書土器等が出土した。267
	土師器香炉蓋	「為カ」		古墳周溝から香炉蓋が出土した。418
	土師器香炉蓋	「春」「今」「東」「本カ」「得／得」「得」「大」「○カ」「今継」「中」「信」ヘラ「和」		グリッドから香炉蓋の宝珠紐が出土。363・420
				丘陵頂部から一間四面の掘立柱建物跡が発見された。435
三重圈文縁単弁四葉蓮華文軒丸瓦 三重弧文・二重弧文軒平瓦 丸瓦（無段・有段） 平瓦（格子叩き・縄叩き）				塔基壇と講堂基壇が発見されているが、金堂は未確認である。法隆寺式の伽藍に復原されている。23・426・462・500
	浄瓶			古墳時代の豪族居館跡等が発見されている。433
単弁四葉蓮華文軒丸瓦 丸瓦 平瓦（格子叩き）	墨書土器「加安」	「加」「加安」「副カ内」「内」「十万」「集」		九十九坊廃寺跡に隣接する。寺院関連施設の可能性がある。426
	香炉蓋 水瓶	「南家」「宝カ」		364・421

No	地図	国郡	遺 跡 名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竖穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
37	海土有木	上総国長柄郡	針ヶ谷遺跡 はりがやいせき	長生郡長柄町針ヶ谷字中野	丘陵上	133	一宮川	8世紀第3四半期	8世紀第3四半期	1	5				
38	東金	上総国山辺郡	大椎第1遺跡 おおひだいいいせき	千葉市緑区大椎町656他	台地上	88	村田川	7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明	1					
39	東金	上総国山辺郡	弥三郎第3遺跡 やみさうだいいいせき	千葉市緑区大椎町581他	台地上	82	村田川	7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明	1					
40	東金	上総国山辺郡	小食土廃寺跡 やましどはいじあと	千葉市緑区小食土町698他	丘陵上	97	村田川	8世紀第3四半期～不明	8世紀第3四半期～不明	12	2	基壇建物跡(金堂)	1	溝	
41	東金	上総国山辺郡	鐘つき堂遺跡 かねつきどういせき	千葉市緑区小食土町1178-79他	台地上	80～89	村田川	奈良・平安時代		30	23	土壇墓	52	鍛冶遺構	
42	東金	上総国山辺郡	内野台遺跡 うちのだいいいせき	千葉市緑区小山町内野台	台地上	90	村田川	9世紀前半	9世紀前半	4	5				
43	東金	上総国山辺郡	尾亭遺跡 おていせき	東金市小野字尾亭1270-1他	台地上		真亀川	奈良・平安時代		109	31				
44	東金	上総国山辺郡	大椎第2遺跡 おおひだいいいせき	千葉市緑区小食土町1163-13他	台地上	87～92	村田川	8世紀後半～9世紀	8世紀後半～9世紀	9	3				
45	東金	上総国山辺郡	山田台廃寺跡 おおあみやまだいNo.3遺跡 やまだはいはいせき	山武郡大網白里町	台地上	80	南白亀川								
46	東金	上総国山辺郡	荻生道遺跡 おぎうみちいせき	千葉市緑区小食土町	台地上	97	村田川	古墳時代後期～平安時代	不明	75	14				
47	東金	上総国山辺郡	山荒久遺跡 やまあくいせき	山武郡大網白里町金谷郷	台地上	85	鹿島川	7世紀中葉～9世紀末		143	3				
48	八街	上総国山辺郡	滝台遺跡 たきだいいいせき	八街市滝台松入	台地上	60	真亀川	奈良・平安時代	不明			基壇建物跡		鍛冶遺構	
49	東金	上総国山辺郡	南河原坂第2遺跡 みなみかわらざかいNo.2遺跡	千葉市緑区小食土町1178-34他	台地上	93	村田川	9世紀	9世紀	7	2	溝	1		
50	東金	上総国山辺郡	後沢第1遺跡 うしろざわだいNo.1遺跡	千葉市緑区大椎町936他	台地上	93	村田川	8世紀中葉～9世紀後半		7					
51	蘇我	上総国山辺郡	大野第7遺跡 おおのだいNo.7遺跡	千葉市緑区大木戸町1209-22他	台地上	60～80	村田川	8世紀中葉～9世紀前半	9世紀前半	4	4	方形墳墓	2		

出 土 瓦	仏 教 遺 物	墨 書 土 器	特 殊 遺 物	概 要
			和同開珎	三間四面の掘立柱建物跡を中心とした遺跡。出土須恵器の中に水瓶の可能性もある瓶下半資料がある。440
平瓦（凸面布目）				大量の瓦が発見されたが、瓦を伴う遺構は発見されていない。瓦窯跡の可能性も指摘されている。35・381
重圈文縁単弁四葉蓮華文軒丸瓦 平瓦（凸面布目）				大量の瓦が発見されたが、瓦を伴う遺構は発見されていない。瓦窯跡の可能性も指摘されている。35・381
単弁二十四葉蓮華文・重圈文軒丸瓦 均整唐草文・四葉唐草文・重廊文・木葉文軒平瓦 丸瓦（無段）平瓦（縄叩き）熨斗瓦	土師器鉄鉢形土器	「富□」「干」	ヘラ書き瓦 小鍛冶遺物	溝に区画された基壇建物跡を中心とした寺院跡。280
均整唐草文・唐草文・ヘラ書き波状文軒平瓦	墨書土器「寺東」「佛」「釈迦寺」「□祥寺」	「山万」「井天」	ヘラ書き「万万」 三彩破片	437
	墨書土器「祥寺」		奈良三彩	大型の掘立柱建物跡を中心とした寺院跡。266・381
	瓦塔			二間四面の掘立柱建物跡付近で瓦塔片が出土し、仏堂の可能性が指摘されている。442
平瓦（縄叩き）	ヘラ書き「寺」 土師器鉄鉢形土器 灰釉陶器水瓶	「長」「七」「田」「福」「意□□□」ヘラ「真」「山」「十」「大 □」	三彩小壺蓋 転用硯灯明皿	6号竪穴住居跡からヘラ書き土器「寺」と鉄鉢形土師器が出土。358
均整唐草文軒平瓦	銅椀 銅托 香炉蓋 土師器鉄鉢形土器	「丁」「刑部酒主女」「□（万カ）丁」「井」「万」「生万」「山口万」「立万」「山本」		掘立柱建物から礎石建物に建替えられた四間四面建物跡を中心とした寺院跡。
瓦	瓦塔			小食土廃寺跡に隣接する。神社遺構と指摘されている区画を伴う遺構群が発見されている。201
	瓦塔 土師器鉄鉢形土器		麟鳳八花鏡 鐘鈴 転用硯	竪穴住居跡から仏教遺物が出土。392
瓦	墨書土器「佛」「寺」		印章「山邊郡印」 鉄滓	山邊郡家推定地の一つ。108
平瓦（縄叩き）	浄瓶 土師器鉄鉢形土器	「□（仲カ）子／中村」「子□村」「子中村」「穴□」「孝／穴□□」	灯明皿	5号竪穴住居跡から多くの灯明皿と共に鉄鉢形土器が出土。357
	浄瓶	「井□（直カ）」「山田大□（向カ）」	銅製皿 青銅製男神立像	357
	墨書土器「佛」		灯明皿 羽口	竪穴住居跡から墨書土器「佛」が出土。385

No	地図	国郡	遺 跡 名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
52	茂原	上総国 山辺郡	なかかごだいさ いせき 中鹿子第2遺跡	千葉市緑区 小山町中鹿 子	台地 上	95～ 99	村田 川	8世紀 中葉～ 10世紀 前半	9世紀	68	117				
53	蘇我	上総国 山辺郡	にしおおの だいさ いせき 西大野第1遺跡	千葉市緑区 大木戸町 1206-28他	台地 上	60～ 80	村田 川	9世紀	9世紀 前半	9		土坑	2		
54	東金	上総国 山辺郡	ぶんろくだい ら いせき 文六第6遺跡	千葉市緑区 小食土町 1159-14他	台地 上		村田 川	9世紀 初頭	9世紀 初頭	1					
55	東金	上総国 山辺郡	ぶんろくだい 2 いせき 文六第2遺跡	千葉市緑区 小食土町 1164他	台地 上	88～ 91	村田 川	9世紀 中葉～ 後半	9世紀 中葉	7		土器窯跡	1		
56	八街	上総国 山辺郡	しかあな いせき 鹿穴遺跡	山武郡山武 町森字鹿穴 1811他	台地 上	54	作田 川	8世紀 第3四 半期	8世紀 第3四 半期	3					
57	八街	上総国 山辺郡	おかだ やまいせき 岡田山遺跡	東金市酒蔵 字岡田山 147-1他	台地 上	55	作田 川	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 初頭	9世紀 初頭	6					
58	東金	上総国 山辺郡	たきわがしだい いせき 滝東台遺跡	東金市油井 字丑子台 1164-2他	台地 上	57	真亀 川	6世紀 後半～ 9世紀 後半	9世紀 前半～ 中葉	218	159				
59	東金	上総国 山辺郡	やま だ みずの あ いせき 山田水呑遺跡	東金市山田 字水呑台	台地 上	65～ 70	鹿島 川	8世紀 前半～ 9世紀	9世紀 前半	143	52				
60	東金	上総国 山辺郡	あぶら いこ づかはら いせき 油井古塚原遺跡	東金市油井 字丑子台 1178-8他	台地 上	57	真亀 川	6世紀 後半～ 9世紀 中葉	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 初頭	79	22				
61	八街	上総国 山辺郡	にいぼり いせき 新堀遺跡	東金市滝沢 字新堀546- 1他	台地 上	56	真亀 川	8世紀 中葉～ 9世紀 後半	9世紀 中葉	4					
62	東金	上総国 山辺郡	みやだい いせき 宮台遺跡	山武郡大網 白里町萱野 762他	台地 上	90～ 96	村田 川	8世紀 後半～ 9世紀	8世紀 第4四 半期	23	2				
63	東金	上総国 山辺郡	みなみむぎだい いせき 南麦台遺跡	山武郡大網 白里町萱野 字南麦台 778他	台地 上	90～ 96	村田 川	7世紀 ～10世 紀	9世紀 前半～ 中葉	146	149	方形周溝 状遺構	2		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	墨書土器「寺」「佛カ」	「穴」「行」「来」「大□」 「太」「於夫井」「大畠」 「太仁田」「王立賀」「立 加」「王内」「刑部」「勝」 「刀」「國厨」「草」「草工」 「上万」「造能」「太継」 「細尾」「□岑」「山田」 「丈□」「福」「酒坏」「長 本」「櫻」「傍」	帶金具（鉈尾） 萬年 通寶	竪穴住居跡から仏教遺物が 出土。356
	墨書土器「本／佛佛」		灯明皿	386
	墨書土器「砂田東寺」 「祥寺」			381
平瓦（縄叩き）	墨書土器「祥寺」	「一万」	八花鏡	2号竪穴住居跡から墨書土 器「祥寺」が出土。2・372
	須恵器鉄鉢形土器		灯明皿 転用硯	竪穴住居跡から鉄鉢形土器 が出土。415
丸瓦	墨書土器「前寺□」		灯明皿	415
丸瓦 平瓦（格子叩き）	墨書土器「三井寺」「佛」	「中人」「坂本」「穴井十」 「布」「子梨原カ」「廣人」 「弓」「山川」「政」「山」 「田」「福□」「穴井若」 「具」「万」「高山」「酒□」 「道」「布万」「三井」「大 仁井カ」「万得」「高」「得 家」「若女坏」「井」「太竹」 「吉」「園」		竪穴住居跡H-119から墨書 土器「三井寺」「佛」「寺」 「酒□」などがまとまって 出土した。417・406
	土師器鉄鉢形土器	「佐」「小付」「井」「山口 館」「上川」「散□□」「上／ 上」「上田」「□（缶カ）」 「山邊」「山邊大」「家正 ×」「山佐」「山辺大」 「佐倉」「佐倉・十」「舎」 「中野」「□□（馬雁カ）」 「加／加」「真」	灯明皿 帶金具（鉈尾）	竪穴住居跡から鉄鉢形土器 が出土。190
	墨書土器「寺」	「廣得」「加万カ」「万」 「万一カ」「門」「大生」 「福」「万福」「半」「上井」 「大井」「山□万」「山邊」 「芳」「丁」「大」「酒カ」 「佐カ」 線刻「十」「上」 「中」		竪穴住居跡H-155から墨書 土器「寺」が出土。417
	土師器鉄鉢形土器		灯明皿	竪穴住居跡から鉄鉢形土器 が出土。415
	墨書土器「大福□（寺 カ）」	「新カ」「倉」「元カ」「庁 原」「利」「酒／□」「中」 ヘラ「未」		竪穴住居跡から墨書土器 「大福□（寺カ）」が出土。 318
	墨書土器「殿寺」	「西」「葛」「中上」「長本」 「草新」「草」「太」「草野」 「物真」「豊」「□子良」 「酒／草」「加本」「□□ （所万カ）」「山 中上」 ヘラ「金」 線刻「大」	墨書土器 帶金具（鉈 具・巡方） 石製紡錘 車線刻「下総国千葉郡 千葉郷」	D地区78号竪穴住居跡から 墨書土器「殿寺」が出土。 393